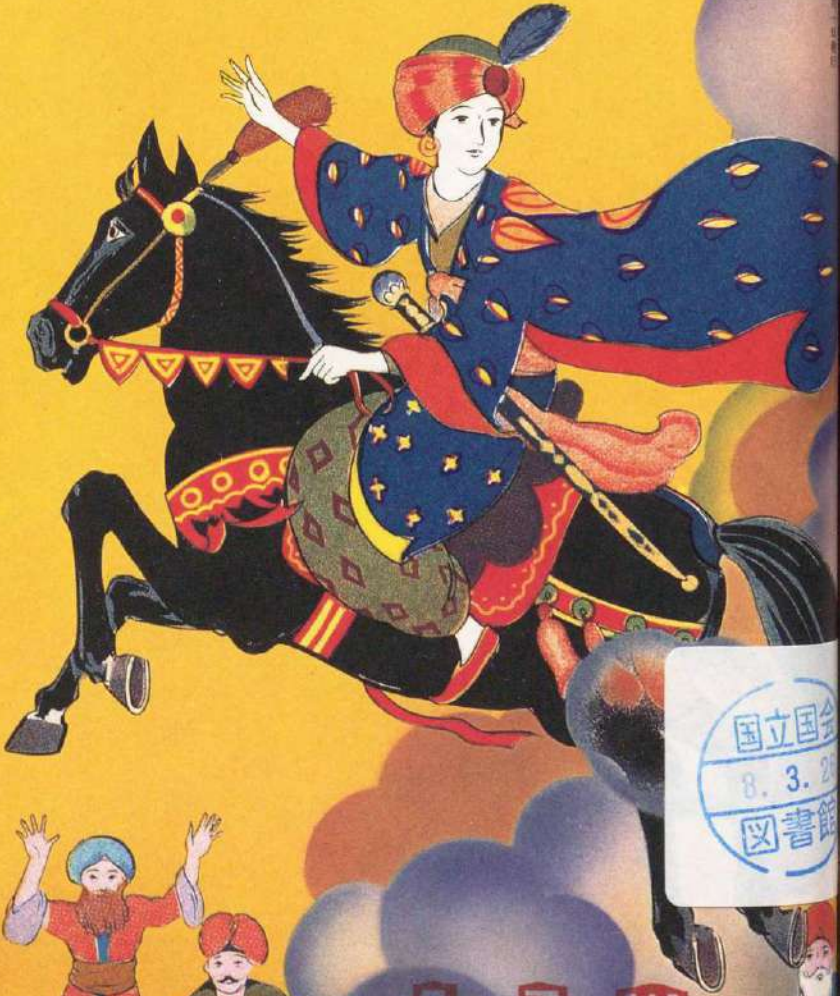


Z32-B88

金の星



国立国会
8.3.28
図書館

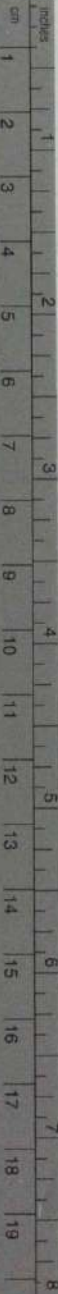
四月号

第十卷才四号

『金の星』第一巻第三号

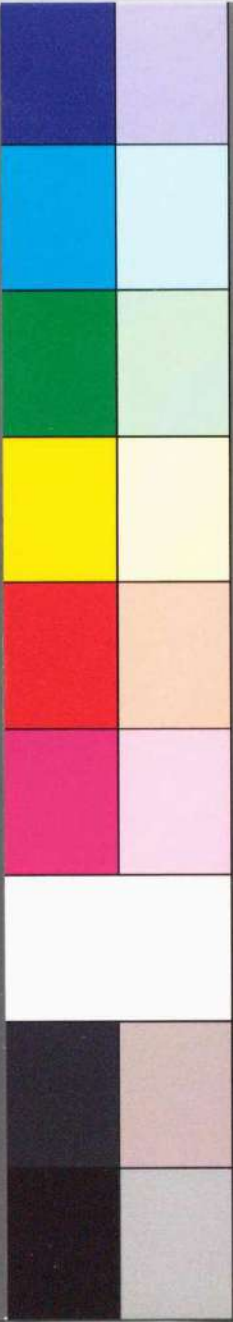
（昭和二十一年三月）

【定價金四十錢 送料一錢五厘】



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

MARUZEN

新異 童話の傑作集

第一輯 第二輯 家協會 日本童話選集

第一輯 (刊既) 初山滋 (繪) 岡本蹄一 初山 滋 (繪) 菊判 五四〇頁 定價三圓七十五錢
 (繪) 川上 那 武井雄 (繪) 村山知義 (三色版) 三八 送料廿七錢

第二輯 (刊新) 初山滋 (繪) 川上 四郎 岡本蹄一 (繪) 菊判 五五二頁 定價三圓七十五錢
 (繪) 本田庄太郎 布目敏行 (編) 三色版 三九・四色版一・送料廿七錢

小川未明著 未明童話集 第一卷、第二卷 各三 送料各十八錢

鹿島鳴秋著 童話集 キヤベツのお家 原書三四四程度 二圓 送料十八錢

パーネット夫人原作 久保田万太郎譯 兒童劇 小公女 定價二圓卅錢 送料十二錢

保積稻天著 お伽(1)素 鳴命 定價一圓五十錢 送料十八錢

武井雄武 晰畫

各一冊一圓卅錢 各料八錢 No. I

あるき太郎 百頁 二色版 一、三色版 五九二
 おもちや箱 百頁 三色版 八、凸版 九〇



No. II 動物の村 百頁 口繪 三色版 凸版



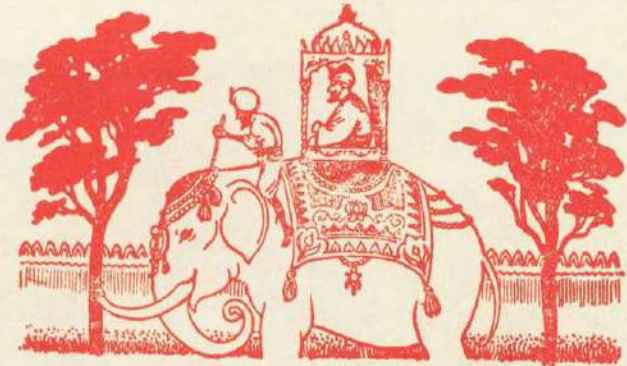
(通橋本日本京東)

丸善株式會社

丸山編撰 丸山編撰

大京神 名古屋 反

ルピ丸・田三・田神—京東



目次

魔法の馬(表紙・石版)……………寺田良作
 おやつ時(口繪・三色版)……………寺内萬治郎
 新おとぎ唄……………野口雨情
 消えぬ幻……………沖野岩三郎
 四頭馬車……………津谷孝吉
 白鳥姫物語……………高橋里江
重い軽い—高い低い……………
 新ぼら博士……………三井信衛
 不思議な命拾ひ……………小山寛二
 禿の王様……………三宅房子
 幽霊の穴……………樺山千代
 ひょうたん童子……………立石美和
迷宮の中の子供を救けて下さい……………
(海)

楠正成の小さい頃(童話)……………田中宇一郎

おびんづるさん(児童劇)……………久米元一

鬼が梅干になつた話(童話)……………羽鳥古山

仙人のしくじり(童話)……………西川喜平

舜天丸王子(童話)……………三島霜川

髯の長さ三千尺(童話)……………廣瀬龍太郎

ぼくの生れた家(童話)……………三木露風

海へ……………野口雨情選

か……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

……………野口雨情選

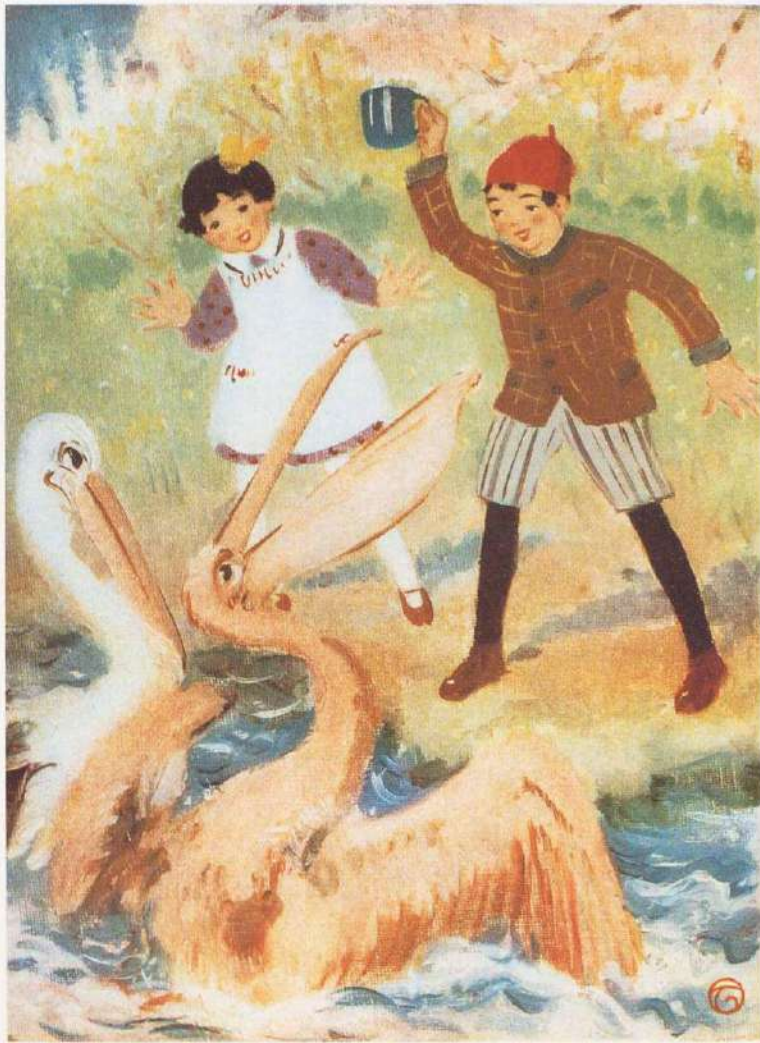
……………野口雨情選

……………野口雨情選

世界童話欄

赤い符(支那) 牛千 正(セルビヤ)
 同猫と同犬(ドイツ) 謎を解く王子(長篇)

時 つ や お



畫 郎 治 萬 內 寺

野口雨情作品記念頒布會

野口雨情氏の作品（童話、民話、座右銘、其他）を記念するために揮毫御希望の際は本會にて取扱ひいたします。

本會は揮毫料を保管蓄積し、同氏多年の希望による「薄費學生寄宿舎」（東京郊外へ設立の基金）といたします。同寄宿舎は他よりの寄附金等は一切謝絶し、揮毫料の蓄積をまつて設立する雨情氏獨力の事業であります。從來の親疎を問はず御希望の際は左の規定を御了承願ひます。

- 短冊 金三圓 色紙 金五圓
 - 額面、扇面 金七圓 半切 金十圓
- （但し、用紙は、御指定の際は、御依頼者持ちのこと）

野口雨情 作品記念頒布會

東京市外田端三五一金の星社内
金の星社振替番號東京五九九六番

謹告 榮光

本會創立以來廿六年間通信教授に依つて公衆の利益を興し、其功績著者名なりとの理由により、今般本會主事に對し榮光ある藍綬褒章を下賜せられ、今や全力を傾倒して講義録の改訂に、通信教授社の完成に努めてゐる。

本會廿五年間の業績顯著となり

藍綬褒章

を下賜せらる

大日本國民中學會

本會事務所全景

創立は日本で一番古く内容は日本で一番新しい



東京河原町大日本國民中學會事務所全景

小學校 卒業生

のうちにいろいろな事情で上の學校へ行けない諸君は日本が一番信用の厚い基礎の堅固な本會へ入會して名實共に日本第一の中學講義録に就いて學べ!!

中學講義録

本會の基礎が固い、信用が厚い、學制が正しい、内容が新しい、講師が偉い、會費が廉い、卒業が早い、指導が良い、教授法が巧い、成功が確い、
 一、基礎が固い
 二、信用が厚い
 三、學制が正しい
 四、内容が新しい
 五、講師が偉い
 六、會費が廉い
 七、卒業が早い
 八、指導が良い
 九、教授法が巧い
 十、成功が確い

◎獨學で立派に中學卒業が出来る!!

▽一日早く入會すれば
 ▽一日早く成功出来る

講義見本規則代進呈

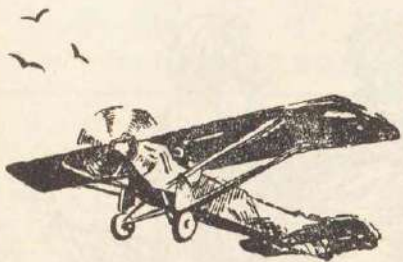


親孝行な

少年少女の話

大戸喜一郎先生著 定價金壹圓廿錢
岩岡とも枝先生畫 送料 十錢

親孝行をする事は日本人なら誰でも知つてゐます。しかし、本當の親孝行はなかく出来ないので、まして、貧乏な家に生れて、その日その日の食物にも困つてゐるやうな家に生れた少年少女でありながら、自分で親を養つて、立派な人になつた人達のお話は、是非皆さんがお読みにならなければなりません。この「親孝行な少年少女の話」といふ本は、さういふ立派な行をした少年少女のお話ばかりを集めた本です。日本ばかりでなく、支那や西洋のお話も澤山に入つてゐます。しかも、誰でも知つてゐるやうな有名な人の親孝行のお話でなく、餘り世間に知られてゐないで、さうして本當に涙の出るやうな尊い行をした少年少女のお話ばかりです。近くは學校や郡で表彰され、その土地の模範として表彰されたお話もあり、何れも皆さんに親しみの深いお話ばかりです。著者の大戸先生は長い間非常な苦心をなさつて此の名著をお書きになりました。實地にその場所へ行つて調べたり、それは、非常な苦心の結果出来上つた本ですから、お父様もお母様も、此の本は皆様のために喜んで買つて下さるに違ひありません。



少年大飛行家物語

三井信衛先生著・羽鳥古山畫伯裝幀・挿紙

四六判箱入頗美本
内容二六〇頁
挿畫三色版他五枚
定價壹圓廿錢
送料 十錢

大平洋横断飛行は近づいた。新時代の少年諸君よ、日本で初めて出版された飛行家の話を読んで下さい。この本には聞くも手に汗を握るリンドバーグ大尉の大西洋をいつきに飛び越えた決死的冒險實話、幾度か死の運命に出あひ乍ら、尙も屈せず、北極の大氷原を南北に横断したアムンゼンの悲壯な探検飛行、幾度度墜落して、初めて航空船の飛行に成功したツエツペリンの苦心談等、これを読むと實際飛行機に乗つて決死の冒險をしてゐる様にひや／＼させられます。



金の星社編・寺田良作先生裝幀
繪入
アラビヤン・ナイト

菊判箱入美本 定價金貳圓五十錢
内容二六〇頁 送料十二錢

此の「アラビヤン・ナイト」は何といふ立派な美しい本でせう。書棚に飾つて置いただけでも楽しみです。まして一つ一つと此の中のお話を讀んで行つたら、どんなに愉快でせう。中のお話は「アラビヤン・ナイト」の中でも一番面白くて有名な「アリババと四十人の泥棒」「魔法の馬」「漁師と悪魔」「ひげの長さが三千尺」「シンドバットの航海」などを集めてありますから、幾度讀んでも讀みあきません。又、挿畫は世界でも有名な畫で、それをそのまゝ版にして澤山に入れていますから、畫とお話と兩方でこんなに良い本はありません。しかも定價が驚く程安いのですから、是非一度書店でござら下さい。

沖野先生の童話讀本

◇四十金料送◇圓壹金冊各價定◇本美入第判六四◇

<p>5 孝 行 息 子 (向級上)</p>	<p>4 海 を 越 え て (向級上)</p>	<p>3 笛 吹 川 (向級上)</p>	<p>2 金 の 釣 瓶 (向級初)</p>	<p>1 赤 い 猫 (向級初)</p>	<p>沖野岩三郎先生の童話讀本は、ありふれた外國のお話を集めたやうな種類の童話讀本とは違ひます。宗教的文學者として名聲ある沖野先生は、まか幼稚園に、小學校に、日曜學校に、自ら指導者として深い經驗を持つてをられます。従つて此の童話讀本を讀まれた人は、これこそ日本の少年少女に與へねばならぬ本であることを知られるでせう。學校に、家庭に、今や大歓迎を受けてをります。是非御一讀を願ひます。</p>
<p>この集には「猫のぬい村」「水汲み」「愚助大和由」「ルオ」と涼也」「油うり」「弟子入り」「李如松の話」「不意の敵」「お日様問答」「眠れんくらの鬼瓦」「孝行息子」その他二篇の虎玉のやうな十三篇が集つてあります。</p>	<p>この巻には、有名なホーブルス號の沈没の話をはじめ、事實から材料を取つたものばかり集めてあります。いづれも本當のお話だけに感動も深く、創作童話として現代まれに見る傑作として評判の高いものです。</p>	<p>この巻には、有名なホーブルス號の沈没の話をはじめ、事實から材料を取つたものばかり集めてあります。いづれも本當のお話だけに感動も深く、創作童話として現代まれに見る傑作として評判の高いものです。</p>	<p>この巻には、沖野先生が傑作中の傑作として、先生自身も得意にして各地で話される「十人の大將」と云ふ一大長篇をはじめ「金のつるべ」「二つの讀り」など、これこそ兒童に讀ませたいと思ふものばかり集められてあります。</p>	<p>有名な「熊と猪」「山さち川さち」「三つの寢床」などのやうな不朽の名作十五篇で一冊になつてあります。これ等十五のお話は、恐らく幾度讀み返してもあきないでせう。初級向きとして大きい活字で組んであります。</p>	

系大著名女少年少界世

(26) 新ロビンソン漂流記	(25) ハムレット	(24) 爲朝一代記	(23) 青い鳥	(22) 不思議國めぐり	(21) 母を尋ねて三千里	(20) 小公子	(19) アンデルセン童話	(18) ギリシヤ英雄物語	(17) 奴隸トム物語
(36) トルストイ童話集	(35) ジーグフリード王子物語	(34) フランダースの少年	(33) 平家物語	(32) みななし	(31) 竹取物語	(30) ジャンバルチャン <small>(あゝ無情)</small>	(29) ロミオとジュリエット	(28) 少年鼓手	(27) ホムペイ最後の日

系大著名女少年少界世

(8) 神話オデッセー物語	(7) アラビヤン・ナイト	(6) ロビン・フッド物語	(5) ガリバー旅行記	(4) 神話イリアッド物語	(3) ドン・キホーテ	(2) 寶島探險物語	(1) ロビンソン漂流記	(9) シエークスピア物語	(10) ゲリクム童話	(11) 繪入イソップ物語	(12) 神話本古事記	(13) キリスト傳新約物語	(14) 西遊記	(15) ローマ英雄物語	(16) 聖書物語
---------------	---------------	---------------	-------------	---------------	-------------	------------	--------------	---------------	-------------	---------------	-------------	----------------	----------	--------------	-----------

金の星社の「世界少年少女名著大系」は、少年少女の爲に、世界的名著を、最もわかりやすく紹介したもので、しかも、有名なる畫家の装幀になり、クロス製本箱入の立派な本であります。ありふれたる名著の紹介とは異り、金の星社が、全力をそいで完成しつゝある、一大叢書でありますから、今や熱烈なる歓迎を受け、各圖書館は勿論のこと、少年少女のある家庭には、是非なくてはならぬ備品とされて居ります。四六判箱入、金文字入、挿畫三色版他十葉(定價各冊金九十錢◇送料十二錢)

著名刊新の行發社蘭金

少年少女科學大系第九編
松平道夫著 池上浩裝幀
兒童電氣學

四六判箱入美本
ドイツ式裝幀
本文百八十二頁
定價金 一圓
送料十二錢

第四編
加治亮介編
池上浩裝幀
新撰組
(折藤勇と土方歳三)

四六判箱入美本
本文約二百頁
原色版二枚

第三編
川名芳郎編
池上浩裝幀
黑船の襲來
(ペリー來朝と生麥事件)

凸版刷挿繪豐富
定價各金一圓
送料十二錢

世界名篇物語叢書第十三編
加治亮介編 高坂元三裝幀
日米戰爭
(太平洋大海戰)

四六判箱入美本
本文百八十頁
定價金九十錢
送料十二錢

世界童話叢書第十二編
甲田正夫編 高坂元三裝幀
日本童話集

四六判箱入美本
本文三〇〇頁
原色版凸版豐富
定價金一圓五十錢
送料十二錢

細い針金を傳つて何千哩も離れた外國と通信を交した
り、時にはラヂオのやうに、その針金さへも使はずと思ふ事
を得られるといふ不可思議極まる電氣の正體を、誰れにも分
る様に記した趣味と實益とを兼ね備へた本書は是非とも皆
に御一讀をお勧めすべき名著だと信じます。

(次刊—兒童發明界)

幕末の京都を中心に活動した新撰組の活躍史です。取分け
自ら大久保大和と名乗つて第二の彦左衛門を以て任じた近藤
勇の活躍！之に加ふるに土方歳三を始めとした新撰組隊
士の火のやうな意氣は、徳川三百年の終りを飾る幕府の誇り
でもあり、哀史でもあります。(次刊—大西と勝安房)

(次刊—大西と勝安房)

徳川氏三百年の榮華の夢を打ち破つた、所謂黒船の來朝を
始めとして、之に最も關係の深い高田屋嘉兵衛の話、吉田
松陰の話、生麥事件の話と、およそ黒船に縁ある事件は大
小となく集つてをります。取分け松陰渡航の企の如きは立
派な修身課、教科書とも言はるべきものでせう。

本書に現れる軍艦の噸數、力、砲口、艦名は何れも事實
そのまゝで、又不幸にして日米間に戦端が開かれたら
之以外の策謀は立てられないであらうといはれる合理的
な策謀の下に大台戦を紙上に展開する血湧き肉躍る一大快
著です。(次刊—前世界物語)

(次刊—前世界物語)

東西諸國の童話を讀んだ後で自分の國の童話を讀むのは大
變面白い事です。特に皆様の未だ御存知ないやうな珍しい
もののみ集めました。本書は必ず御期待以上の面白いものだ
らうと存じます。(次刊—ザンマルク話)

(次刊—ザンマルク話)

星の金

號 月 四



寶の國の女王

(お話しは一二三頁にあります)

(通卷第百壹號)

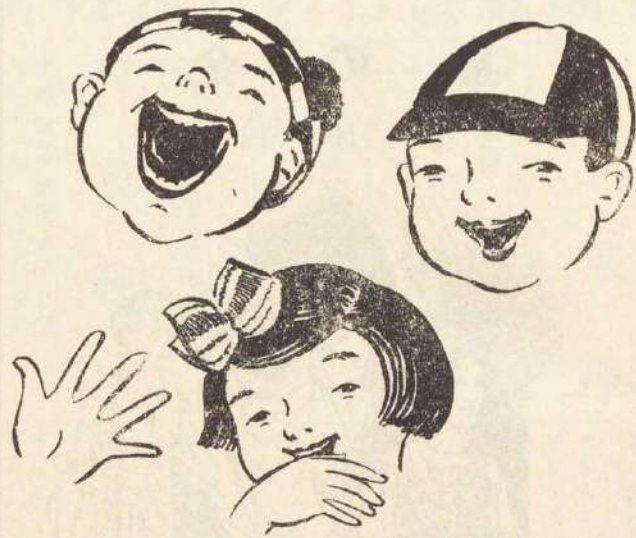
東京市外 蘭金社 振替東京一〇七番 電話小石川六六一番



カラ〜笑ふは
高笑ひ。
ケタ〜笑へ
さア笑へ
ケタ〜笑ふは
馬鹿笑ひ。
さアさア笑へ
さア笑へ
轉んで泣く子は
物笑ひ。

寺内萬治郎畫

三



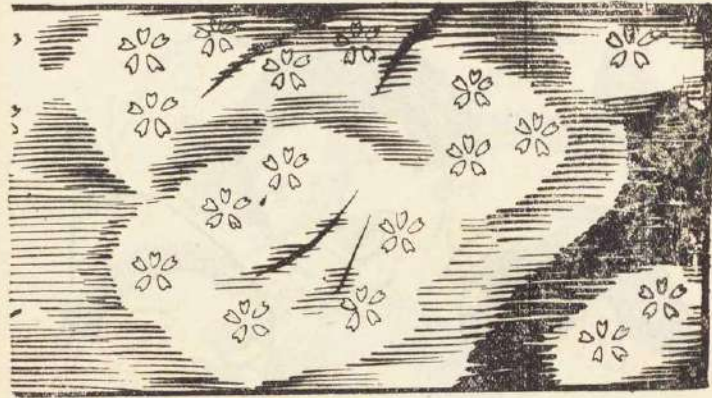
ニコ〜笑へ
さア笑へ
ニコ〜笑ふは
福笑ひ。
カラ〜笑へ
さア笑へ

新おとぎ唄 (その二)

二

福笑ひ、高笑ひ、馬鹿笑ひ、
物笑ひ

野口雨情



消えぬ幻

沖野岩三郎
寺内萬治郎畫

はしがき

應永三十年の春でした。紀州那賀郡の龍門山の麓に住んでゐる龍門兵衛のところへ、一人の使が手紙をもつてまゐりました。それは吉野山の海藏寺といふお寺に住んでゐる、元楠方の武士で、今はお坊さんになつてゐる妙諦といふ人から、吉野山の櫻が今丁度見頃であるから、此使と一緒に觀にいらつしやいといふ誘ひの手紙でした。

兵衛の家は代々楠方の武士で、お祖父さまの三郎兵衛は、正成公の築いた河内の金剛山の城が、元中九年の戦ひで落城する時、僅

四五十人の武士と一緒に最後まで踏止つて、畠山義深の六千餘騎をさん／＼悩ました程の勇者でした。お父さまの俊行は、應永五年に楠正秀が和泉の足利勢を攻めに行つた時、從軍して日ぐらし時で流矢にあたつて亡くなられたのでした。

お父様の亡くなられた時、兵衛はまだ十一歳の少年でした。楠方の味方だといふので、いつ足利勢から召捕りに来るかも知れないから、兵衛はおつ母さんと二人で、高野麓の學文路といふ村の百姓家に隠れてゐました。けれども其後楠方がすつかり滅されてしまつたので、足利勢の方でも、そんなに厳しい詮議をしなくなつたら、兵衛は十五歳の應永九年に、おつ母さんと二人で龍門山の麓に來て、そこで、村の子供たちを集めて讀書を教へながら暮らすことになりました。

兵衛が龍門山の麓に來た年の春、おつ母さんと二人で、荒川の里にゐる、これも元は楠方の武士であつた松山洞里といふ學者のお家を訪ねました。其時洞里の家で讀み書きの稽古をしてゐた小僧さんが妙諦だつたのです。

洞里先生は兵衛母子を大へん叮嚀にもてなして、裏の離れ坐敷で



お夕飯の御馳走をいたしました。妙諦がお給仕に来て、縁側のところに茶器を描いて、静に障子を開いた時、洞里先生は驚いたやうに立ち上つて、

「妙諦、あれ見よ。あれが慧星といふものだ。」

と云つて、紀の川を隔てた向ふ山の頂を指さしました。

兵衛も思はず立ち上つて縁側に出て行つて洞里先生の指さす方を見ますと、山の頂邊から二間ばかりも離れたと思ふ所に、長い尾を曳いた大きな星が輝いてゐました。星の尾は、山の向ふまで延びてゐます。

「騒動が起らなければいいが……」

洞里先生は獨語のやうに言つて元の席に歸りました。其頃の人は慧星が天に現はれるのは、世の亂れる徴だと思つてゐたのでした。

洞里先生は食事をしながら、慧星についていろいろの不思議な話をいたしました。それをきいた兵衛

出しました。けれども兵衛の待つてゐる戦争は起りませんでした。

兵衛が十八歳の應永十二年の春、奈良の春日神社の神木が六千本も一度に枯れてしまつたので、世間の人たちは、これこそさつと戦争の起る徴だと申しました。けれども別に戦争も起らず、三年五年と過ぎてしまひました。

さうしてゐるうちに、或日妙諦が兵衛の家を訪ねて来て、自分はこれから吉野山の海藏寺といふ寺の住職になつて行くから、暫くお目にかゝれないと思つて、お別れに来たと申しました。で、兵衛は無理に妙諦を引とめて二三日逗留するやうに勸めて、其晩は一睡もせずいろいろの話をしました。話のうち兵衛は、

「今までお尋ねしようと思つて出来なかつたのですが、あなたは荒川のお寺の小僧さんでありながら、何故にお寺の和尚様からお經を習はないで、洞里先

は氣味悪い思ひをしながら、おつ母さんと一緒に龍門山の麓に歸りましたが、家に歸つた後も、殆ど一夜を眠らないで、何度も何度も外に出て慧星を見たのでした。

兵衛は自分のお父さまも、おちいさまも、楠方の武士として南朝に忠義をつくしたのだといふことを知つてゐましたから、今にも足利の天下が滅びるやうな大騒動が起るのではないかと思ひました。もしも、そんな事があつたなら、自分は諸所方々に隠れてゐる楠方の武士と一緒に、足利勢を征伐する軍を起さなければならぬと考へました。そして、洞里先生の云はれたやうに足利の天下が一日も早く亂れてくれればいいと思ひました。

その年の夏は日本中が大旱でした。秋は大洪水で紀の川縁の家が流され、田畑がみんな水に浸つて作物がすつかり荒されてしまひました。冬は大地震で京都あたりでは家が何千軒も潰れて多勢の負傷人が

生から漢學を習つたのですか。」と問ひました。すると妙諦は申しました。

「私は楠正成公の親戚に當る者で、祖父さんもお父さんも、みんな足利勢のために殺されてしまつたのです。だから洞里先生が、私をお寺の小僧にして表向はお坊さんになると見せかけ、内證で私に軍學や劍術を教へて下さつたのです。」

それをきいた兵衛は全く驚いてしまひました。それは自分も楠一家の自内で、いつか南朝方の戦争が起つたなら、すぐさま馳せ向ふ覺悟で、ゐたからです。そこで、兵衛も自分の素性を打明けて、家代々に傳はる系圖を妙諦に見せすと、妙諦は洞里先生から内々その事を聞いてゐたと言つて、自分も懐から一幅の巻物を取り出してみせました。それは後々まで櫻井の兵書と云つて、非常に珍しがられた正成公の覺え書でありました。

素性を明し合つてみれば、同じ楠家の血統です



から、其晩二人は兄弟の約束をして、機があらば一旗挙げようといふ約束までいたしました。

翌る朝妙諦は早く兵衛の家を出ました。兵衛は紀の川を渡つて、大和路の入口まで妙諦を送つて行つて、そこで別れました。別れる時妙諦は申しました。

「慧星が出たり、神木が枯れたりしたつて天下の亂れる筈はない。一國の政治を執る足利將軍の心が亂れて政治を疎かにすれば、慧星が出なくとも、神木が枯れなくとも自ら天下は亂れる。天下が亂れたなら日本中の人々は、きつと楠、新田、菊池の諸族の事を想ひ起す。其時南朝四代の行在所であつた、あの吉野山から菊水の旗を翻へして大義を唱へたならば、天下の諸豪傑は、悉く其の旗風に靡くに相違な

5.1
それをさいた兵衛は、今にも軍を起しさらな勢

で、
「あなたが吉野、赤坂に陣を張れば、金剛山に立籠

るべき者は、私でなければならぬ。」と申しました。すると妙諦も非常に喜んで、路の上に蹲んで棒ちぎれて土に地圖を描いて、敵がこゝを攻めるなら味方はこちらから斯う討つて出るとか、敵がこちらへ襲ひかゝるなら、味方は此所からどうするとか、もう戦争でも起つてゐるやうに熱心に話しました。

二人がこんな話をしたのは、小い地藏堂の前でした。淋しい田舎道ですから、道行く人も少いので、二人の聲は可なり高かつたのです。けれども用心深い妙諦は、兵衛に別れる時、草鞋の裏で地面に描いた地圖を踏消して置きました。

近いうちに、また必ず會ふ約束をして、二人が西と東に別れた時、地藏堂の中から、そらツと姿を現した一人の若者がありました。

若者は妙諦が踏み消した地面の上を、叮嚀に調べて、それを懐から取出した手帳に書寫しました。

それ以來、妙諦が紀州へ来るたびに、兵衛が吉野

へ行くたびに、必ず見え隠れにその後を跟いて行く人影がありました。けれども妙諦も兵衛も、自分の後にそんな黒い影がついて来るとは夢にも知りませんでした。

そのうちに、足利幕府の政治は段々亂れて來ました。將軍義持の弟義嗣は、自分が將軍になりたいと云つて軍を起して殺されました。足利家の強い家來である山名、畠山、細川、赤松などいふ武士たちも、そろ／＼氣まをを始めた。

應永三十年の春、將軍義持は征夷大將軍の官職を長男の義量に譲つて、其他の息子たちを、みんな髪を剃らせて、お寺のお坊さんにしてしまひました。

其の噂をきいた兵衛も、何となく軍を起すべき時機が來たやうに思はれますので、一度吉野へ行つて妙諦に相談しようかと思つてゐる所へ、妙諦の方から櫻が咲いたから觀に來ないかといふ手紙をくれたので、早速出かけることにいたしました。

其時兵衛は三十六歳で、兵太といふ三歳の息子がありました。兵衛の奥様は兵太を産んだ年の秋、急病で亡くなられたので、乳母を儲つて兵太を育て、おました。

兵衛は乳母に兵太の事をくれ／＼も頼み置いて吉野へ出立しましたが、其晩の夜半頃、一人の曲者が兵衛の留守宅へ忍び込んで、寝入つてゐる兵太を盗んで何所ともなく逃げ去つてしまひました。

乳母が狂人のやうになつて兵太を探してゐるうちに、兵衛と妙諦が吉野山の海藏寺で、足利勢百餘人に取圍まれて討死したといふ噂が、龍門の里に傳はりました。

私の話は、これから始まるのです。

一、塔の中

紀州の高野山から十里ばかり山奥に、天の川といふ所があります。そこには誰の建てたとも知れない

古い／＼お寺があります。お寺の本堂も庫裏も、もう軒が傾いて柱が朽ちてゐます。雨が漏るので、盛はすつかり腐つてゐます。十年も二十年も人氣の無い此のお寺には、狐や狸がこゝを吾もの顔に佛壇の上に寝たり、經机の下で子を育てたりしてゐます。

こんな古寺ではあるが、其の西側に建つてゐる五重の塔だけは、赤く塗つた柱の色が少しく褪せてゐるだけで、柱も朽ちず屋根もいたまず、完全に残つてゐます。一年に一回も人の來る筈のない、此の淋しい山奥の古寺に、近頃時々人聲が聞えます。しかもそれは五重の塔の上からです。

『母あちやん、五重の塔はどうして、こんなにぐらぐら揺れるの?』

五階の上の欄干の所に出て來た七歳か八歳の可愛い子供は、室の中をふり向きながら問ひました。

『かうして、ぐら／＼揺れるやうにしてあるから、こんな高い塔でも、風に倒れないんですよ。これが

もしも、ちつとも揺れないやうに建て、あつたなら、地震でも揺らうものなら、すぐに倒れてしまふぢやないの?』

顔は見えないが、その聲は大變優しく聞えます。幾抱へもあるやうな大木の枝が繁り合つて、五重の塔の二階三階までは太陽の光が入りません。しかし四階五階の窓からは、暖い光線が十分に入つて來ます。

『坊やは、やつぱりあの岩穴より、こんな高い塔の上がいゝでせう?』と言ひながら狭い廊下へ出て來たのは、年の頃は四十歳とも思はれる、色の白い眼元のさり／＼とした女でした。

『そりやあ洞穴より塔の方がいゝワ。ぐら／＼揺れるあの階段を登つたり降りたりするのが面白いや。』子供は欄干から降りて、女の側に走つて行つて、其の膝に取籠りました。

『さあ、お勉強をして、それから御飯にいたしませ

う。」

女は子供の頭を撫でながら申しました。

「お勉強がすんだら、すぐ御飯よ。御飯がすんだら、あの谷の所へ粟を拾ひに行きませう。母あちやんも一緒に下さい。」

子供は塔の中へ入りました。そこには小さい經机



が据えてあつて、その上に一巻の巻物が載せてあります。子供は聲を出して読み始めました。

昔、唐土に王元之といふ人あり、六七歳より文章巧みにして、よく古今の書に通ず。或日大守に見えし時、大守元之を試みんとて、鸚鵡能言、争似鳳と申しければ、元之其の舌も引あへぬに、蜘蛛雖巧不如鸞と答へければ、列座の博學老臣も、げに生れながらの智者なりとほめたへけるとぞ。」

子供はそこまで読んで、何と思つたか、ひたりと黙つてしまいました。

「次を忘れたの？……鳳は靈鳥にして雄を鳳といひ雌を鳳といふ……ちやないの？」

女は子供の方を見ました。けれども子供はまだ黙つてゐます。

「坊や、どうしたんです？」

女は心配さうに少しく膝を進めました。すると今



まで眼を閉ぢてゐた子供は、ぱつちりと眼を開けて

「今ネ、坊やは夢を見たのよ、面白い夢を。」

「まあ、夢を？」

「ま、坊やが大きなお家の中に坐つてゐたの。う

ちのお父様とは異ふ別のお父様が、坊やの側に居るのよ。そのお父様の後には甲櫃があつて、水の上に菊の花の泛いてゐる紋が描いてあるの。弓があつたり槍があつたり、長い刀もあつたわよ。御本を讀んでゐるうちに、げに生れながらの智者なり……といふ所まで来ると、すうッと坊やの眼の前に、人の顔が見えて來たの。だけど、あれはお父様ぢや無いのね。」

子供は幻の事は忘れたやうに、また次の文章を讀み始めました。

女は悲しさに黙つて俯向きしました。そして棚の上にあつた巻物の一軸を取らして來て、子供の前に描いて、ほろ／＼と涙を流しました。

「母あちやん、どうして泣くの。ね、かあちやん。」

子供は勉強中に夢を見たといつた事が悪かつたのではなからうかと、心配さうに女の顔を見つめました。



四頭馬車

津谷孝吉

岩岡とも枝畫

カナダとアメリカとの國境に近い、ハアムスランドの町に、ロタアル・ギブソンといふ一人の伯爵が住んでをりました。

ギブソン伯爵は十年ほど前に、イギリスから移住をした人で、たくさんな土地を持つてゐた上に、そ

の町には大きな、工場を開いてゐたのでした。

人々は伯爵を、心から敬つてゐました。それは伯爵が工場主であり、大地主であるだけではなく、ほんたうに同情の篤い、まるで神様のやうな人であつたからです。

さて、その製粉工場には、ギルバートといふ、十五になる少年が雇はれてゐました。両親も何もな

ギルバート少年は、まるで伯爵を父のやうに慕つては、日々毎日を只けんめいに、工場で働いてゐたのでした。

ある寒い冬の朝でした。ギルバートが工場の門を入ると、そこへ来た一人の友達が、

「ねえギルバート」と話しかけました。「伯爵様は今日、急にダンヴァールドまで、お越しになるんだつて。」

「ダンヴァールドへ？　ぢや、馬車に乗つておいでになるんだね？」

「さあ、それがね、伯爵様のお邸にゐる駟者のジョルダンが、急に病氣になつて、馬車を進めることが出来なくなつたんだよ。それで伯爵様は、誰かいゝ駟者はないかと、お探しになつてるんださうだ。」

それを聞くとギルバートは、いつまでも工場の門に立つて、伯爵の来るのを待つてをりました。やがて作業の始まる一寸前に、ギブソン伯爵が工場の門

を入つて來ると、ギルバートはその側へ靜かに寄つて、

「伯爵様」と目を輝かせながら言ふのでした。「伯爵様、駟者は見つかりましたのでございますか？」

「あゝ、お前はギルバートかい。」

身分が賤しからうが高からうが、何の分け距てもない伯爵ギブソンは、ギルバートにもまるで、可愛

い孫でゝもあるやうに、さう答へるのでありました。「いやギルバート、それでわしは大弱りなんだ。急いで今日の夕方、ダンヴァールドまで行かなくつちやならんのだが、さう急には駟者も見つからないのでな。」

「では伯爵様、差出がましい願ひではございますけれど、私を駟者にして頂くことは、出来ないでせうか？」

「え？　何だつて？　お前が駟者に……。」

「はい。私がこの工場へ参ります以前、まだ父が生



一六
きてをりましたころ、父はイリノイ州の片田舎で駈
者をしてをりました。それで私は、父が病氣の時と
か、また用事のありました折には、父に代つて度々
駈者をした覚えもござります。」

「お、成程な。さう、そんな話をわしは、誰か
に聞いたことがある。しかしギルバート、こゝから
ダンヴァールドまでは、二十六哩もあるんだよ。そ
の上行く路は、たいそう淋しい勾配の急な山の中だ。
お前のやうな子供が、どうしてそんな路を、進める
ことが出来るだらう？」

「い、え、伯爵様。どんなに深い山の奥でも、きつ
と私は馬車を進めてごらんに入れます。どうか伯爵
様、私を駈者にして下さいまし。」

ギルバートの聲には、強い決心が籠つてをりました。
ギブソン伯爵は、どうしても今夜のうちに、ダ
ンヴァールドへ行かなくてはなりません。

それで伯爵は、イリノイ州にゐたといふ、工場の

事務員に向つて、ギルバートのことをいろ／＼と訊
いて見ました。と、その男は聲を高めて、

「伯爵様、あのギルバートは、全く馬を使ふことが
上手なのです。あの子供が、一度馬の手綱を持ち
ましたら、どんな荒くれ馬でも、まるで羊のやうに
順しくなつてしまふのです。」

と答へるのでした。それを聞くと伯爵は、すぐさ
まギルバートに向つて、駈者になつてくれるやうに
と頼みました。ギルバートの喜びは、どんなであり
ましたらう。夕方工場の仕事が終わると、すぐに彼は
駈者服に身を固めて、ギブソン伯爵の邸に向ひ、い
そ／＼と歩いて行つたのでした。

二

伯爵に向つて、目ごろの御恩を返す時は今だ——
彼は深くさう決心をしてゐました。またギルバート
にとつては、かうするよりほかに、何の途もなかつ

たのです。

伯爵家の内部は旅の準備に忙しくしてゐました。
またその門の邊りには、今日の凜々しいギルバート
の駈者姿を見ようと、あまた工場の人々が寄り集つ
て、がや／＼と騒いでゐるのでした。

やがて、びか／＼と光つた美しい青塗の馬車が、
伯爵家の大玄関に横づけとなり、そこには急ぎの旅
なので、四頭の馬が繋がれました。伯爵夫妻はそれ
に乗りました。

「えい！」

一聲高く張り上げたギルバートの聲。右手に鞭を
左手に手綱。その手綱を少し曳くと、四頭の馬はそ
の歩みも軽く、伯爵家の門前を静かに抜けたのでし
た。

「小さな駈者、萬歳！」

「ギルバート、さやうなら。」

多くの人々は、ひら／＼とハンカチを振つて叫ぶ

のでした。からころ、からころ、馬車は朗かに鈴の音を立てながら、まるで滑るやうに、街道筋をかけたゆきました。

「おう、これは巧い。あの馭者のシヨルダンよりは、ずつと巧いくらひだよ。」

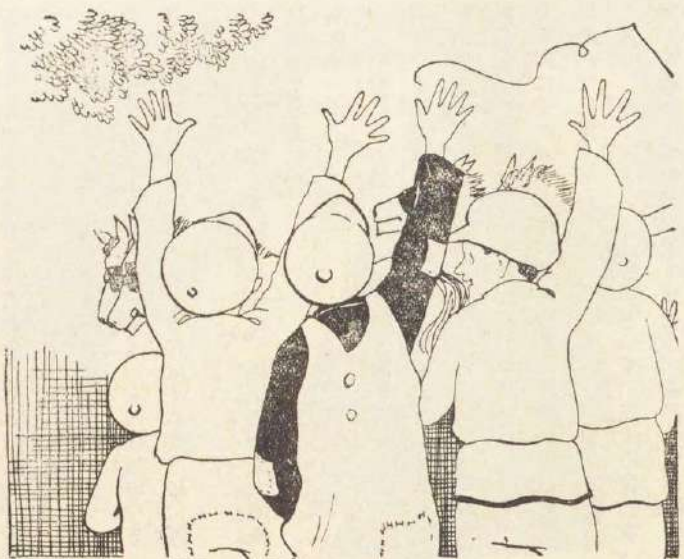
伯爵もまた伯爵夫人も、こんなことを言ひながら、見なれた邊りの景色にさへ、つくづくと樂しげに目をやりました。

とつぷりと日は暮れて、いつしか町の灯影も見えなくなり、只ざち／＼といふ馬車の轍だけが、邊りの山かげに、淋しく響を返してをります。

「だん／＼と山路に入った。これから十五哩の間がこの山の難所だ。ギルバート、氣をつけておくれ。」伯爵は言ひました。

「は。』

さつぱりと答へて、ギルバートは馭者臺でちつと正面を向いてゐました。



さうして何哩を走つたでせうか。魔のやうな森や幻のやうな池や、それ等の間を、黄色いランプをつけた青い馬車は、ゆれ／＼と進んで行くのでした。

昨日一昨日、その邊りは大雪が降つたので、深い森や林の中は、一面雪が積つて、折から昇つた月の光に、きら／＼と輝いてゐます。

時折強いアラスカ風が吹いて、その度毎に馭者臺に腰かけてゐるギルバートの顔に、呼吸もつけぬほど、残りの雪が舞ひかゝりました。

その時です。ふとギルバートが耳を傾けると、ずつと／＼の後の方から、

「うー、ほー。」

といふ、不思議な聲が聞えます。すると間もなくその聲は次第々々に近くなつて、その數もだん／＼と増して來ました。

「あれ、狼ですわ！ 狼ですわ！」

とたん、伯爵夫人の鋭い叫び聲がしました。

「うー、狼だな。」伯爵もさう答へて、ちいつと身體を伸しながら、馬車の窓から後をそつと、覗いて見たやうです。

思はずギルバートが、馭者臺から首を伸して、後を振り返つて見ました。その刹那、さすがの彼も、「や！」と鋭い聲を立て、しまつたのでした。

何十四といふ狼の群が、この深い森に沿つて、次第に此方へ近づいて來るのです。

「えい！ えい！」

今はギルバートも、只けんめいに鞭を振つて、疾風のやうに馬車を進めました。馬車の四つの車輪は割れるやうにざち／＼と鳴り軋いてゐます。四頭の馬の蹄からは、巴のやうに雪が散つてをります。

「ギルバート、早くダンヴァールドへ着かねばならん。」ギボン伯爵は、馭者臺の後から手を伸して、ギルバートの肩を強く叩きました。

「早く、ギルバート、早く馬を進めて頂戴よ。早く

早く！」伯爵夫人も狂ふやうにかう言ひました。

「……。」

それには答へず、強くギルバートは肯いたまひ、たゞ一心に馬を進めました。あゝ、その疾風のやうに速い馬の歩みも、ギルバートには牛のやうに、遅く思はれたのです。

そのをり、早くも狼の群は、馬車の十五六間後に迫つて来ました。

「アンニイ。」

と伯爵は、突然夫人の方に振り向いて、

「持つて来た肉類を、すつかり投げておしまひ！」伯爵夫人が馬車の窓から、慄へる手であまたの食料品を、狼の群に向つて投げました。

その間にギルバートは、又出来るだけ早く馬車を進めたのでした。

だが、何十匹といふ狼にとつて、三人の食べる肉ぐらゐが、何の足になりませう。それを食べ終つ



た狼は、やつぱり恐ろしい叫び聲をあげながら、早くも又馬車の近くに、追ひ迫つて来たのでありました。

ギルバートが駭者臺から振り向くと、今にも狼の群が、飛びつかうと一齊に身がまへをしてゐます。「伯爵様、馬を一頭放しませう。」ギルバートは言ひました。

「え？ 馬を……。」

「はい。馬を一頭餌に與へまして、その間に一刻も早く逃げのびるより外に、途はございせん。」

「さうか。早く放て。」

ギルバートは駭者臺から飛び降りて、瞬くうちに一番先の馬一頭を、雪の上に放つて、又ひらりと飛び乗りました。

彼は死に物狂ひに、鞭をあて、鞭をあて、は馬車を進めました。あゝ、けれども、またも恐ろしい狼の唸りを、その直ぐ後に聞いたのは、ほんの間もな

くのことであります。

「おゝ、ギルバート、もう一頭を放て、もう一頭、馬を放て！」伯爵は叫びました。

伯爵夫人の狂ふやうな叫び聲のうちに、又ギルバートは、一頭の馬を放ちました。

だが、二頭の馬を失つたこの馬車は、もうその歩みも、例へやうなく鈍つてしまひました。そればかりか、二頭の馬を食ひ荒して、勢をました狼の群は以前の何倍かの唸り聲を立て、どつと押しよせて来たのでした。

「ギルバート！ またダンヴァールドの停車場の灯は見えないか。」伯爵は苛々と、駭者臺に乗り出して、かう訊きました。

伯爵夫人も今は、少しでも狼の群から遠ざからうとするやうに、狭い駭者臺の上によりかゝつて、身を細く慄はせてゐるのでした。

ギルバートは立ち上つて、遙か方向を透して見ま

した。けれども、灯など何一つとして見えません。「もう直ぐです。すぐに着きます。」だがギルバトは、力こめてかう答へました。

狼の群は、一段と大きく吠えて、ぎり／＼といふ牙の音さへ、物凄く聞えて来ました。

「ギルバト、もうこれまでだ。今一頭馬を放て！」伯爵は三度かう命じました。ギルバトは馬を放ちました。あゝ今は、もうたつた一頭の馬となつてしまつたのです。

鞭を打つても喘いでも、たゞ一頭の馬では何うすることも出来ません。その一頭の馬とても、すつかりと疲れてゐます。馬車の車輪にもまた、どうやら故障が出来たのか、走る毎に、異様の音を立て、来ました。あゝ、その一刹那であります。又もやその後には恐ろしい狼の唸り聲、牙の音！

今一つの馬を放つたら、三人はこの場で、狼の餌食とならねばなりません。けんめいに馬の背に鞭を



あてながら、ギルバトは馭者臺に立ち上り、また坐り、行くてを幾度か透して見ました。

遙か／＼の彼方、見えるか見えないかに、ほんのぼつとりと現れた幾つかの灯——ダンヴァールドの停車場が近づいたのです。しかもその時、狼の群は直ぐ後で、ぎり／＼と牙を鳴しました。

「伯爵様！ 私とお代り下さい。」その瞬間、鋭くかう言ひ残した少年ギルバトはひらりと飛び降りました。

「あッ、ギルバト！」伯爵と夫人とが聲を揃へて、馭者臺から首を伸した時、月の光のありありと照してゐたのは、たくさんの狼の群と闘ひつゞけてゐる、少年ギルバトの姿！

「あゝ、ギルバト！ 許してくれ！ 許してくれ！」伯爵はかう叫んで、自ら馬の手綱をとり、自ら鞭を手に攔んで「えい！ えい！」と、只けんめいに馬車を進ませたのでした。

やうやくダンヴァールドに着いた伯爵は、直ぐさま救援隊を雇つてギルバトを助けに行きました。けれども、ギルバトの姿は何處にもなく、只真白な雪の上には、五六びさの狼の死骸と、ギルバトの靴と帽子が、七八間の間を置いて、落ちてをりました。

ギルバトは、その身を犠牲にして、伯爵夫妻を安全に落ちのびさせたのでした。さうして少しでも永く狼の群をせき止めようとして、あくまでも闘ひつゞけ、やがてはその餌食となつたのです。

「ギルバト、許しておくれ……。」青白く照つた夜ふけの月。その下で伯爵夫妻は、ギルバトの只一つの遺品である、この帽子と靴を抱いて、深い祈りをつゞけてゐました。伯爵家のある領地には、ギルバトの美しい墓がたてられ、今も尙往き來の人々が年中匂ひの高い花々をさしてゆくのです。



白鳥姫物語

高橋里江

岩岡とも枝畫

一、北へ北へ

エスピンは、大急ぎで、自分のステッキを持つとお城も寶も、何も彼もそのまゝに打つちやらかして花嫁のお城を探しに、遠い旅に上りました。幾日も幾日も、幾週間も幾週間も、エスピンは、北へ北へと旅を續けて行きました。道で會ふ人毎に、「お日様からは北の方、お月様からは西の方、そして世界の

真中にあるお城」を知らないかと尋ねましたが、誰一人として、そんな不思議なお城の話は、聞いた事もないと云つて、あされました。ある日、エスピンは、際しのない様な、大きな森の中へ入つて行きました。見ると、二人の木樵が、火の出る様な、烈しい組打ちをやつて居ます。そこで、エスピンは、二人の中へ割つて入つて仲裁を申出しました。

「小父さん達は、なんだつて、そんなに喧嘩して居るんです」

「俺達は兄弟だ。親父があつた帽子を奪つて死んだのだ。で、あれは、俺のものだと云ふのに、弟の奴、承知しないのだ」

見ると、道端には、古ぼけた、きたならしい帽子がころがつて居ます。

「ばかげてるぢやありませんか、あんな古帽子一つで、兄弟喧嘩なんかして！」

「いや、あれは、普通の帽子ぢやないんだ。あれを被ると、被つた人が、忽ち見えなくなつて終ふんだ。だから、外の物は皆やるから、これだけ俺に呉れと云つても、兄貴の奴慾張りで分らないんだ」

「何をこのばか野郎！」
兄弟はまた、取つ組んで、わめき叫び乍ら烈しい喧嘩を初めました。

エスピンは、其の間に、チョイとその帽子を失敬

して、

「さよなら小父さん！」

と、怨ち姿を消して、どん／＼北へ歩いて行きました。

いゝ加減来たと思ふ所でした。また二人の木樵がさつきよりも、もつと猛烈に戦つて居ます。聞いて見ると、今度もまた、死んだお父さんの、財産分けの兄弟でした。併し、今度は帽子ではありません。道端に脱ぎすてゝある、古い、長靴の取りつくらですが、この長靴がまた調法な靴で、これをはいて、一足歩くと、百里も先さへ行つて終ふのだと云ふのです。そこでエスピンは、二人の仲へ入つて、仲裁しました。

「今、僕が、この石を投りますからね、小父さん達二人で、馳けて行つて、早くこれをひらつて來た者が、靴を取つたらどうです」

「よからう！ 貴様に異存はないな？」

「はいとも！」
エスピンが、力まかせに、石を、投げると、二人は夢中になつて駆け出しました。其の間にエスピンは、大急ぎで長靴をはいて終ひました。そして、二足三足歩いたかと思ふと、もう三百里も先へ行つて終ひました。

エスピンは、また、父の財産分けて喧嘩をして居る兄弟に出合ひました。今度のは、餘程風變りな品物で、さびだらけの、古い、小さなナイフですが、誰かを指し乍ら、これを開くと、目指された人は忽ち氣を失つて、其の場へ倒れて死んで終ふ。がまた、ナイフを閉ぢて、死んだ人に觸ると、忽ちその人が生き返るといふ品物でした。
「では、一寸そのナイフを見せて下さい。私は、前にも、これと同じ様な喧嘩の仲裁に入つて、成功した事があるのですから」
さう云つて、兄弟からナイフを受けると、試し



二六
に、二人を指して、ナイフを開いて見ました。全く！二人は忽ち死んで終ひました。で、今度は閉めて、二人の死骸に觸つて見ると、兄弟は、むつくり起き上つて、夢から覺めた人の様に、キョトクして居ます。

「どうも有り難う！」

エスピンは、勝手に禮を云つて、古帽子を被ると一足で、忽ち百里先へ飛んで行つて終ひました。

二、山の獸の大奥様

北へ北へ、エスピンは、歩いて行きました。
丁度、大きな森の、中程迄來ると、とつぶり日が暮れて終ひました。幸ひ、森の中に、一軒の小屋があつたので、訪ねて見ますと、何百年生きたのか、大變年を取つて、顔中へ苦の生へた、むさくるしいおばあさんが一人で棲んで居ました。エスピンは、丁寧に挨拶をして、もしや「お日様からは北の方

お月様からは西の方、そして世界の真中に立つて居る御城」を知らないかと、尋ねて見ましたが、おばあさんは、てんで聞いた事もないと云ひました。併し、幸ひな事には、そのおばあさんは、山の獸の大奥様と云はれる人だつたので、念の爲に、世界中の獸を呼び寄せて聞いてやらうといふ事でした。で、獸の大奥様は、細い笛を取り出して、ヒュウ〜とふき鳴らしました。すると、彼方からも此方からもありとあらゆる獸達が、野から山から、集つて來ました。狐だけは、少し遅れて、コン〜と、後ろの方から入つて來ましたが、ぶつちよう面をしてよく見て居ます。それは、丁度うまい具合に、子羊を盗みにかゝつた時、奥様の笛が鳴つたので、大損をしたと、こぼして居るのでした。併し、狐も、他の獸達も、お城の事は知りませんでした。

「では、この狐に案内をさすから、明日は妾の妹の所へ行つて御覽！ 妹はね、海の魚の大奥様とい

ふんだよ。そして、こゝから千里も先に住んで居るんだよ」

山の獣の大奥様はさう云つて教へました。

翌る日、エスピンは、狐の道案内で、海の魚の大奥様を訪ねました。併し、魚の大奥様も、不思議な御城の事は知りませんでした。其處で、また笛を鳴らして、世界中の魚を集めて聞いて呉れましたが、どうしても分りません。

「では、明日は、妾の妹の所へ行つて御覧！ 妹はね、空の鳥の大奥様といふんだよ。そして、此處から真すく北へ、三百里離れた山の頂上に住んで居るんだよ。この妹が、お前を助ける事が出来なかつたら、誰にだつて、わかりつこはないと思ふよ」

海の魚の大奥様は、さう云つて教へました。夜が明けると、エスピンは、もう一度、北の方へ旅立ちました。そして間もなく、鳥の山の頂へ来て空の鳥の大奥様にあつて、尋ねましたが、矢張りこ

の奥様も知らなかつたので、笛を吹いて、鳥達を集めて呉れました。世界の際々から、ありとあらゆる鳥達が、笛を聞いて集つて来ましたが、誰一人、城の事を知つて居る者がありませんでした。

「あゝ、大鷲が居ないね。大鷲が来ないね」
奥様はさう云つて、もう一度笛を鳴らしました。すると、大嵐の様な、烈しい羽音を立て、大きな鷲が舞以下りて来ました。

「大鷲！ お前は何故直ぐに來なかつた？ 笛を聞いて集らない者は、死刑になる事を忘れたのかい？」
空の鳥の大奥様が、われ鐘の様な聲で叱りつけますと、鷲は、涙をこぼして謝りました。

「私は、遠い所から來たものですから、おくれたのです。お日様からは北の方、お月様からは西の方、そして世界の真中に、立つてる城から飛んで來たので御座います。どうか御免下さい。私は其處に、新しい巢を造つて、子供達を育て、居ましたので、飛

んで來る前に、いろいろの事をして置いてやりたかつたのです」

それを聞くと、大奥様は、エスピンの顔を見て、安心した様に笑ひました。

「さうかい、では、この子を、その城へつれて行つておくれ、無事に連れて行けば、死刑の罪は許して上げるから！」

大鷲は、承知しました。そして、一晩休んだから、エスピンを連れて行く約束をしまし



た。
翌る日の朝早く、エスピンは空の鳥の大奥様に分れて、大鷲の背中にまたがつて山を出發しました。大鷲は、高く高く大空へ舞ひ上ると、真直に北を指して飛んで、見る／＼中に、いくつもの山や、平原や森を越し、広い広い大海原の上をも飛び越えて終ひました。

と、大鷲は、ふり返つて云ひました。
「何か先の方に見えませんか？」
「あゝ、真向ふに、真黒な壁の様なものが見える！」

「來ましたね。あれは土の山、どうでもあの土の中を通り抜け

ねばなりません。確かりつかまつて、下さいよ。あなたが落ちれば私も死刑だ！」

エスピンは、しつかり鷲の背中へかちりついて居ました。二人は、真直に、真暗闇の土の中をつき抜けて、間もなく、明るい大空へ来る事が出来ました。暫らくして、また大鷲が云ひました。

「何か、先の方に見えますか？」

「あゝ、真向ふに、ガラスの山の様なものが、見える。」

「来ましたね。あれは水の山です。どうでもあの水の中を、通り抜けねばなりません。確かり掴つて、下さいよ。あなたが落ちて、流されれば、私も死刑だ！」

エスピンは、大鷲の背中へ、確かりしがみついたまゝ、真直に水の中を通り抜けて、間もなく、また明るい大空へ出ました。

暫らくして、また大鷲が云ひました。

「何か、先の方に見えますか？」

「あゝ、真向ふに、赤い山の様なものが見える！」

「来ましたね。あれは、炎の山です。どうでもあの火の中を通り抜けねばなりません。確かり掴つて、下さいよ。あなたが落ちて、やけ死ねば、私も死刑だ！」

二人は、また、真直に、火の中へ飛び込んで、そして、間もなく、また明るい大空へ出る事が出来ました。

やがて、廣々とした、緑の牧場へさしかると、大鷲は、其處へ舞ひ下りて云ひました。

「休みませう。まだ、これから先が長いので、未だ五百里も飛ばなければなりません。」

「ちや、今度は僕が代らう！」

エスピンはさう云つて、大鷲を背中へかつくと五足あるきました。

「大變々々！ 二十里も來過ぎて終つた。引き返して下さい！」

「駄目だよ。一足もどると、また百里歸つて終ふんだ！」

「不自由な足ですな。ではまた飛びませう」仕方なしに、二人はまた、反對の南の方へ飛びました。そして、間もなく、「お日様からは北の方、お月様からは西の方、そして、世界の真中にある城」の前へ來ました。

見ると、それは、何處でも見る事の出来ない、風異りな城で、上から下まで、純金の様に、光つて見えました。

エスピンは、お城の門の前で、大鷲と別れましたが、小さい侍女が、外から歸つて來るまで、黙つてゐました。そして、その侍女に云ひました。

「スウンデルバンドのお姫様、レナ様におことづけを願ひます。どうか、疲れた旅人に一杯の葡萄酒を恵んで下さい」と



重^{おも}い 軽^{かろ}い —— 高^{たか}い 低^{ひか}い



ひろい、せまい のぼる、おちる あたかい、さむい



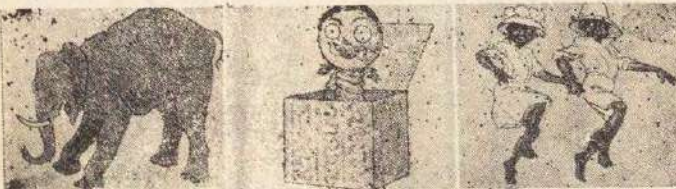
やせてる、ふとつてる 中^{うち}と外^{そと}にげる、つながれる



勇^{ゆう}と胆^い病^{びょう} かるい、おもい 乗^のる、おりる



高^{たか}い 低^{ひか}い ざらざら、つるつる おそい、はやい



小^こさい、大^{おほ}さい 丸^{まる}い、しかくい 黒^{くろ}い、白^{しろ}い

侍女は、すぐに、その事を白鳥姫にとりつぎました。姫は、自分の、小さい金のコップへ、お酒をついで、旅人^{たびびと}にあげる様に命じました。エスピンは、そのお酒を飲んで終ふと、初めて、櫻の樹の下で會つた時に、姫からもらつた指輪を、そつとコップの底へ落して、返しました。

姫はすぐに、指輪を見つけて、急いで、門の處へ来て、エスピンを迎へました。

「あ、ほんとうにいらしたのね。けれど、また妾達は、別なければなりませんわ、どうか、すぐ歸つて下さい。妾の羽衣を着て、真直に飛んで歸つて下さい。貴方の來た事を、悪い魔法使ひの老婆が知つたら、すぐ、貴方を石に變へて終ふでせう！」

「大丈夫です！ 大丈夫です！ 僕はすつかり用意をして來ました。さあ、その悪婆の居る所へ連れて行つて下さい！」

エスピンはさう云つて、妾の見えなくなる帽子を

被りました。目指して開けば、呼吸の根を止める事の出来るナイフを持ちました。

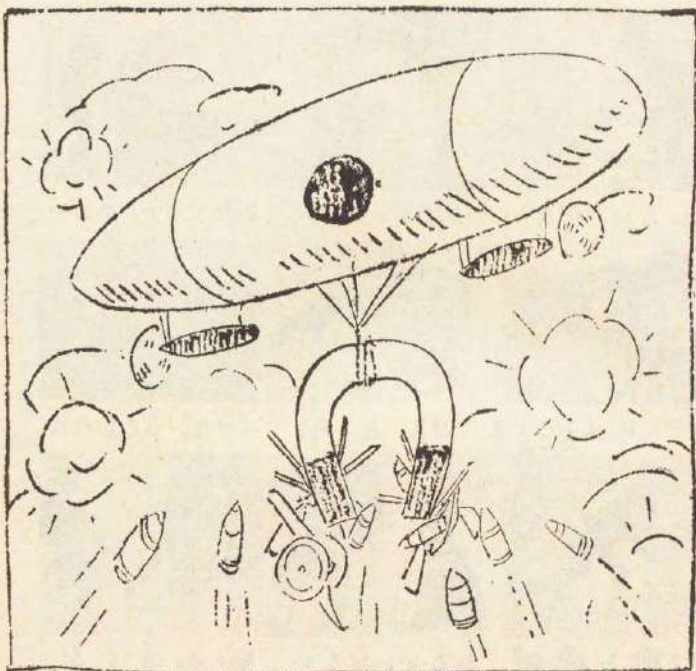
其の時、魔法使ひの悪婆は、何も知らずに寝込んで居ましたので、忽ち、エスピンに退治られてしまひました。

エスピンは、おほくの家來達に命じて、この悪婆を、百尋も深い地の底の、地獄へ投げ込んで終ひました。

今はもう、少しも、心配な事も、不自由な事もなくなつて終ひました。

残つて居るのは、白鳥姫のレナと、しあはせなエスピンとの、結婚式だけでした。が、それも、間もなく、華々しくあげられました。そして、その祝宴が、どんなに、盛大な、華やかなものだったか、今でも尙、お日様からは北の方、お月様からは西の方、そして世界の真中にあるお城の中で、續いて居るといふ位です。

(をはり)



新ほら博士

三井信衛

井上猛夫畫

大きな磁石

名高い歐羅巴の大戦争が起つた時、私はもう立派なこの髯も生えてゐました。そしてそのころ私は、やつぱり東京にゐて、何か素晴らしい發明でもしたいものと寝てもさめてもそればかり思つてゐたのです。

ある日のことでした。名前はもう忘れ

てしまひましたが、何でもその時分の總理大臣の書記官長とか云ふ、私のこの髯の倍もあるやうな、大きな髯を生やした人が、私のゐたホテルへ訪ねて来たのでした。

「突然伺ひまして、失禮ではありますが、あなたの御名聲を聞きまして、實はお願ひに上つたのです。」その人はたいへん叮嚀にさう言ひました。私は思はず、ゑへんと咳ばらひをしました。

「あなたが日露戦争の折に、大變大功勞をなされたと云ふ事を、この程陸軍大臣から承りました。ところが今度、いよゝ、我が日本の國も、日英同盟の約束によりまして、聯合軍に加り、戦争をする事になりました。それについて、是非あなたのお智慧を御拝借申したいと思つてをりますが……。」

私は話を聞きまして、何しろ國の一大事ですから何とか一つ手助けしたいと思ひました。私が承知しましたと應へますと、内閣書記官長は、大欣びで出

て行きました。

だが私は、さう約束をしたものゝ、何しろ相手が世界一の強國であるあの獨逸でしたから、なかなか並大抵の苦心ではありませんでした。例によりまして私は、二日二晩と云ふもの、まんぢりともしないで考へに耽りました。はたと一つ思案に行き當つたのでした。

もうその時分には、日本の兵隊もぞくぞく、青島に向つて出發しまして、海軍も膠洲灣を圍んで、切りに戦争を始めてをりました。

私は陸軍省から、一臺の飛行船を借り受けまして、それから日本一の鐵工場へ行つて、大きな磁石を一つ大急ぎで拵へてもらひました。

私はその磁石を飛行船に釣つて、日本の空を出發して、はるか青島へくと進んだのです。國を出發する時、どんなに皆が拍手をして私を送つたか、さう云ふことは一切御想像にお任せいたしますが、私

が恰度膠洲灣の上に差しかゝつたときは、獨逸と日本との戦はまづ最中でした。

私は日本の軍艦の上を速廻りして、青島の要塞の方へと真直ぐ飛行船を進めて行きました。

すると獨逸軍では、日本の飛行船が来たと言ふので、一齊に飛行機銃や大砲を、私の方に向けて、ドンドン、ドンドンと打ち出しました。そのはげしさ凄じさ、到底平氣ではゐられない程でした。

ところが、私は至つて平氣の平坐であつたのですから、偉い者でせう。その筈です。私の計劃はこゝでもまた、非常なすばらしい効果を現したのです。

獨逸軍の打つた大砲の弾は、見る間に弓なりに曲つて、すう、すうと大きな磁石に吸ひついて、見る見る間に大砲の弾が鈴生りになつてしまひました。それどころか、敵軍の大砲も銃も、兵隊の持つてゐる剣も、鐵のものは何でも彼でも、私の釣つて来た大きな磁石に吸ひとられて、まるで磁石は、大砲や

鐵砲や劍の木が生えたやうでした。

何しろ獨逸軍の方には、武器といふ武器が皆私にも戦ひ様がありませんでした。私は急に方角をかへて、日本の國の方へ飛行船を進めました。そのあとで日本軍は、ドン／＼と敵を打つたものですから、さしもの獨逸軍も降参をしたのです。

私は、大砲や鐵砲や劍を、何萬となく磁石にぶら下げて、飛行船で都へ歸ると、さあ、口でも云へない大歓迎でした。戦争がすむと間もなく、私はまたもや陸軍省から、功七級の勳章を貰ひました。

ツエツペリン飛行船

日獨戦争が終ると、私はイギリスから、ぜひ来てもらひたいと云ふ通知を受けました。その時分、日本と英國とはまだ同盟をしてゐましたし、歐羅巴の大戦争も、まだまだ最中でしたので、私はイギリス

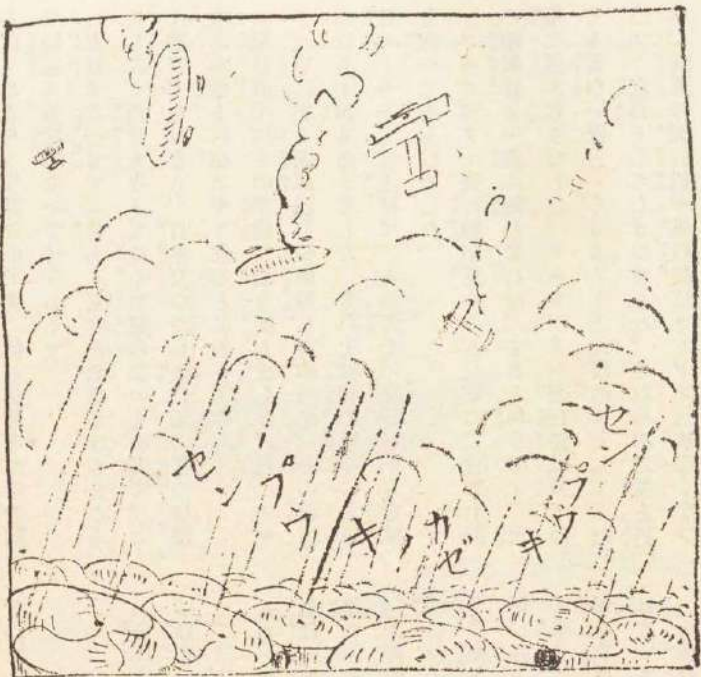
の願ひを叶へて、さつそく日本を出て行つたのでした。

私がロンドンへ着くと、それはもうとても歓迎で、一週間ぶつ續けに歓迎會があつたので、たうとう腹をわくるくしてしまつたくらゐでした。

「一つ助けて頂きたいのですよ。」

英國の總理大臣は言ふのでした。どうも、さう云ふ風に云はれると、つい私はその後へエヘンと咳拂ひしないといわれなくなるのです。これは私の悪い癖です。「御用向はどう云ふのでせう？」私は尋ねました。

「實は色々とお頼みしたいことがあるのですが、先づ第一番に、此の頃、ドイツからツエツペリン飛行船が、このロンドンを襲つて来て、非常に人々は恐怖にか



られてゐるやうな譯なのです。何とかあなたの智慧で撃退する法はないでせうか？」

私はもう一寸で「何あんだ」と云ひかけるところでした。西洋人なんて全く智慧のないものです。こんな事ぐらひなら、日本だったら決して、私の智慧なんか借りに来るやうなことはありません。

私は直ぐにその準備に取り掛りました。私はイギリス中にある煽風器を皆徴發したのです。その数は二百五十萬もありました。それを倫敦の近くにある丘の上へみんな上げて、その近くの發電所から電氣を送つてもらひました。

ツエツペリン飛行船が見えると、その二百五十萬の煽風器を一齊に廻しました。すると何うです、大變な風が起りました。ツエツペリン飛行船は見てゐても面白いほど、くるり／＼とんぼ逆りをして、たうとう墜落をしてしまひました。それ以來二度と再び、獨軍の飛行船や飛行機はロンドンへ來なくなつ

たのでした。

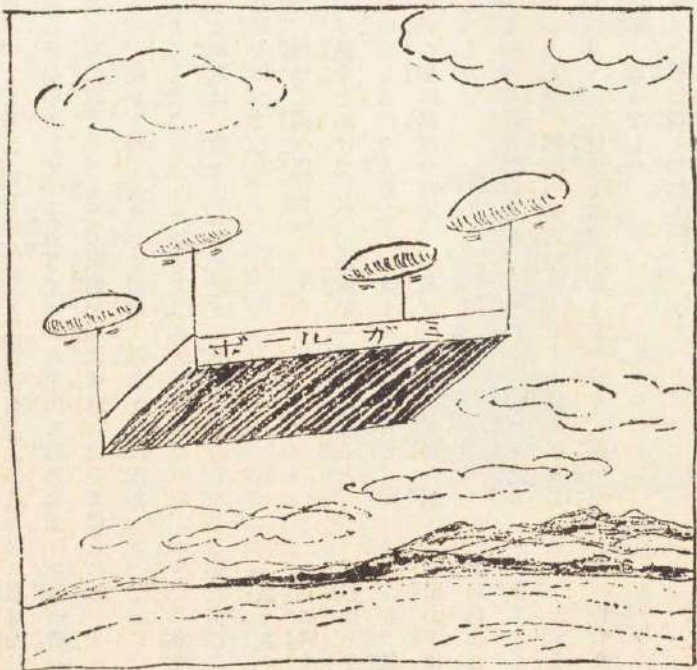
ボール紙と兵隊

「先日はありがとうございました。あなたの智慧には感服いたしました。」

二三日して又、大臣が訪ねて來ました。私は又、「エヘン」と咳拂ひをしてしまひました。ところが今日の總理大臣は、この間よりずつと困つたことが起つたやうに、顔の色も大變者かつたのでした。

「大變困つたことが出來たんです。只今、歐羅巴へ送つたイギリス軍から電報が來りまして、二日の中に何とかして、五千人の兵士をさし向けて貰ひたい、味方は全滅して百人しか兵がなくなつたと云つて來ました。二日の中に五千人の兵を送れなんて、司令官はどうかしてゐますよ。だが、何とかいゝ法はないものでせうか。」

今度は私も少し弱りました。船で送つてゐたので



は、十日も費りますし、飛行船や飛行機には、一どきにさうたくさん兵隊を乗せる譯にも行きません。私は日本の國で頼まれたと思つて、一心に考へ込んだのでした。毎もなら、二日二晩考へたら、大概の知恵は浮んで來るのですが、今はそんな暇もありませんでした。

と！まるで、智慧の神さまに、電報でも尋ねたやうに、ふゝに私の頭にいい思案が浮いたので。

「よろしい。明日中に五千人の兵隊を送つて見せます。」

私は元氣な聲でいきました。私の聲が餘り大きかつたので、大臣はきよんとしてをりました。

「明日中！？」

「明日中どころか、明日の午前中に送つて見せます」
私は言ひのこして、大急ぎでホテルを出て行きま
した。私は直ぐに、大きな紙箱の製造會社へ行つて
そこで、幅が十哩、長さが十五哩、厚さが五尺もあ
る、とても大きなボール紙をこさへさせました。
明る朝私は、廣々としたロンドン平野に、五千人
の兵隊を並べました。

「皆、塊つて前へ出よ。」

私は號令をかけました。兵隊が一塊りになると、
私は昨夜こさへた大きな、ボール紙の四方を、四
つの飛行船に結びつけて、一萬メートルの大空へ飛
行しました。

四臺の飛行船には、それぞれ腕のいい飛行家に乗
つてゐました。四つの飛行船は、ボール紙の四方を
釣つたまゝ、十哩と十五哩の距りをつけて、高い空
の上にとまりました。

「ボール紙の綱を切れ！」

私は命じました。四つの飛行船が、それぞれボー
ル紙の綱をきると、ボール紙はまつすぐ下に落ちま
した。
「ばんざい！」
と、たいへんな音がしましたが、その機
みで、側にゐた五千人の兵隊が、一人残らず飛び上
りました。

「ばんざい！」
私は叫んだのです。

私はちやんと、ボール紙の大きさも、それを落す
高さも、見當を最初からつけてあつたのです。ボー
ル紙が下に落ちると、その勢ひで、兵隊は皆海を向
方に越えて歐羅巴の方まで飛んだのです。

間もなく歐羅巴の英國軍から、四千人の兵士が着
いたと云ふ電信が来ました。だが残りの一千人が何
處へ行つたのか、未だにわかりません。



不思議な命拾ひ

小山 寛 二

羽鳥 古山 畫

英彦山といへば九州第一の大き
な山で、古くからさまざまの傳説
を持つてゐますが、これもその話
の一つであります。

丁度今から二百年程前、英彦山
の麓に香月伊織といふ若い郷士が
住んで居りました。郷士といふの
は百姓の大金持か、又は家柄のす

ぐれて立派な者に限つて、殿様か
ら武士同様に苗字を名乗り刀をさ
すことをゆるされた人のことです
が、この伊織の家は金持の郷士の
方で、住まつてゐる家も素晴らし
く大きなものでした。
併しその大きな家の中は、がら
んとしていつも静まり返つてゐま
した。といふのは、両親に死別れ
た伊織は、一人の弟と、一匹の犬

と三四人の召使と、たゞそれだけ
の少い人数に仕へられて、淋しい
日を送つてゐたからです。その一
人の弟の軍次郎も實は本當の兄弟
ではなく、遠い親類に當る人の孤
兒を、情深かつた伊織の母親が引
取つて、伊織の弟として育て、居
たものでしたが、母に似て優しい
心の伊織は、母が死んだ後は一層
この軍次郎をいとしんでゐました

ので、軍次郎は伊織を眞實の兄だとばかり思ひこんで慕ひ睦み、その仲の好さは村の人々の噂に上る位でした。

又伊織は、この軍次郎より外にもう一つ、命よりも大切にして居たものがありました。それは愛犬の「熊」です。小熊の様に大きな強い犬で、今では十二の年を迎へた軍次郎にも、いゝ遊び相手になつて居ました。

淋しいけれども、おだやかで、のんびりした月日が、この家に流れてゐましたが、或時、伊織は急に思立つて、京都に遊びに出掛けることになりました。そこで軍次郎を呼んで、

「おとなしく留守居をして勉強を

勵むのだよ。後のことは藤助爺やに頼んで置いたから、爺やの言ふことをよく聞いて、村の子供と喧嘩などしない様に——」

と言ひよかせると、軍次郎は領き乍ら悲しさにしやくり上げて居ます。

「泣くではない。ほんの暫くではないか。歸る時にはうんとお土産を持つて来るからね」

伊織はいじらしい弟の様子を眺めて何だか胸一杯になつて來ました。そばから藤助爺やも涙ぐみつつ、

「さあ坊ちゃん。泣かないで元氣よく旦那様の御發ちをお見送りしませう」

その時、縁側にクン／＼と犬の

鳴聲が聞えました。それは熊でした。

「あ、熊か。お前には未だお別れをしなかつたな。よし／＼、俺の居ない間は、軍次郎を主人と思つて大事にするんだぞ」

伊織は哀れげに鳴く犬の頭を撫でてやりました。そして皆に送られて門を出ると、何故か熊はしきりに主人の後を追ひます。それは何處までも／＼尾いてゆかうとするかの様です。伊織は苦笑ひして熊を叱りつけ、いよ／＼皆に別れて、京都への遙かな旅路に上つてゆきました。

二

馬關の海を越えて中國路にさし



かゝつた時、伊織は妙本人間に會ひました。

白い／＼雪の様な髯を胸まで垂らして、身には汚い白衣をまとひ手には自然木の長い杖を持つてゐる、眼の鋭い老人が、向ふからやつて來て、伊織の顔を見つと、バツタリ立止つたのです。おかしな奴だと思つたから伊織は道をよけて行かうとすると、老人は意地悪く道をふさぎます。伊織は怒つて、

「不禮者ツ、通せ」と、どなりました。

併し老人は一向驚く様子もなくおし黙つてジロ／＼

と伊織の顔を見つめて居ます。

「のかぬと叩き斬るぞ」伊織はいらいらして來ました。するとその時始めて老人は咳く様にしやがれた低い聲で、

「お主は氣の毒な人ぢや」と、言ひました。

これはテツキリ氣違ひだな、と伊織は呆れてゐますと、老人はさらに言葉をツイて、

「お主は今日から三年目の今頃命を失くするだらう……」

その聲は、たとへば大地の底からでも響く様な恐ろしい程沈みきつた聲でした。伊織は何故ともなくどつと身慄ひしました。

暫らく二人は黙つてにらみ合つて居ました。やがて伊織は、

「も前様は一體どなたです」
「わしか。わしは英彦山の頂きに
住む行者ぢや」

「その行者が何故こんな所を歩か
れるのです」

老人はそれには答へず、目をつ
ぶつて、

「お主が命を惜しいと思ふならば
弓の稽古をしたがよい。弓矢には
八幡宮様の御まもりがあるから」
と謎の様なことを言つて、行過
ぎ様とします。

伊織はあはて、
「一寸お待ち下さい。私は何で命
を失くするのでせうか。病で死ぬ
のでせうか。それとも又他のこと
で……」

と言ひかけると、老人は

「それはわしにも未だ分らぬ。病
氣はするに違ひないが、病氣では
死ぬまい。それが知りたければ三
年目の日が近づいた頃、英彦山に
わしを尋ねて来るがよい」
と言ふと、杖を取直して歩き出
しました。

伊織はも一度呼び止めようとし
ましたが、身体がすくんで、聲も
出ない様な寒氣におそはれました
ので、たゞぼんやり後姿を見送つ
てゐました。

それから一ヶ月の旅をつゞけて
伊織は何事もなく京都につく事が
出来ました。

田舎から出て来た伊織には、見
るもの聞くもの、皆珍らしいもの
ばかりで、今日は清水寺、明日は

の人も、いや本人の伊織さへ、も
うとてもだめだと思ふ様になりま
した。そしてその年も暮れ、翌年
の春が来て、麗かな陽ざしが山々
の雪を溶かす頃になると、不思議
にも伊織の病はよくなりかけて来
ました。

伊織は喜びました。

「さうだ、あの老人が、病はする
に違ないが、病では死なぬ、と言
つたが矢張り本當だつたのだ。併
しさうすると……」伊織は暗い心
で思ひ續けます。『さうすると、三
年目に命をなくするといつたこと
も矢張り本當だらうか……』
夏が巡つて来ました。伊織は床
から起上ることが出来ました。併
し未だ足はヒョロ／＼として、自

由に歩く事が出来ません。伊織は
毎日ぼんやり室の中に居ることが
退屈で仕方がなく、何かやり度
と思ひますけれども、いゝ思案が
浮かびません。その中、ヒョイと思
ひついたのはあの老人が、弓の稽
古をしろ、と言つたことです。弓
なれば、足が不自由でも出来ない
ことはありません。伊織はその頃
京都で有名な和田藤馬といふ弓の
先生の所に、駕で通つて弓を習ふ
ことにしました。もと／＼武藝に
は巧い人でしたから、めき／＼と
腕を上げ、國に戻る時には、身體
も丈夫になり、弓も達人になつて
ゐました。

三

伊織は故郷に歸つて来ました。
それは故郷を出てから三年目に近
い月日のたつた頃でした。
家には何の變つたこともなく、
軍次郎はすこやかに成長し、熊も
達者でいそ／＼と主人を迎へまし
た。たゞ變つたといへば、藤助爺
やが死んで、その子の新助が軍次
郎のお守りをしてゐる位のこと
です。
家に歸つてからも伊織は、毎日
弓の稽古をして居りました。軍次
郎も兄のそばに来て、熱心に弓を
教はります。熊は熊で、二人が射
た矢を的から啞へ取つて来る役目
をつとめ、この家は前よりも一層
平和で喜びにみちて居ました。伊
織は、大空にそびえ立つ英彦山を

四五

四四

金閣寺と遊び廻つてゐる中に、三
月立ち四月立ち、いつか半年程過
ぎて了ひました。もう歸らうと思
つて、土産物などとのへ、いよ
いよ發たうとする頃、伊織は脚氣
を患つて、宿の二階に寝こんで了
ひました。始めは何でもないと
思つてゐたのが、意外に重くなつて
醫者を呼びますと、
「これは大變重い。命にかゝはる
病だ」と言ひます。さう言はれた
時、伊織は忘れるともなく忘れて
ゐたあの不思議な老人のことを思
ひ出しました。そして何だか不吉
な感で一杯になりました。熱に
うかされては、老人の幻ばかり見
る様にさへなつて来ました。
病がひどくなつて、醫者も看護

眺めるたびに、老人の言葉を想ひ出し、そしてこんなにもおだやかな自分の今のくらしに、どうして老人の言つた様な恐ろしいことが起るのだらうかと、不思議でたまらない氣になるのです。

所が或日のこと、庫の後ろの草原で、けたましく啼く犬の聲が聞えました。驚いて兄弟が駆けつけて見ると、熊がしきりにのた打ち廻つて苦しんでゐます。

「どうしたのだ、熊や」伊織が抱きかゝえて見ると、まひしにでも食はれたのか、熊の鼻面が赤く腫れ上つてゐました。伊織は直ぐにいろ／＼と介抱してやりましたがその翌日から、何だか熊の様子が違つて來ました。人を見ると烈し

く吠えかゝり、目の色をギラ／＼させる格構が、狂犬をつくりです。仕方なく、小屋に鎖で繋いで置く事にしましたが、長年可愛がつて來た犬のこととて、伊織は心配でもあり可哀想でもあつて、夜の目も眠れませぬ。

その夜も、熊が餘り悲しげな聲で啼くので、伊織は起上つて小屋の傍に行つて見たのでした。熊は伊織を見ると、一層猛々しく吠えます。伊織は情ない心持で、じつと立つてゐました。

月の明るい晩でした。ピョウピョウと、熊の啼聲が物凄く、寝静まつた夜の空氣を慄はせて、遠く消えてゆくのを聞いて居た伊織は目をあげて何氣なく彼方を見ます

と、そこにはおぼろに黒く英彦山のすがたが横はつて居ます。いつも見慣れてゐるその山が、今夜の伊織には、別だんに神々しく神秘に見えました。

「お、さうだ！」

伊織はとつぜん叫びました。

「明後日は、あの日から、三年目だ！」

そして魔物につかれた人の様に譯の判らぬ力にひかれて、伊織は一散に英彦山目がけて走り出しました。

伊織が山の頂きに上つたのは、夜の明けの頃でした。冷たい朝の風に、何處からともなく鈴を振る音がかすかに響いて來ます。

「おうい／＼」伊織は叫び乍ら、

その鈴の音を頼りに森へわけ入つて行くと、森をぬけきつた所に窟があつて、そこには縄が張つてあります。

伊織がそこまで行つた時、鈴の音がバタリと止んで、中から足音も静かに一人の老人が出て來ました。それはまぎれもなく三年前のあの老人です。

老人は伊織の姿を見ると、何も聞かない中から、手にした蠟燭の光りで伊織の顔を照らして「いよ／＼明日までの命になつてゐるな」と言ひました。

「どうすれば助かりませうか」伊織が尋ねると、老人はおこそかに、

「お前の弓で、お前の一番可愛がつてゐるものを、射殺さねばならぬ。若しそれをしなかつたら、その爲にお前は死ぬのぢや」と言ひ切つて、又すた／＼と窟の中に這入つて行つてしまひました。さあ伊織には判りませぬ。自分が一番可愛がつてゐるもの……それは一體何だらう……弟の軍次郎か、併しまさか弟が自分の命を取りはすまいし……では熊か……山を下り乍らしきりに考へあぐねてゆくうちに、輝かしい朝日が照つて來ました。

「熊かも知れない。熊は昨夜も自分を見てあんなに吠えた。畜生の淺間しさに氣が狂つて自分を噛み殺す氣になつてゐるのだらう。さ

うだ、熊に違ない。可哀想だけれども、それでは熊を殺して了はう」

伊織は漸く決心しました。

その翌朝、伊織は弓に矢をつがへて庭に出ました。

主人が自分に矢を向けるのを見た熊は、鎖を切らむばかりに狂ひ啼いて居ます。それを見ると、伊織は又可哀想にもなりました。

「兄さん、熊を殺すのですか」

後から出て來た軍次郎が、目を見張りました。

「うん、仕方がないのだ。熊を殺さねば私の命が危いのだから」

いつになくきつい言葉に軍次郎は返す言葉もなく、五間ばかり横手の塚のそばに退つて、熱心に見て居ます。

伊織は弓を満月の様にしぼりま
した。そして今にも矢をさつて放
さうとする時、熊は一聲高く啼い
て、訴へる様な哀れな目つきをし
ました。それを見ると、伊織の頭
がクラ／＼として、涙がこみ上げ



て来ましたので、よさうかと思つ
て弟の方を振りましました。振り向く
拍子に、これはどうしたことだ
う、伊織の手は思はず矢を放して
しまつたのです。「アッ！」矢は風
を切つて弟の方に飛びます。

「うん！」
伊織の驚
く聲と、軍
次郎のうめ
き聲が一緒
でした。
と、更に
おかしなこ
とには、軍
次郎が倒れ
ると同時に
ドーンとい

四八
ふ凄まじい響が聞えて、軍次郎が
もたれてゐた屏の外から白い煙り
が立上り、
「残念！」といふ人の聲がしまし
た。伊織が駆けつけて見ると、屏
の外には、藤助爺の子の新助が、
軍次郎の胸を貫いた同じ矢に頭を
射られて、鐵砲を持ったまゝ、打倒
れて居るではありませんか。重ね
重ねの意外なことに、伊織はぼん
やりとなりました。

四九
けれ共皆さん、伊織はこれで立
派に助かつたのでした。といふの
は
伊織の留守中に忠義な藤助爺や
が死んで、その後、軍次郎の守
役になつた新助は悪い男だつたの



です。軍次郎が伊織と本當の兄弟
でないことを、軍次郎に言つて聞
かして、今に伊織は軍次郎を追ひ
出すに違ひないから、歸つて來た
ら殺して了へ、とそゝのかしたの

を起し、いゝ折をねらつてゐまし
たが、その朝、新助に鐵砲で伊織
を撃たせようとした所を、かへつ
て伊織の射た矢で、二人共一べん
にやられて了つたのであります。

でした。そ
して軍次郎
に財産をつ
がせて自分
のいゝ様に
し様と企ん
だのです。
子供の軍次
郎はすつか
り新助の悪
企みに乗つ
てしまつて
恐ろしい心

それにしても不思議なのは、英
彦山の上のあの老人で、事情が分
つたのち、伊織はお禮の爲に山に
上つてゆきましたが、どうしても
その姿を見つけることが出来ない
ばかりか、あの窟さへ何處にある
かまるでわかりませんでした。
今ではそれは不思議な物語りと
して、麓の村の人々の間に傳つて
ゐるのであります。

(をばり)



禿の王様

三宅房子

寺田良作畫

五〇

むかし、あるところに寡婦のお婆さんがありました。お婆さんには一人の息子がありましたが、悲しいことには、もう二十歳をとうに越してゐるのに頭の毛が薄くて、まるでお爺さんのやうに見えました。村の人達はこの息子のことを「禿・禿」と呼びました。

ところが、禿は大變に怠け者で、母親がどんな職業を覚えさせようとしても、すぐと家へ歸つて來て

この時から禿は、人間ががらりと變つてしまつたのです。

「自分はお姫様をお嫁にもらふのだ。外の人は決してもらはないぞ。」禿は一人で決めてしまつて、とび起きて、お母さんを探しに行きました。

「お母さん、これから王様のところへ行つて私が是非お姫様をお嫁にほしいと言つて來て下さい。」と、禿がいひました。

お母さんはきもをつぶして、息子が氣狂ひになつたのだと思つて、口もさげませんでした。

「お母さんは私のいふ事が解らないのですか。これから直ぐと王様のところへ行つて、私がお姫様をお嫁にほしいと言つて、頼んで來さへすればいいのです。」

禿は、ぢれつたそらにもう一度いひました。「だけれど——だけれど、お前は自分で何をいつてゐるのか解つてゐないのだらう。」

しまひました。

あるお天氣のいい夏の朝のこと、禿はいつもの通り自分の家——家といつてもまるで牛小屋のやうですが、その廣場に寝轉んでゐますと、王様のお姫様が女官を大勢つれて、馬に乗つてお通りになりました。

禿は大儀そらに身體を半分起して見ると、きれいな／＼お姫様なのでびつくりしてしまひました。

と、お母さんは、どもり／＼いひました。

「第一お前は、何にも職業を持つてゐないし、財産なんか一文だつてないし、おまけにお前のやうな禿に、何で王様のお姫様を下さるものかね、考へて御覽よ。」

「それは大きなお世話です。たゞ私のいふ通りにしてくれ、ばい／＼のです。」

禿はかういつて、夜晝母親をせめたので、たうとう母親もあきらめて、ある日のこと、一番上等の着物を着て、王様のお城へ行きました。

丁度その日は、王様が人民の訴へ事や不平をお聞きになる日だつたので、お母さんは、わけなく王様のお目通りへ行く事が出来ました。お母さんはふるへながら申し上げました。

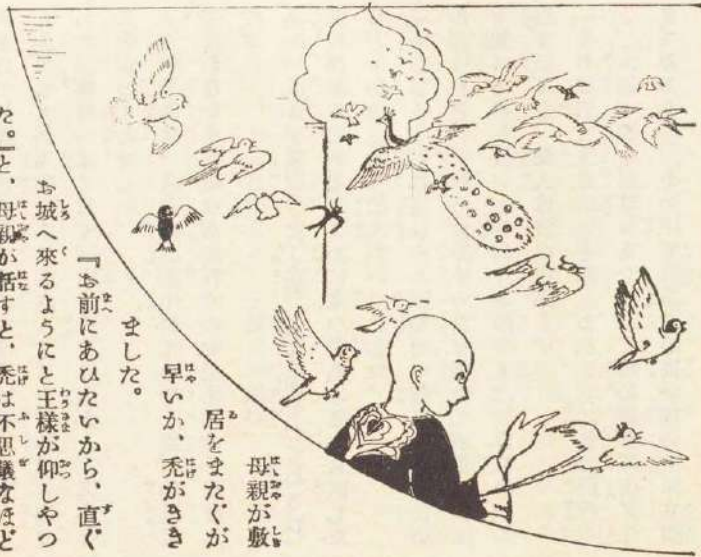
「王さま、どうぞ私を氣狂ひだと思召さずにお聞き下さいまし。實は私にはたつた一人の息子がありませんが、いつぞやお姫様がお通りになつたのを——と目

五一



見てからは非自分のお嫁にほしいから王さま
にお願ひして来いといつて、夜晝私
を責めるのでございます。そ
れで、私がそんな馬鹿
氣たことをいふも
のでない、も
し申しあ

げたら、それこそ私の首が無くなるといひ聞かせた
のでございますが、少しも聞入れません。で、たう
とう今日参りました。どうぞ私を御存分になすつて
下さいまし。」
ところが、王様は變り者で、何でも並はずれた事
が大好きでしたから、寡婦の話をお面白くお聞き
になりました。そこで普通の王様だったら首を切る
か、牢屋へぶち込んでしまふ處なのですが、そんな
やぼな事はしないで、たゞ一言、
「お前の息子にあひたいからこゝへ來させなさい。」
と、仰しやいました。
寡婦は思ひがけない王様の言葉聞いて、嘘ぢ
やないかと思つて、ボカンとしてゐました。しかし
王様ももう一度同じことを仰しやつて、少しもお怒
りになつた様子がないので、初めてホツと安心して
急いで家へ歸りました。
「お母さん、巧く行つたか。」



母親が敷
居をまたぐが
早いか、禿がきき
ました。
「お前にあひたいから、直ぐ
お城へ來るようにと王様が仰しやつ
た。」と、母親が話すと、禿は不思議なほど

はれぐしした顔になつて、すぐさま出かけて行きま
した。
王様は禿を一目御覽になつて、大變な奴を呼ん
でしまつたと後悔なさいました。早く遠ざけてしま
はなければいけないと思ひになりましたが、自分
で呼んだものですから、それには何か理窟をつけな
ければいけないので、困り抜いて、
「お前は私の王女をお嫁にほしいそうだね。よろし
い結構だ。が、しかし、王女の夫になる者は先づ最
初に世界中の鳥を集めて來て、このお城の花園へ持
つて來なければいけない。」と、仰しやいました。
禿は王様の言葉を聞いて、がっかりしました。ど
うしたら世界中の鳥がつかまへられるでせう。たと
へ、それが出來たにしても、お城へ持つて來るまで
には幾年もくかゝらなければなりません。しかし
そのまゝ黙つて引込んでしまふのは口惜しいので、
禿はお城を出ると、そこに廣い路があつたので、そ

れをたゞ無暗にどこまでも歩きました。

かうして一週間たちました。すると、沙漠へ出ました。樹は一本もなく、たゞ大きな岩がところ／＼に轉がつてゐました。

その岩陰に一人の仙人が坐つてゐました。仙人は見なれない不思議な男が行くのを見て呼びかけました。

「あい／＼、お前さんは大變心配な顔をしてゐるね。私に出来ることなら、力になつてあげるから話したらどうかね。」と、仙人がいはました。

「おちさん、私は王様のお姫様を嫁にもらひたいのだけれど、王様は世界中の鳥を捕つて來なければお姫さんにしないと仰しやるのです。」かういつて禿が話すと、仙人は笑ひながら、

「それは何でもないことだ。これから二日の間行くと、太陽の洗ひ道筋にあたつて、柏の樹が澤山に生えてゐるから、その中で一番背の高い樹の下にちつ

と静かに坐つてゐなさい。すると、程なく大變な羽ばたきの音が聞えて來る。それは世界中の鳥がそこへ來て枝に巢をつくるのだ。やがて静かになるからその時を待つて、「マヅツン！」と一聲叫びなさい。そうすると、鳥は樹にとまつたまゝ動けなくなつてしまふ。後は掴へることもお前さんの自由だ。」禿は仙人にお禮をいつて、大喜びでその方向へ急ぎました。

幾日かたつてのこと、身體中羽でつゝまれた不思議な姿のものが王様の御前へやつて來ました。近づくに従つて、「バサッ／＼」と羽音が聞えました。それはいふまでもなく、禿が山の様に鳥を持つて來たのです。

「王様、おいひつけの物を持つて參りましたから、お姫様を下さい。」かういつて禿が手を放すと、山のやうな鳥がバツ

び出して行つて、

「マヅツン！」と、一聲叫びました。

すると、そこにゐた者が一人残らず石のやうになつて、そのまゝ根が生えたやうに動かなくなつてしまひました。禿はうれしそうにこそ／＼と柱の蔭へかくれました。

王様は出て來て見るとこの有様なので、膽をつぶして、これはつきり悪者の仕業に違ひないと思ひになつて、呪をたくことの出来る魔法使を呼びに

おやりになりました。

魔法使は王様から、すつかりの話を聞いて、
「王様、それはあなたの方が間違つてゐます。もしあなたがはじめの約束通りになさつたら、こんな事にはならなかつたでせう。これはどうしても禿の青年にお姫様をおやりにならなければいけません。」と申しあげました。

王様は大變つらくお思ひになりましたが、この魔

と一度にとび立つて、王様の頭の上を舞つて、花園の方へとび去りました。王様はあはて／＼しまつて、
「あ／＼、私は満足に思ふ……だがお前を姫の婿にするには、姫のねがひとして、もう一つさいて貰ひたいことがある。それはお前の頭の禿げてゐることだ、どうかきれいな毛を一ぱい生やして來てもらひたい。そうすれば、すぐにも姫の婿にするから。」と、うろたへながら仰しやいました。

禿はまたがつかりして、家へ歸つて來ました。そして、毎日毎日考へました。
すると、ある日のこと、王様はお姫様を大金持の息子にやる約束をなすつたといふ知らせを聞きました。禿は眞赤になつて怒つて、お城へ忍んで行きました。

お城の大廣間では結婚式を擧げるところで、花嫁と花婿が大勢の家來たちにかこまれて王様の出ていらつしやるのを待つてゐる處でした。禿は不意にと

法使のいふ事に間違ひのないのを知つてゐるので、止むなくあきらめて、その言葉に従つて禿を呼びにやりました。

柱の蔭で聞いてゐた禿は、くすくす笑つて急いで家に歸つて母親にいひました。

「いまに王様から使が来て、私を呼びに来るから、さうしたら、私は幾日か前に旅に出たつきり歸らなるといつて下さい。しかし、お母さんは貧乏な女から、旅が出来るだけの金をもらへるのなら、探しに行つてもいいとおいひなさい。」

そういひ置いて、禿は天井裏へかくれました。間もなく、戸をドン／＼たいて王様の家來が入つて來ました。

「禿の息子さんはゐますか。王様が御用があるのだから、ゐたら私と一しよにお城へ来て下さい。」

と、家來がいひました。

「マア、残念なことに、件は四五日前に旅に出た切

り歸つて來ません。」

母親は教つた通りをいひました。

「何處へ行つてゐるのか知りませんか。王様がお姫様をやるといつてゐるのか知りませんか。」

「あの子は決して行先を言つて行きませんが、しかし王様のお呼びだといふのなら本當に有難いことですから、何とかして探して参りませう。心あたりの處もあります、貧乏ですから、旅をするお金もありません。」

「金ならいくらでもあげる。丁度こゝに千圓あるから、これを持って行きなさい。」

家來は千圓入つた金入れを禿のお母さんにくれました。

禿とお母さんは、一週間の間家から外へ一と歩も出ずにゐました。近所の人に知れてもいけないと思つて、夜になつてもロソク一本ともしませんでした。

遂に、あるお天氣のいい朝、禿ははやく起きて、

一番上等の着物を着てお城へ行きました。

王様は大變お喜びになつて、

「ほう、よく来てくれた。今まで何處にゐたのだ。」と、仰しやいました。

「王様、私はあなたが約束を守つて下さらなかつたので、が

つかりして、この國にゐるのがいやになり、世界中を巡り歩かうと出かけたのです。」

かういつて、禿は出たらめをいひました。

王様 改めて結婚式の支度を

いひつけになつて、禿をつれてお姫様のゐるお部屋へ行きました。大廣間の中は何もかもこの間のまゝで、お姫様も花婿も家來たちも、石のやうになつて



突立つてゐました。

「お前さんに呪を解くことが出来るかね」と、王様が

が仰しやつたので、禿は内心はどうかと心配しましたが、

「出來ます。」といつて、つかつかと前へ進んで行つて、

「マズツンの呪！ なくなれ！」

と叫びました。

すると、忽ち石のやうに立つてゐた人達は生返つて、もとの通りになりました。

王様は大喜びで禿とお姫様の結婚式を挙げました。

禿はその後間もなく、この國の王様になつたそうです。

(をはり)



幽霊の穴

榊山千代

神谷萬吉畫

五八

貞吉が子供の時に見た幽霊話はあまり長くならずから、一足とびに大人になつてからの話をしませう。

時は明治になつて、武士はみんなお殿様からはなれて、それぞれほかの仕事をしなければならなくなりました。それで、貞吉も、兵助といふ一人の下男をつれて、臺灣に仕事をさがしに行きました。

その頃臺灣はまだ支那の領分でありましたので、

町には不思議な格好の家が建つて、袋のやうなダブダブした服を着た支那人が町を歩いて居りました。泊るには宿屋はなし、貞吉は仕方なしに、道端の石によりかゝつて、呑氣さうに居眠りをしてゐる男を

あこして、手真似で貸家はないかとたづねました。男は、はじめは不思議さうにシロ〜と貞吉達の顔を見つめて居りましたが、やつとその意味がわかつたと見えて、一軒の大きな空家につれて行つてくれました。

その家の庭には背丈ほどもある雑草がのびて、あぐどい色に塗りつぶした壁や柱はポロ〜にはげて何んとも云ひやうもない匂ひがブーンと鼻をつきました。

「まるで化屋敷のやうだね」

貞吉はさう云ひながら、支那人について、部屋を眺めて歩きました。やがて、支那人は二十歳もあらうかと思はれる立派な部屋に貞吉達をつれて行きま

したが、しきりに、頭から何か降らすやうな格好をして、それから、両手をぶら〜んと下げて、あそろしい顔をしてみせました。

「何云つてるんだらう？ こゝに這入つたら誰か怒つて来るといふんだらうかな？」

「いや、きつと雨が漏るつてんですよ」

しかし、天井を見渡しても、別に雨もりのしさうな所もありません。すると支那人は、なほも同じ格好をくりかへして、それから、寝る真似をして手を横に振りました。

「ふーん！ この部屋に寝てはいけないつてんだな？」

「あ、わかつた！ お化けが出るつてんですよ」

「あ、さうか！ そいつ面白い、よしよし、それちや、この部屋は俺の居間ときめよう」

三つ子の魂、百まで、貞吉は大人になつても、やつぱりお化けと云ふと目がありませぬ。

さて、その貌貞吉は、何時ものやうに枕許に刀を
あいて、その廣い部屋にぐつすり眠りました。
が、夜中にふと目をさました貞吉は、

「あッ大變だ！ なッ、ないぞッ！」

さう叫びざまガバツと蒲團の上にとび起ると、
戸外の月光でほんのりと明るい部屋の中をみまはし
ました。たしかに昨夜、枕許にいた大小が見えな
いのです。

「あッ！ こんなところに……」

貞吉はホツと胸をなで下ろしました。大小は何時
の間にか蒲團の裾の方にさちんと揃へておかれてあ
るのです。

「不思議だ、實に不思議だ……」

貞吉は首をかしました。何處からともなく生臭
い風が吹いて来て、虫の聲一つきこえない臺灣の夜
は次第に更けて行きます。さすがの貞吉も首すぢが
ゾク／＼するやうな氣味悪さに、もうどうしても、

ねつく事が出来ませんでした。

次の日も、その次の日も、貞吉が枕許にいて寝
た大小は、朝になるときつと裾の方に置きかへられ
てあるのです。

貞吉は、今夜こそ、眠らないで、何者の仕業か見
たしかめてやらうと思ひました。そして、暗かりに
薄目をひらいて、一生懸命にあたり注意を拂つて
居りました。十一時——十二時——一時——けれど
も、誰一人はいつて来る模様もありません。さうか
うしてゐるうちに、つい、うと／＼と眠つてしまひ
ました。

「しまった！」

さう思つて目をひらいた時には、もう枕許には刀
はありませんでした。

二

次の夜は、昨夜の寝不足で、どうにも我慢がなら

ず、貞吉は早くから寝てしまひました。

同じ夜、奥の間に寝てゐた下男の兵助は、夜中に
なつて、急にお腹が痛んで來ました。主人の貞吉は
良い漢法薬をもつてゐますが、幽霊の出るといふ部
屋に寝てゐると思ふと、どうしても貰ひに行く氣が
しません。兵助はお腹を抱へて、うんうんと呻りな
がら、我慢をしてをりました。痛さは、次第にひ
どくなつて來るばかりでした。かうしてゐると、今
にも息がとまりさうです。兵助はたうとう蒲團から
ぬけ出して、主人の部屋の方に這つて行きました。
そして、おそる／＼部屋の中をのぞき込みました。
と、あゝ！ 其處には、美しい支那人の女が、赤ん
坊を抱いて、貞吉の枕許にしゃがんで、大小に手を
かけてゐるではありませんか？

兵助は助けを呼ばうにも聲が出ません。ころがる
やうにして自分の部屋に逃げかへりました。おかげ
でお腹の痛みは何處へやら、兵助は朝まで齒の根も

あはぬやうにガタガタとふるへながら、蒲團にもぐ
り込んで居りました。

「ダツダツ旦那ッ！ もう俺アこんなところは御免
だ！ 早く歸りませう、國へ歸りませう！」

翌朝兵助は、貞吉の顔をみるが早いかさう云ひま
した。

「なんだつて急にそんな事を云ひ出したんだ。まだ
仕事もはじめないうちから……」

「いや／＼！ もう俺は御免だ！ 旦那、まあ、ゆ
ふへ腹がやめて、旦那にお薬を頂戴しようと思つて
旦那の部屋に行つたと思ひなせえ！」

兵助は思はずアル／＼ツとして襟をかきあはせま
した。

「うん！」

貞吉は膝を進めました。

「ところがお化けが……支那人のお化けが、旦那の
大小に手をかけてゐましたぜ！」



「えッ！ 支那人のお化けが……」
貞吉は目をみはりました。

その晩貞吉は、大小に紐をつけて、それを首にし
ばつて眠りました。

それは夜中の一時頃でしたらうか、貞吉は首の紐
のグンと引きしめるのに目をさました。

「すはこそ！」と思つて、貞吉は蒲團の上に飛び起
きました。が、「アッ！」と思はず心に叫びました。

兵助の話の通りの支那人が……美しい支那婦人が
大切さうに赤ん坊を抱いて、すらりと立つてゐるの
でした。

「どッ、どこから来た！」

けれども幽霊は答へません。たゞ、消え入るばか
りに震へながら、二度ばかりうなづきました。

「お前は誰だ、何處から来たのだ。何か恨みがある
のか？ この部屋に心残りがあるのか。」

しかし、幽霊はやつぱり答へません。幾度か悲し
さうにうなづいて、やがてゆらくと動いて行つて
隣の部屋にかき消すやうに消えてしまひました。

三

支那婦人の幽霊は、それから毎晩々々貞吉の部
屋に姿を現はしては隣の部屋に消えて行きます。

「いや、幽霊のある筈はない！」

貞吉は心にくりかへしました。貞吉はどうかして
その正態をたしかめたいと思ひましたが、女の美し
い顔や、腕に大切さうに抱いた赤ん坊をみると、と
ても手をかける気にはなりませんでした。

もう十二時頃でしたらうか？ 或る夜、貞吉はふ
と思ひついて、女の出て来る隣の部屋をしらべはじ
めました。

柱を叩いたり、壁をなでたりしてゐるうちに、貞
吉はふと、部屋の隅の床が、少しガタ／＼してゐる

のに氣付きました。

「しめた！」

貞吉は、床の小さい穴に指をかけて引き上げました。と果して、一枚の床板が音もなくもち上りました。眞暗な板の下の穴に足を入れると、どうやら階段のやうに足場が出来て居ります。貞吉は穴の中に入りて行きなりました。と、冷たい風がどこからともなく吹いて来て貞吉の頬をなでました。遙か遠くの方から風にざわめいてゐる木の葉の音らしいものが聞えて来ます。どうやら、その穴は、外に突き出てゐるらしいのです。

貞吉は足でさぐりながら、頭のつかへるやうな、その小さい穴を歩いて行きました。穴は掘りつ放しで、土がポロ／＼と落ちて来ます。

十間も歩いた頃でせうか、貞吉の爪先は、ふと、何かにつかへました。穴が行き止まりになつてゐるのです。見上げると穴の口はボーボーと繁つた雑草

に蔽はれてゐますが、それでも、かすかに星の瞬く空が雑草の間から見えてゐます。

穴は出やすいやうにやつぱり階段になつてゐました。貞吉は雑草をかきわけて、やつと外へ出ました。すると、すくわきに古びた一軒の小屋がありました。窓の扉がほんの僅かばかり開かれて、そこから、薄暗い灯の光が、窓ぎわの椰子の葉を照らしてゐるのです。

「まだこの人は起きてゐるのかな？」

貞吉は不思議に思ひながら、そつと窓口にしのび寄つて中をのぞき込みました。

「あッ！ あの女だ！」

貞吉は思はず叫ばうとした聲をのみ込んで、じつと部屋の中をみつめました。部屋の中には一人の美しい支那婦人が、珠数をもつて、悲しさを顔をして佛壇の前に頭を下げて居るのでした。そして、佛壇のわきには、支那服を着た可愛い人形が飾つ

てあるのです。それは正しく、毎夜貞吉の部屋に出て来る女に違ひありません。

壁には支那の男の服が二三着かゝつてゐます。けれども一目で見通せる家の中には、この女の外に誰一人居る様子もありません。

「だが何のために毎晩あの部屋にやつて来るのだらう？」

貞吉はさう思ひながら、やがて窓ぎわから離れました。

そして見渡すと、あゝ、すぐ近くに見おぼへのある家があるぢやありませんか！ よくよく見るとそれは、貞吉が現に住んでゐる家なのでし



た。してみると、この小屋は古びて傾いてゐるのです、ついで、今まで来てみた事もありませぬけれど、たしかに貞吉の家の庭の隅にある小屋なので

「あの女には何か秘密がある：」さう思ふと、貞吉はまるで自分が探偵にでもなつたやうな心持がして来ました。

暫くそこらを見まはしてゐた貞吉は、やがて又雑草をかきわけてもとの穴にはいり込みました。そして暫く行つた時で

した。貞吉は、ふと音もなく近付いて来る人の氣配を感じました。

「来たな？」

貞吉がさう思つて、大急ぎで床板をあげやうとした時でした。女は貞吉の居るのに氣付いたか、突然「あッ」と叫んで、バタ／＼と、元来た方に逃げかへつてしまひました。貞吉は女の聲がまるで男のやうに太いので驚きました。

四

「旦那、こんな手紙が来てゐましたぜ」

次の朝さう云つて兵助が一通の手紙をもつて來ました。裏には「離屋金より」とかいてありました。

「あ、あの女からだ……」

貞吉は早速に封を切つてみました。中には長い漢文の手紙がはいつてゐました。それは大體次のやうな意味でありました。

くなりました。その内に私は家の人達にみつづけてしまひました。それから間もなくその人達は何處かへ越してしまひましたが、それからはお化け屋敷だと云つて、誰一人借りる人もなくなりました。ところが、今度、あなた方がいらつしやいました。

私はあの刀が氣になりました。それで、あなたが目をさましても、矢庭にさりつけられないやうに、裾の方へ置きかへたのです。私が可哀想だと思つたら、どうぞ今までの通りあの部屋に行かせて下さい。これを讀んだ貞吉は、そんなにも死んだ妻子を思ふ金さんが可哀想になりました。それで、早速、金さんと呼んでその部屋で一諸に暮させてやる事になりました。金さんは、悲しみのためか、少し頭が悪いやうでしたが、それでも、支那語のわからない貞吉の仕事の上に、ずいぶん役に立ちました。さて、五年間臺灣で働いた貞吉は、少し體をいためて、金さんをつれて内地にかへつて來ました。よ

「あなた方のいではなる家の所には、もと生蕃の家がありました。支那人が来て、生蕃を追拂つてあの家を建てました。それを最初私達夫婦が借りました。そこで、可愛い坊やも生れました。ところが或る日、追拂はれた生蕃が暴れて来て、私の妻と、子供を殺して家の中の寶をみんな奪つて行つてしまひました。

私は金もなく、家主に追出されて、この小屋に入られました。残された妻や子が忘れられず、私達が仲よく暮したあの部屋に行つては樂しかつた昔を思ひ出して居りました。ところが、間もなくあの家には人がはいつてもう行く事が出来なくなりました。私は淋しくてなりませんが、私はたうとう暇にまかせてあの家に通じる穴を掘つて、夜中に人の寝静まつた頃になると、なつかしい妻の着物を着て、坊やのかはりに人形を抱いて忍び込みました。私はもう一晩でも、あの部屋を見ないと淋しくて眠れな

く、幽霊と縁があると見えて、途中自分の般室の前を行つたり來たりする船幽霊を見ました。けれど、體の弱つてゐる時の事として、正體を見たしかめる事も出来ませんでした。恰度私達が貞吉爺さんの隣の家に越して行つた時には、もう貞吉は八十近かつたのでしたが、その臆病だつたことつたら……

「いや、俺は幽霊が怖くなりましたよ、あの船幽霊ばつかしは本物でしたからね。いや、あの顔のおそろしかつたことつたら……俺はあれ以來、もう幽霊はこり／＼になりましたよ。あんなおそろしい幽霊になるかもしれないと思ふと、俺は全く死ぬのが怖うござんす」

爺さんは私のもつて行つた菓子を頬張りながらよくかう云ひました。その貞吉爺さんが臺灣からの歸り、體が丈夫で、その船幽霊の正體を發いて、自慢の種に出來たんなら、どんなによかつたらうと、今でも惜しい氣がしてゐます。



ひょうたん童子

立石 美和

寺田 良作 畫

親せつな、正直爺さんがありました。
お爺さんは、親にも子にも、みんな死にわかれて
たつた一人でさみしく暮して居ました。

お爺さんは貧乏でした。ですから、年を取つても
毎日々々自分で働かなければなりませんでした。

けふも山へ行つて、一日働きました。そして、夕
方になつて、よつくらくと、つかれた足をひきづ
つて、山を下りて来ますと、後から、
「爺まで、爺まで！」
と、呼ぶものがあります。

振りかへつて見ると、これは不思議！ ひょうた
んが一つ、コロくと、お爺さんの後から、ころが
つて来ます。

「ちや／＼ちや！ これはおかしいぞ」
さう思ひながら、待つて居ると、ひょうたんも、
そこへ止つて動きません。

「それではわしは歸りませう！」
お爺さんが歩き出すと、コロ／＼コロ／＼、また
ひょうたんも、ころがり出す。

「それでは一つ、待ちませう！」
お爺さんが止ると、またひょうたんも、びたツと
止ります。

「歩きませう！」
コロ／＼。

「待ちませう！」
びたツ。
「では歸ろ！」

コロ／＼。
「では待たう！」
びたツ。

どうも不思議です。お爺さんは、ちつとそこへ、
立ちどまつて、しばらく首をふり／＼考へてゐまし
たが、

「それでは一つ、お爺さんに抱っこをしてもらん！」
と云つて、両手をひろげました。

すると、ひょうたんは、コロ／＼と、ころげて来
て、おちいさんに抱かれました。お爺さんが、よろ
こんで抱きあげると、ひょうたんの口から、すうッ
と煙が出て、煙と一緒に、可愛い子供が二人、ひよ
つくり姿をあらはしました。

「ちや／＼ちや！」
お爺さんが、おどろいて、呆れてゐる顔を見て、
二人の童子は、ニコ／＼ほ／＼をみながら、
「お爺さん、わたしはお前の孫六だ！」

「お爺さん、わたしはお前の孫七だ！」

と云つて、右ひだりから、抱きつきました。

お爺さんはよろこんで、

「あり難い、あり難い。これは神様のさづかり子だ。

爺が大事にそだてませう」

すると、孫六孫七は、

「わたしも孝行いたしませう！」

「わたしも孝行いたしませう！」

それから、

「爺さますきな飲みものは？」

「爺さますきな喰べものは？」

と、右と左から、聲を揃へていひました。

「ほう、爺々が好きなは、番茶と、それから團子だ、團子だ！」

お爺さんの云ふのをきいて、二人の童子は、交り

番こに、ひょうたんの口を叩いて、あたゝかい番茶

と、やわらかい團子を取り出ししました。

不思議なく、ひょうたんよ！ お爺さんは、いく

らも、おかわりをして貰つて、たんと、たあんと

いゝ氣持ちになりました。

「うれしく、あり難い！」

お爺さんは、二人の童子の手を引いて、ひょうた

んを肩にかついで、ブラリと歸つて來ました。

やさしいお爺さんは、途中で出會つた子供達には

甘いお菓子をやりました。困る人には、出來たての

御飯をお馳走しました。泣いてゐる赤ん坊には、お

母さんのよりもおいしいお乳を出して、のませまし

た。

さあ、その評判と云つたらありません。不思議な

ひょうたんのうわさは、たちまち國中へひろがりま

した。

お金持ちの家では、お祝ひや、不幸のあるたんび

に、お爺さんの所へ、たくさんのお料理を注文して

來ました。

お爺さんは、お料理のお禮で、間もなく大金持ち

になりました。

お汁のご馳走をして居ました。

すると、人のよくない男が、馬を七匹つれて、そ



ある日、お爺さんは、孫六と孫七を連れて、にぎ

やかな町の四ツ角へ坐つて、貧乏な人達に、ご飯や

こを通りかゝりましたが、ひょうたんの高いひょう

たんを見て、急に欲しくなつて、いやがるお爺さん

を、無理に説きたて、

「この馬七匹と、お金を三百圓やるから、そのひょうたんを賣れ、賣れ！」

と、せがみました。

孫六孫七は、そつとお爺さんの耳へ口をよせて、

「お爺さん、欲しいものならおやりなさい！」

と、教へました。

そこで、お爺さんは、その男に、ひょうたんをやりました。

よくない男は、お金と馬を置いて、にげるやうにコソ／＼と、行つて終ひました。

男は、すぐその足で、お殿様の御殿へかけつけました。そして、役人に、

「今ひょうばんの高い、不思議なひょうたんを、殿様にさしあげに來ました」

と、云ひました。

殿様は、これを聞いて、大さうよろこびました。

お禮には、望み次第のものをやると云つて、すぐその男を、奥の間へ通しました。

お殿様は、そのひょうたんさへあれば、戦争が起つても、兵糧は、いくらでも出るから大丈夫だと思ひました。

殿様の前で、さつそく、何かたべものを出すつもりで、その男は、大聲をあげて、

「そら出た！ そら出た！」

とひょうたんの口を叩きましたが、ご馳走どころか、水一しづくも出て來ません。

「わるい奴だ！ わたしをだましに來たのだな」

殿様が、さう云つて怒るので、男は、いよ／＼夢中になつて、あせを流しく、

「そら出た！ そら出た！」

と吐鳴つて、力一ばいひょうたんを叩きました。

すると、パチンと、音がして、ひょうたんが、こわれたと思ふと、パツと、一かたまりの白い煙が出ま

した。

「あっ！」

と云つて、見なほすと、もうそこには、ひょうたんも、ひょうたんのかけらもありません。

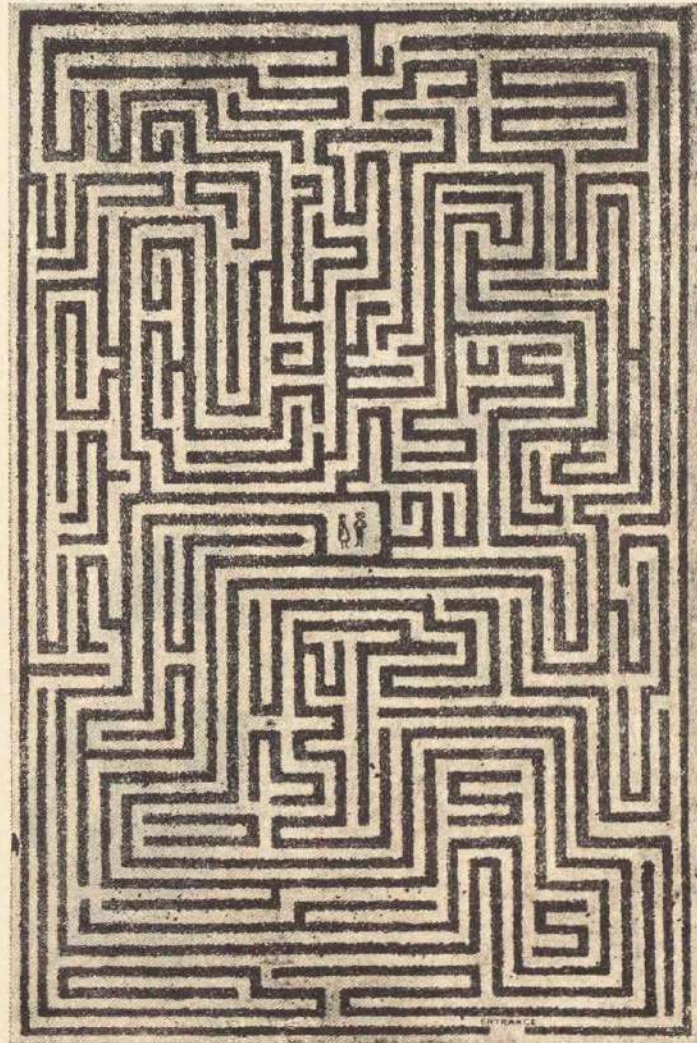
その男は、さん／＼しかられて、御殿からつまみ出されて終ひました。

……それから、ずつと、後まで、お爺さんと、二人の童子は、仲よくくらし居ました。



迷宮の中の子供を救けて下さい

(下の入り口から這入って、どの道を通ずんで行つたらいいか)



入口



楠正成の小さい頃

田中宇一郎

羽鳥古山畫

河内國金剛山の麓に住んでゐた楠左衛門尉正成と云ふ武士と、妻のお佐備の方との間に多聞丸と云ふ子供がありました。

目はバツチリと丸く、くりくると、よく、ふとつた子でしたが、いかにも、凛とした氣性のところは、他の子供と違つてゐました。

父の正成は、まさかの時の用意にと思つて、金剛山の麓、千早川の西岸に城を作りましたが、その普請中にこの多聞丸が生れたのであります。

多聞丸は、やがて、八歳になりましたが、皆さんが、今では學校の一年生に始めてあがる年頃ですから、父の正成も檜尾山の觀心寺といふお寺へあづけて學問させることにしました。

「そなたも、もう、八歳になつたからには、學問をせねばならぬ。武士となるには、學問は大切だ。これから、觀心寺につれて行くから、いやとは云ふまいな」と、父にきかれた多聞丸は、

「えい、お父さん、行きますとも。いやじゃありません

せん」と、きつぱり、答へました。

そこで、正康は、多聞丸をつれて観心寺にまゐりました。

さて、この寺の坊さんは瀧覺坊と云つて、たいさう、學問の出来る、えらい坊さんでした。

「おや、これが、息子さんですか。大きくなられましたのう。お年は八歳で」と、瀧覺坊は、多聞丸の顔をつくつく見ながら、頭をなでるやうにしました。

「八歳でも、今まで家にあまへてばかりゐたもんですから、まだく、ほんの子供です。これから、どうぞ、御坊のきびしい、おしつけを願はねばなりません」

「はい、出来るだけの事はいたしませう。でも、いつまで、わしの處にお預けなさる氣かな」

「お願ひするからには、一人前の武士となるまで、三年でも五年でも、十年でも、幾年でも、かまひません」



瀧覺坊は、ちよいと、考へましたが、

「なる程、その御決心ですか。では、とにかく、十五歳までと、いたしませう。そして、その間には只

の一度もお家へは歸しませんぞ。たとへ、楠さまの子息でも、寺に入れば、たゞの子供じゃ。ほかの小僧と同じに、庭の掃除や風呂焚きなどもさせますよ。

何か、落度があつたら、ようしやしない、叱りも打ちもいたしませう。どうぞ、そのおつもりで」

「それは、申されるまでもなく、こちらからのお願ひじゃ。悪いことがあつたら、ごえんりよなく、せつかんして下さい。たとへ、せつかんして死なうともかまひません。お坊の心になはぬ者なら、生かしておいても、役にはたちません」

「ウム、よく、云つて下さつた。それでこそ、わたしも、満足いたしました」と、瀧覺坊は、ニコニコ笑ひながら、多聞丸の手を、やさしく、とりあげて、

「さあ、今日から、この寺の子になつたのじや。このわたしを、お父さんやお母さんと思ひなされい」

多聞丸は、キツと目をすへて坊さんを見つめながら、黙つて、うなづいたのです。

「きつと、承知だな。それが、わかつたなら、わしの手を、強く、ギユウと握りなさい」と、瀧覺坊が、念を押すと、

多聞丸は、いきなり、坊さんの手を、力限り、ひしと、握りしめました。あまり、力を入れたので、顔が金太郎のやうに、まつかになりました。

握られた瀧覺坊も、しびれの切れるほど痛かつたのです。

「やッ、これは、えらいぞ。これでこそ、りつばな

武士になれるのだ。今度は、こちらへ出で」

七六

七六

七六

かう云つて、多聞丸の手をひつばつて行つたかと思ふと、今度は、不動明王の御像の前に來ました。多聞丸がふしぎさうな目をしてゐると、

「さあ、これは、不動明王さまぢや。もし、そなたが、お父さんが慕はしい時には、この不動明王を拜むのだ。寺の子となつた者は、この明王をお父さんと思ふのじや。わかつたな」と、瀧覺坊は聞かせました。

すると、多聞丸は、やはり、黙つて、うなづくきりでしたが、暫く、じいつと、不動明王を見つめてゐたかと思ふと、

「多聞丸は、お寺の子だ」と、始めて、只一言、さつぱりと云ひました。

「ウム、この子は、今に、きつと、りつばな武將になるぞ」と、坊さんは、心ひそかに思ひました。

さて、いよいよ、父正康が歸つてゆき、多聞丸は一人、寺に残されました。



多聞丸は翌朝から四時に起きる寺の規則を守つて床を出るなり、顔を洗つてから、先づ不動明王を拜み、瀧覺坊の前に「お早うございます」と挨拶をしました。それから、廣い板敷や柱に雑巾がけをし、お膳も運び、水汲みなどしてから、粗末な朝飯をすますと、勉強室にはいつて、一心不乱に本を讀み、お習字をやりました。

お師匠の瀧覺坊も、とりわけ、多聞丸を大切にすゐるものですから、意地の悪い仙覺と云ふ小僧さんが師匠、まの高野山へお詣りにいつた留守を幸ひ、ほかの小僧さんと組になつて、多聞丸をいぢめることになりました。

その日は、折りも折り、俄に雪が降り積つて、庭一面まつしろになりました。意地悪の仙覺は五六人の小僧さんといつしよに、庭の外から、

「やあい多聞、やあい」と、叫びました。その時、多聞丸は、ちやうど、机で手習をしてゐ

ましたが、いきなり、障子をあけて、

「うるさいッ。今、手習をしてるんじや。師匠さまがゐないと云ふのに」

「なまいき云ふな。お前にきくことがあるんだ。ちよつと、こゝに出て來たまへ」

「今、いけないよ。勉強してるんだから」

「そんなこと云はずに、大事の用があるんだから」

「大事の用があるといふのか。そんなら、出ていかう」

仙覺は、しめたと思ひながら、

「あい、多聞、こつちへ來い」と手招ぎしました。

「いつたい、何用じや」と、多聞丸は詰めよせて來ました。

「角力をとらうよ」

「角力か。どんな大事だと思つたら、角力なんか、しやだよ」

「や前は、武士じやなつか」

仙覺は、すごいけんまくで云ひましたが、多聞丸は黙つて、とりあひません。そこで、ますく、仙覺は聲をあらゝげ、

「武士が敵に名乗りかけられて、相手をしないのは意氣地がなぞ」

「お前は敵じやないよ」

「なにッ」と云ひざま、仙覺は、いきなり、多聞丸の手を取り、

「敵でなくても、かうすれば、黙つてをられまい。お前の腕をへし折つてやる」と、ギョウとひねり上げました。

「やい、何をするんだ。放せッ」と、とう／＼、がまんし切れず、多聞丸は、力限り腕を振つたので、仙覺は、よろ／＼と木の根にたふれかゝつたのです。

小僧さんたちは、多聞丸の方が強いのに、舌を巻いて、びつくりしたが、味方は大勢だから、仕返しに打ちかゝらうとしました。

「よし、多聞、なまいきするな」と、叫びながら仙覺は起き上がり、

「さあ、みんな、お前をぶつてやるぞ。ぶたれるのが、いやなら、わしの股をくぐれ」

でも、多聞丸は、また、黙つて立つてゐました。

そこで、小僧さんたちは、前後左右から、いつせいに、木の片をふり上げて打ちかゝると、多聞丸は、ひらりと、身をかはして空を打たせました。

その時、「多聞さま」と、叫びながら、あたふたと木戸口から、飛び込んで来た一人の子供がありました。

「あゝ、八郎か。何しに来たんだ」と、敵を防ぎながら、多聞丸は、たづねました。

「いや、それよりも、このさはきは、どうしたのです」と、八郎は云ひながら、いきなり、竹杖をふりあげ、打ちかゝつて来る一人の小僧の肩をピンリと打つたとたん、小僧は、よろ／＼と雪の中へ倒れて

しまひました。もう一度、八郎が竹杖をふり上げた時、

「八郎、よせッ。この人たちは御師匠さまの弟子じや。ぶつてはならんのだ」と、多聞丸は、とめました。

「でも、あんまり、らんぼうです。多聞さまが、けがでもしたら、それこそ」

「かまはん。わしは、こらへる。わしは、どうでもお師匠さまの弟子をぶつちやいけない」

「でも、あんまりです」

「なに、ぶつてもいい時には、わしがぶつ。これしきの相手に、助太刀はいらん」

これを聞いてゐた仙覺は、木の片を手から捨て、いきなり、雪の上に両手をついて、

「わしが悪かつた。許して下さい」と、あやまつたのです。

「ウム、許してやるとも」と、多聞丸は、あつさり

してゐました。

ほかの小僧さんも、みんな、あやまりました。

「このことはお師匠さまに黙つてゐて下さい」とまた、仙覺が、云へば、

「ウム、黙つてゐるよ。みんな、忘れてしまはう」と、多聞丸は、きつぱり、答へました。

八郎は、多聞丸の家來でしたが、この日、ちやうど、山の寺へ修行に来たのでした。

かうして、多聞丸は八郎といつしよに、十五歳まで學問を續け、それから、三四里ばかり奥に住んでゐた大江時親といふ人に武術兵法を學びましたが、十六歳になると、いよく、元服して、楠兵衛正成と名乗りました。

この人こそ、あとで、大忠臣楠公と呼ばれ、宮城の前に大きな銅像が立つてゐるのを、みなさんは、よく知つてゐますね。

ばら雀

(推慶)
東京竹内武雄

ばら雀
ばらの實きいろく
うれました

ならんだ
ならんだ

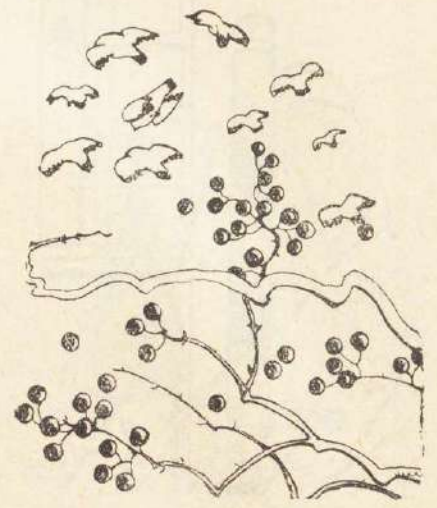
ばら雀



こつそり
こつそり
空気銃
ばら玉つめたぞ
あぶないぞ
にげたな
にげたな
ばら雀
ばらの實バラバラ
散りました

惠那山

(推慶)
岐阜伊藤益平



鯛乾し

(推慶)
福岡西岡水朗

鯛乾し場の
おちさんたちよ

キタホレ ヤレキタ
ヤレホレサー

みさかの峠で
惠那山
チヨイと見りや

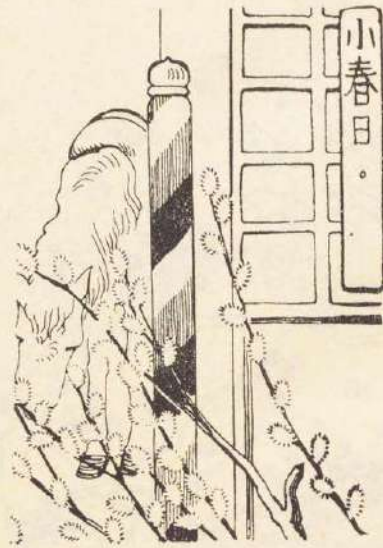
お鍋をかぶせた
可愛い形
みさかの峠の
月夜に
チヨイと見りや
雪がほんのり
かかつてほんのり

お空は青いに

お、忙がしい

キタホレ ヤレキタ
ヤレホレサー

ひろいむしろに



雀がむれてる

キタホレ ヤレキタ

ヤレホレサー

鯛敷へちや

お、忙がしい

キタホレ ヤレキタ

ヤレホレサー

蓑

虫 (推薦)

東京川島秀雄

小春日

日 (推薦)

福岡山井八郎



通り横町の

お馬も止まつて

學校がへりの

こどもが一人

とろん小春日

お馬もねむいよ

チャルメラなんぞも

遠くにきこえて

通り横町の

床屋のかみみに

チョコキく、銚も

光つてゐたよ



夕やけだ

蓑虫ア 夕やけ

ながめてた

蓑から ちよいと

ながめてた



おもしろいお芝居

おびんづるさん

久米元一

岩岡とも枝畫

(出てくる人)

小僧さん二人

和尚さん

お婆さん

村の人

(場所) ある山寺

(時) 春の朝

(幕あくと、舞臺はお寺の本堂。正面に

佛鉢、その前に木魚だの、燻燻たてだのお賽銭箱などが置いてある。花瓶には桃の花が活けてあるが、もう大方散りつくして緑の芽だけが残つてゐる)
(右手から、小僧の一念が、鉢巻をして、手に箒を持って出てくる。舞臺の真中へ来て黙つて見物席の方を見廻す。この時間、なるべく長き方がよろし。やがて左手の方を向いて、大聲で囁く。)

一念「おーい、一念やアーい！」

一念「おーい、一念やアーい！」

(遠くの方で、ぼーいと返事をする聲が聞えて、やがて一念よりは少し身體の小さい一念が、手にバケツを下げて出てくる)

一念「何をぐづぐづしてゐたんだ。

早く雑巾がけをしないと和尚さんに叱られるぞ」

一念「だつて、お前が掃いてくれな

きや、拭くわけには行かない

ぢやないか」

一念「なんだと？ お前近頃生意氣

な事をいふやうになつたな

：が、まアいや、一念。

ほら麓の方を見る。すつかり

春景色ぢやないか。土蔵の白

壁に一杯日が當つてらアや、

はねつるべが上つたぞ。茶店

の婆さんが水を吸んでるんだ

な。あ、お婆さんが逃げた……」

一念「茶店といへば、こんど彼處に

珍らしいお菓子来たぞ」

一念「珍らしい菓子？ ふーん、ど

んな菓子だ」

一念「口で云つたつてわからぬや

食べて見なさい。……あゝ食

べたいなア」

一念「ぢやアお前大急ぎで行つて買

つてこい。その間に俺が掃除

しておくから」

一念「だつて、お金がないぢやない

か」

一念「お金なら、いくらだつてある

よ。ほしだけあるよ」(へん

な眼つきをする)

一念「どこに？」

一念「どこにツて、そこにあるぢや

ないか」(頭でお賽銭箱を示す)

一念「不思議さうな顔をしてゐる)

一念「ちえツ。覺りわるい奴だな

ア……。これだよ」(お賽銭箱を

ガラ／＼と振つて見せる)

一念「驚いて」『だつて、そんな事を

したら叱られるよ』

一念「大丈夫だよ。和尚さんは未だ

寝てるよ。それにもと／＼こ

のお賽銭は佛さんのものだから

う。だから佛さんに断はりさ

へすりやいゝんだ。さア一念

手傳つてくれ」

一念「ぼくア嫌だ！」

一念「嫌だと？ よオし。あとでひ

どいぞ！」

一念「渴するも盗泉の水を呑まず」

一念「さつたやうな事をいふない

面白くもない。君が嫌なら僕

がやるだけの事だ！」(一念佛さ

んの前へ行つて、ゴーンと一つ木魚を

叩いてくる。それから賽銭箱をひつ

りかへす。一錠銅貨や五厘錢が二三

ツ飛びだす。その時、隣の室で、えへ

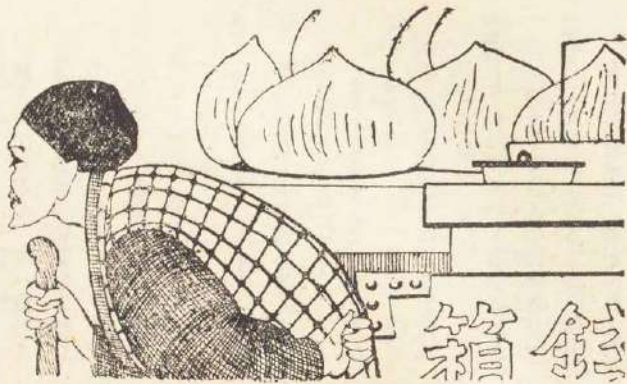
ん！といふ和尚さんの嘆はらひがきこ

える。一念あはて、なにかも放り



だしたまへ左手へ渡げる。次念はボカ
 シとしてゐる。和尙さん出てくる。
 和尙「こりや次念。そこで何をして
 ゐる」
 次念「あはて〜」あの、その、僕、
 なにも、その」
 和尙「なにもそのが、どうしたのぢ
 や」
 次念「あの、その……」
 和尙「これ、正直に物を云へ！ 正
 直に……正直に云ひさへすれ
 ば決して叱りはせん。ワシン
 トンは未だ小さい時に、櫻の
 木を……」
 次念「だつて、僕……」
 和尙「その「だつて」がいかんのぢ
 や。次念。お前は罰として、
 今日一日中、おびんづるさん

八八
 の真似をしておいで！」
 次念「つまらないなア、僕ぢやない
 のになア」
 和尙「それ、その他人に罪をさせる
 のが一番いけないのぢや。(蓋
 を持つて来て、その上に次念を坐らせ
 る)いゝか。ちいッとしてゐる
 のぢやぞ。ちッとも動いちや
 不可んぞ。今に村の人達が來
 て、いろんなお供物をするだ
 らう。その内の食物だけはお
 前にやる。お金は俺が貰ふか
 ら……。いゝか動くんぢやな
 いぞ。(和尙さん出てゆく)
 次念「暫くの間は、神妙に蓋の上に坐つて
 ゐる。その内にだんく退窟しだして
 眼をくり〜させたり、欠伸をしたり
 する。終にはたまらなくなつて、ウー
 ンと腕を伸したり、足を投げだしたり



する。
 (そこへ、村の人が一人、手に櫻餅の
 包みを持つて出て来る。次念はあはて
 うちやんと蓋の上に昇る。左手は膝
 の上に、右手は「失敬」をしたやうな
 恰好にする。村の人、次念の前へ來て
 つくんとその様子を眺める)
 村人「ほら。これはおびんづるさ
 まぢや。はアてね、何時の間
 に出來たんぢやらう。まあと
 にかく有難いことぢや。俺も
 何處か一つの痛いところがあつ
 たッけが……。あゝさう〜
 足だ〜。足が痛いんだッけ
 ……もうし、おびんづるさま
 お願ひでござります。この者
 は日頃足が痛うて難澁してを
 ります。この櫻餅を半分さ
 しあげますゆへ、どうかすく

お癒し下さいませやう。もう
 し、おびんづるさま。(かう云ひ
 ながら、次念の足を撫でまわす。次念
 くすびつたさうな顔をする)
 次念「たまらなくなつて」「これ、もうよ
 い〜。もう分つた、分つた」
 村人「へーい？ (驚いて見上げる)これ
 は不思議！ おびんづるさま
 が口をききなされた。これは
 不思議！」
 次念「其方の願ひは確かにきくと
 けた。安心して家へ歸るがよ
 い。足の痛みは拭つたやうに
 癒るであらう。だから櫻餅を
 みんな置いてまわれ」
 村人「平伏して」「ありがたうござい
 ます！ ありがたうございま
 す！ なんと云つてお禮を申

上げてよいか……こんな櫻餅だけではなく、家へ歸つてもつとどつさり御供物を持って参ります。ありがたうございます！ ありがたうございます！ (ころげるやらにして歸つてゆく)

次念 (菓子のかみをかまへながら) 「こりやおびんづるさん、まんざら悪くないぞ！」

一念 (そこへ一急出てくる。次念の菓子包みを見て驚く) 「……」

次念 「どうしたついでい、ちやないかおびんづるさんの御供物だ」

一念 「そこでおびんづるさんの真似をしてゐると、皆が呉れるのか」

次念 「さうだ」
一念 「うまくやつてるなア。一遍僕と代つてくれよ」

次念 「いやだよ。君はお賽銭で菓子を買つたらいいちやないか」

一念 「生意氣云ふと、ひどいぞ！」

次念 (次念に飛びかゝつて、臺の上から引き下り落す。次念をきながら、隣りの部屋へゆく)

次念 「いゝよ、和尙さんに云ひつけてやるから……」

一念 (一念、臺の上へ上る。暫く待つたが誰れもこない。しびれがきれて、もちもちしてゐるところへ、お婆さんが出てくる。お婆さんは眼が悪いと見えて杖をついてゐる。一念あはて、キチンと坐りなほす)

婆 「五郎助さんの話では、山寺に大へん立派なおびんづるさん

一念 「あッ！ もうよし。もうすツかり分つた。はつきり分つた！ お前の云ふ事ははつきり分つた」

婆 (驚いて、まじりと一念を見詰める)

一念 「お前の願ひは確かに聞きとどけた。もう歸つてよろしい」

婆 (驚はしさを顔をして、右から見たり左から見たりする)

一念 「ア、もう歸つてよろしい」

婆 「ありがたうございます。では歸らしていただきます」 (杖をついて歸りかける)

一念 「これ、ちよつと待て」

婆 「へい。お呼びでござりまするかッ」

一念 「うむ、お前、忘れものはないかッ」

婆 (身の廻りを見て) 「いゝえ、なん

にも忘れ物はございませんね」

一念 「いや、何か置いてゆくものを忘れはせぬかと申すのぢや」

婆 「あ、お供物でございますか。これはとんと失念いたしました。さやう、お供物は眼が癒り次第、早速お届け致しますでございますませう」

一念 (お婆さん、歸つてゆく。一念はその後姿を見送つて、すつかり見えなくなる。いきなり臺から飛び降りて、隣りの室へ進入つてゆく。暫くすると大きな洗面器に水を一杯入れて持つてくる。そして、臺の上へ上つて、眼を洗ひはじめる。なんども洗ふ……)

幕

(附記、これは讀むよりも、實際やつてみると中々面白いものです。ことに最後の所作だけで見える所は、作者内心得意であります)

が出来たさうな。ありがたいたいことぢや。私も一つ、このトラホームを癒して貰はうか」

一念 (一念の前へ来て坐る。一念、トラホームと聞いて、苦い顔をする)

婆 「もうし、おびんづるさま、私は昨年からトラホームとかいふものにかゝりまして、ひどく難儀してをります。どうか御利益をもちまして……」

一念 (ひながら、自分の眼をさすつて、一念の眼をさすつらうとする。一念驚いて、思はず顔そむける。お婆さんも吃驚して「おや」と云つて、おびんづるさんを見なほす。一念は又元通りしやんとする。お婆さんは又解らうとする。又、顔をそむける。こんな事を二三度ついでける。お婆さんはとうとうしやみしつかりと一念を押へつけて、眼に觸る)

「金の星誌友」募集
誌友とは、なんの事か？
誌友とは、つまり、金の星のお友達のことです。『金の星』を可愛がつて下さるお方のことでもあります。『金の星』は皆さんから可愛がつて、戴く事によつて、よい雑誌がますますよくなつてゆく事が出来ます。
誌友になると、いろ／＼な利益がありますから、どうか皆さん、ふるつて誌友になつて下さい。手帳はなんでもありません。『誌友』になりたいたから規則書を送れ、とハガキでお申越し下さいます。それをごらんになれば、すぐお分りになります。



鬼が梅干になつた話

羽鳥 古山

同 畫

ある時、太閤秀吉が、最明寺時頼のやうに、日本の國々を、廻り歩いてみようと言ひ出しました。豊臣の天下になつて、世の中は無事に治つてゐるやうですが、まだ秀吉をよく思はないで、折があれば「やつつけてやらう！」と、いふ悪い人達がかくれてゐないとも、かぎりませんでした。太閤様のご家來達は、大變、心配致しました。なんとかお諫言して、お止めしなければならぬ、その役を、前田玄以に頼みました。

玄以といふのは、もと、比叡山の坊さんでしたが、いまは、丹波の國の八上の殿様で、京都の諸司代といふ、なか／＼やかましい人なのです。最明寺殿が、坊さんの姿で、國々を一人で廻つたと、いはれてゐますが、あれは、後世の人達のつくり話だといはれてゐます。あんな真似をして歩くとは、是非止めて下さいまし」と、いろ／＼と、お諫言しましたけれど、太閤様のご機嫌を、ますます悪くするだけで、なんにもな

りませんでした。

智慧も、勇氣も、我儘も、比べものゝない太閤様が、云ひ出したのですから、ご家來達も、ほと／＼困りました。

「なんとか上手い、方法がないでせうか？」

「前田さんでさへ、駄目なですからね」

「しかし、この儘で、もしやのことでもありますと、豊臣の名譽に、瑕がつきますから」

「お氣に入りの、曾呂利にやらしたらどうでせう」

「ほんとうに冗談はうまいが、お諫言なんか、出来ずかしらう」

と、曾呂利を、あやぶむご家來もありました。なかにはまた、

「あんな、ご主君の機嫌ばかりとする男は駄目ですよ」と、てんで、相手にもしない、ご家來もあります。それならば、と云つて、誰を頼んだらよいか、なか／＼適當な人が、おもひつきません。

あまりお諫言が過ぎて、「うるさい奴だ！」と、叱られたあげく、閉門ぐらひですめば、先づよいのですが、切腹や、お手討ちなどになつては、命がけの役目ですから……。誰れ彼れと、相談の結果、とう／＼、曾呂利を頼むことにきめました。

近頃、すこし、からだ工合の悪かつた曾呂利は、くすぶつたやうな顔をして、頼みに來た家來に、「太閤様お一人で？ それは危い。これからすぐに参りませう」

と、この重いお役目を、どう考へたか、造作もなく、引き受けました。

ご家來達は、自分の方から、頼んでおきながら、「曾呂利奴！ あんな安うけ合ひをして、我々に迷惑をかけるやうなことをすると、承知しないぞ！」と、ご前に出て、待つて居りました。

太閤様は、一人で旅行しようといふのに、みんなが反對をするので、機嫌を悪くして、ろくに、口もきかざせんでしたが、曾呂利の顔を見ると、
「暫く見えなかつたなあ？ 何か、面白いことはないか。退屈で困る」と、云ひました。

いくら伶俐な、太閤様でも、よもや、曾呂利が、お諫言に來たとは思ひませぬ。

「はい、また病氣をしましたので、御無沙汰致しました。不動尊へ、お願ひをしたら、すぐによくなりましたので、今日、ご機嫌をうかがひに出ました」

「ほう！ それはよかつた。どこの不動尊へお願ひをしたのだ」

「はい、河内の福王山の光の瀧不動尊でございます」

「光の瀧は、景色の好い處だそうだが、定めし、好かつたらうなあ！」

と、太閤様は、羨しさうです。
ご家來達は驚きました。景色の話を始め、かへつて、旅行を、すゝめるやうなものだ。「そんな話は止める」と、云ひたいのですが、太閤様の前ですから、我慢してゐますと、曾呂利は平気で、話してゐます。

「はい、聞きましたより好い處なので、先づ、こゝらあたりで一休みと、岩に腰をかけて眺めました」

「好いだらうなあ！」

「ところが、暫く、見とれて居りますと、瀧の音がだん／＼高くなりまして、瀧壺からは、もく／＼と霧が、雲の様に、わいて來て、あたりは暗くなり、ポツ／＼と、と雨まで降つてきました」

「山の天候は、變り易い。用意をして登らなければ……」

「用意はして参りましたから、霧や雨には、驚きませんでした、それは／＼とんでもない、偉いもの

にあひました」

「なに、出合つた？」

「いつたい、何に出合つたと思召しますか？ あててごらん下さいまし」

「そうさなあ？ 大蛇でも出たのか？」
と、太閤様は笑ひました。

「いえ、そんなものではありません」

「では、猪？ 熊？」

「いえ、と、いふやうに、曾呂利は、頭を左右にうごかしました。

ご家來達も、つい話につりこまれて、「偉いものつて、いつたい何が出たのだらう？」と、思ひました。

「あの山には、だいいち、そんなに偉いものなんて居るものか」



と、太閤様が云ひますと、曾呂利は眞面目くさつて。

「それは、お解りにはなりません」

「なぜ？」

「なぜ？」と云つて、出てきましたのは、身のたけ一丈餘もあると思はれる赤鬼ですもの」

「家來達は、「いま／＼しい奴だ。また、冗談で一杯くわされた」と、思ひましたが、太閤様は、そんなことではまけません。」

「ほう！赤鬼が出て来たか、それがどうした？」

「どうしたも、かうしたもありません。いきなり、二本の指で、私をつまみあげて、引き裂いて喰はうとするのです。弱つてしまひました」

「やれ／＼、意氣地のない奴だなあ！なぜ、渡邊の綱のやうに、抜き打ちに、鬼の腕でも、切つてやらないのだ」

「ところが、どうして／＼、鬼もあの時分から見ま



すと、年をとつたせいとか、その皮の堅いこと、まるで、銅のやうで、とても切れません」

「では、切りかけてはみただけだね？」

「いゝえ、ちよつとさわつてみたのです。そうかといつて、このまゝ喰はれるのも残念ですから、ない智慧を絞つて、鬼に頼みました」

「なんと頼んだ？」

「生れて始めて、君にあつて、ほんとうにうれしい。死んで、地獄なでもゆかなければ、見ることも出来ないだらうと、諦めてゐたのに、いのちのあるうちに會へたので、なんだか、安心したやうな氣持がする。とてもの大手に、お得意の、變化の術とかを、是非、一度、見せて貰ひたい。さうすれば、もう、喰はれても思ひ残すことはない、と、頼みました。」

「ふん、鬼は頼みを、きいてくれたかなあ？」

「はい、聞いてくれました。變化の術なんて、容易いことだ。そこに見て居給へ。」と云つて、ひよいと私を、岩の上に置いたかと思ふと、煙のやうに消えてなくなつて終ひました」

「それで、その隙に、逃げかへつたといふのか？」

「まさか。曾呂利はそんなに卑怯者ではございません。ちつと、あたりを見はつてをりました。すると岩の上を、ころ／＼ところがつたものがあります。小さな梅干なのです」

「おかしいなあ？」

「私も、おかしく思つたので、つまんでみると、ピク／＼動いて居ります。見てゐたら、小さな／＼聲がきこえます。耳のそばへもつてゆくと、變化の術とは、こんなものだ。まだいろ／＼なものになれる。別なものになつてみせてやらうか？だが、そんなに強く掴んで、からだ痛くつて困る。と、梅干になつた鬼が云ひますので、掌の上にのせました。皺のところ、鬼の顔に似てはゐますが、ちつとも恐くはありません。可愛らしい梅干なのです」

と、片手をあげて、さも／＼小さな梅干が、掌上のつてゐるやうな様子をしました。

しかし、曾呂利のその様子！

その顔は、いま／＼に見たこともない程、哀れに悲しく、眼には涙さへ、ひかつてゐるのです。

「どうしたのだらう？」太閤様も、腕ぐみをして、黙つてそれを見つめてゐます。

ご家来達は、どうなることかと、気が氣でありませぬ。

呼吸づまるやうな、重苦しい、時がすぎました。

太閤様は、獅子のうなるやうに、

「うんー！」

と、息をついて、

「話は、わかつた。早く梅干を喰はぬと、又鬼になるぞ！」

曾呂利は、掌を口にあて、大急ぎで、梅干を喰べる真似をしたかと思ふと、する／＼と、後へ下つ

て、

「恐れ入りました！」

と、平伏しました。

「ご苦勞であつた。おつて褒美をあげる！」

と、いつて、太閤様は立ちになりました。

ご家来達は、なんだか、狐にでも化かされたやうでしたが、やつと、曾呂利の冗談が、立派な諷言の言葉だつたことに、気がつきました。

讀者は、もう、おわかりになつたことと思ひま

す。

いふ迄ありません。身の丈二丈餘もある、赤鬼

といふのは、威勢天下に並びない、太閤秀吉に比喩

たのであります。

しかし、いくら強い秀吉でも、一人旅の、坊さん

になつては、鬼が、梅干になつたやうなものですか

ら……。

(おしまひ)



仙人のしぐじり

西川喜平

神谷萬吉畫

一人の仙人をつれて來ました。

髪も髯も、ぼう／＼と生へ、ボロボロの衣物を着

た、見るも汚らしい仙人でした。

慾兵衛はこの仙人の不思議の術を見てから、金儲

の種にしようと、つれてきたので、先生／＼と大切

にあつかひました。

「先生、このあひだ拜見した、あの瓢箪の中から、

出入する術を、もう一度見せていたゞきたいので。」

と、慾兵衛はしきりに、仙人に向つてたのみました。

「ほかならぬお前のたのみだ、見せてやつてもいい、

熊手屋慾兵衛といふのは、曲馬團や、西洋魔術師
や、そのほか芝居や踊りの一座を雇つて興行するの
を商賣にしてゐる男でした。

ある時、慾兵衛は何所の山から探し出したのか、

が、どうも二三日からだの具合がわるいので、うまく出来さうもないよ。」

「へー、あなたのやうな方にも、御病氣があまりになるのですか。」

「イヤ己は今まで山にゐて、震ばかり吸つてゐたのだが、お前の家に来てから、狭い所で汚い空気を吸つたので、腹具合がわるくなつたのだ。」

「コレハ恐れ入りました。どうぞ御勘辨を願ひます。それでは廣い所へ御案内をいたしませう。」と惣兵衛は仙人を方々の宿屋へ案内をしました。いろいろいふに元の山へ歸られては大變だと、とうとう帝國ホテルの部屋を借りて、仙人を住まはせました。

仙人は、帝國ホテルへ来て見ると、廣々としてゐる上に、綺麗に掃除も届いてゐるので、スツカリ、ホテルが氣に入つてしまひました。

そして仙人は、ホテルに幾日もゐる中に、今まで

あいてありました。

そこへ、フロックコートの形装で、出て来たのは熊手屋惣兵衛でした。

惣兵衛は、形装だけは立派な紳士ですが、見るからに下品な男で、ビョコ／＼頭を下げて見物にお辭儀をしました。

「エー、今日は皆さま方に、あいでを願ひまして、まことに有がたいことで、厚く御禮を申し上げます。」と云つて、またお辭儀しました。

「私にはる／＼印度から、數萬圓の金でつれて参りましたのは、生れてからまだ世の中を見たこともないと云ふ、カラ／＼仙人と云ふ不思議の仙人でございます。この仙人の行ひます術は、世にありふれませんでした。奇術、魔術とは違ひ、カラ／＼仙人のほか、全世界中でやる者のない、奇妙キテレツ、マカ不思議の術でございます。この不思議の術を一度見ますだけでも、數萬圓の値打がございます。」と惣兵衛

空気がかり吸つてゐたのが、はじめて西洋料理を食べて見ると、そのおいしいのに驚いて、だん／＼食べ慣れる中に、料理の好みをいふやうふになり、形装も今まで着古した衣物を脱いで、洋服に着替へ、すつかりハイカラになつてしまひました。

惣兵衛は、もうそろ／＼金儲にかゝらうと、いろいろ面白い事を云つて仙人にすゝめ、いよいよホテルの演藝場で、仙人の不思議の術を、世間へ廣告の爲に、新聞記者や、そのほか大勢の人を集めて、見せることになりました。

その日になりましたと、招かれた人達は、今まで話に聞いたり、繪で見たりしたことはあるが、仙人とはどんなものか、又不思議な術とはどんな珍らしいことをするのかと、見ない前から大評判で、大勢つめかけて來ました。

やがて演藝場の舞台の幕が、スル／＼と左右へ開きますと、高い台の上に、一とつの小さい瓢箪が、

は、ちぎにお金のことを云ひ出します。

「その術と申すのは、こゝにいてございます瓢箪の中からカラ／＼仙人が出て、空中を自由自在に飛び廻り、又この瓢箪へ入ります。珍妙無類の不思議な術でございます。どうぞ御覧の上は、それからそれへと、御吹聴、御評判のほど偏に御願ひ申し上げます。」と、惣兵衛はまたお辭儀しました。

「長口上は御退屈、これよりいよいよカラ／＼仙人、不思議の術を御覧に入れます。」と惣兵衛は云つて瓢箪の口へ顔をよせ、中を覗きました。

見物は、あの小さな瓢箪の中にあるとは、どんな人間だか、おとぎ話にはよく小人が出るが、はやくみたいものだ、と大勢は息をツメて瓢箪を見つめておました。

惣兵衛は、瓢箪を覗きながら、

「先生／＼。」と呼びますと、瓢箪の奥の方から、

「オイ／＼惣兵衛、カラ／＼仙人とは誰のことだい。」

そんな出たらめな、ヘンな名をつけてはこまるぜ、それに數萬圓でつれて来たなんて、嘘もいゝかげんにしろ、己はもう出るのはイヤになつた。」と仙人の聲が聞えました。

慾兵衛は驚いて、「どうぞ御勘辨を願ひます。御腹立は御尤ですが、あゝ云はないと、あなたに値打がつかないので、今先生がお出にならないと、私は腹でも切らなければなりません。」と泣き聲で云ひますと、
「それほどこまるなら出てやるが……大勢人間が集つてゐるが、どれも美しい男や女だな、前からはやく云つてくれれば、己ももう少し髪でも刈り髻も剃つて綺麗にしてくるのだ。」と仙人の聲に、慾兵衛は困つた顔つきで、
「今そんなことを、おつしやつてはこまります。どうぞ私を助けると思しめして、術をお見せ下さい。」と云ひますと、

「ヨシ、仕方がない、出てやらう。」と仙人の聲に慾兵衛は大喜びで、見物に向ひ、
「イヨ、カラ、仙人、不思議の術のはじまり。」と云ひました。

スルト瓢箪の口から、フーツと白い煙りが吹き出して、それがムクムクと雲のやうになりますと、不思議、その雲の中から、繪にあるとほりの仙人の小さい姿が現はれました。
見物は、はじめて見た仙人の姿に驚いて、手を拍つどころか、聲を出す者もありませんでした。
仙人の身体は、だんぐと宙に浮いて、雲と一緒に見物の頭の上を飛び廻りますので、見物はこの時にやうやく氣のついたやうに、一せいに手を拍つてフーツと聲を上げました。
仙人は、大勢の見物の頭の上を飛び廻りながら、その美しい見物に見惚れ、瓢箪の中へ歸るのも忘れ、夢中になつてゐる中、どうしたはづみか、雲か

ら足を踏みはずして、見物の中へストンと、落ちました。
見物は驚いて、フーツと聲を上げて總立ちになりました。



ました。

慾兵衛は驚いて、驅けつけて見ると、仙人は元の大きな姿になつて氣を失つてゐました。

(をばり)



舜天丸王子

三島 霜川

寺内 萬治 郎 晝



一、「阿公」の腹の底

鶴、龜の二少年が、馬を飛ばして、館へ引返した時……ア、その表門にはもう、利勇の討手の一手が、ヒシ／＼と押寄せてゐました——それは、利勇が、討手を二ツに分けて、一ツは本道から、一ツは間道から廻らせたのでした。

「しまった！」

と、兄弟は、ハツとしながらも、馬に一と鞭、くられて、討手を蹴散らして、館へ入らうとしました。と、その行手へ、ひよろ／＼と現はれて来た妖婆の阿公。むざん、馬の蹄に蹴飛ばされるかと思ふとそれが、落ちつきはらつて、變な手つきで、十字を切るやうな真似をしました。そして、不思議に、馬が、ピタリと止まつて了ひました。

「息子たちよ、慌てゝは可けない。今、表門へ飛込むで行つて、どうするのだ。裏門へ廻んなさい。裏門へ。そして、はやく、母御を助出して上げなさい。ぐづ／＼してゐると、母子三人とも、捕へられて了ふよ」

と、かう、阿公は早口に云ひました——それが、真んとの親切か何んだか解りませんけれども……さう云はれて兄弟は、それと気がつきました。で、ぐに道を外れて、裏門の方へ廻つて行きました。

阿公は、薄氣味悪く、ニタ／＼、笑ひました。そして、一度、デロリと、毛鼎國の館の方を見て、それから、何處へとなく、フラ／＼、フラ／＼と歩いて行きました。

兄弟は、裏門の方へ、馬を飛ばして來ますと、そこで、査國吉といふ、毛鼎國の甥に當る廷臣に、でつくわしました。

査國吉は、髪も、バラ／＼に、眼を血走らせて、「大騒動が、起つたといふに、あんた等は、どこへ行つてゐたのだ」

と、兄弟を叱るやうに、聲をかけました。

「わし等は、宮殿へ行かうとしたところなんです。お父上が、悪人等に、お殺されなさると聞いたので」「オ、あんた等は、もう、それを聞いたのか。伯父様はもう、殺されて了ひになつたぞ」

「ア、もう、殺されて了ひになつたか……」兄弟は、ぐわんと、頭を、撲しつけられたやうに

感じました。そして、もう少しで、馬から轉がり落ちさうになりました。
 「敵は、利勇と囃雲だ……あれ、利勇の討手が、もう、表門へ、押しかけてゐる。わしは、伯母様だけでも、お助けしようと思つて、今、轎の用意



をしてゐるところだ。もう、ぐづ／＼して居れん。わしは、討手を防ぐから、あんた等は、伯母様と一緒に、こゝを落ちるが可い」
 查國吉は、勇氣、りん／＼として云ひました。兄弟には、それが、この場合、百人の味方を得たよりも、心強く思はれました。

「だが、舜天丸様は、どうして行く……」
 と、これも、心配でした。兄弟には、父を救ひに行つてくれた舜天丸を、そのまゝにして行つて了ふことは、大へん悪いことのやうに考へられました。で、少し、ぐづ／＼してゐますと、そこへ、母の新垣が轎に乗つて、四人の家來に、かつがれて、出て來ました。家來たちは、ブル／＼して、皆な眞ッ青になつてゐました。
 「では、氣をつけて行くが可いぞ……伯母様は、たゞのお體では無いのだからな」
 查國吉は、さう云つたかと思ふと、勢、好く裏門

へ入つて行きました。とたんに、表門の方で、恰も大浪の崩れるやうな、関の聲が、どつと起がりまし



た。それは、利勇の討手が、表門を破つて、入つたのでした。

鶴と龜とは、母、新垣の轎の左右を護つて、東の方に向つて、拾町ほども落ちて行きました。振向いて見ると、館の方に當つて、もう／＼と、煙が上がり出しました。

「ア、館へ火を放られたか」
 兄弟の頬には、何んとも云へぬ悲しい涙が、冷たく、流れて來ました。

「うのれ、利勇め……」
 と、思ふと、鶴は、口惜しさが胸一杯になつて、構らなくなりました。
 「わしは、これから、引返して、舜天丸様の安否を見届けて來ようと思ふが、お前、どう思ふ」
 と、鶴は、まづ、龜に向つて、相談をかけて見ました。

「それは、さうしなければ、わたし等は、恩知らずになりませすよ。いくら英雄でも、馴れない土地ですから、けんのもんですネ」

と、龜は、かしい返事をして、「でも、兄様が、引返して行くのも、けんのもんですネ。四方八方敵のなかですから……」

と、それが、心配でならないやうに云ひました。

「それは、行かなければ可けません。義のためには命を棄てるやうなことがあつても、仕方がありません」

と、輻のなかへ、やさしい、しかし、凜とした聲が、ひびきました。兄弟の母、新垣の聲でした。

「ア、阿母様。参ッても、宜しうございますか」と、鶴は、吻つとした心もちで、大そう、悦びました。

「だが、そのまゝ行ッては、すぐに、敵に見つかつて了ひます。姿を變えて行かなければ可けません。」

お前の衣を、家來にやッて、家來の衣を借りて、着て行くがよい」

と、母の新垣は、さういふ注意をしました。

新垣は、この時、身重になつてゐて、そのお産がもう近づいてゐる體でした。しかし、氣が、しつかりしてゐました。

鶴は、母の指圖に従つて、姿を變えました。そして、新垣と龜とは、一とまづ、東海岸の大里の方へ落ちて行くことにして、鶴は、馬も乗棄て、一人首里の方へ引返しました。母と、兄弟とは、さうして、西と東とへ別れました。

妖婆の阿公は、新垣等が、館を落ちる時から、その後をつけました。そして、物蔭に隠れて、鶴が姿を變えたことやなど、すツかり、その様子を見届けて了ひました。

鶴の影も、輻の影も、遠くの方へ見えなくなつて了つた頃、阿公は、ひよろ／＼、往來へ出て來ました。

た。そして、ふとこ
ろから小さな金の
鈴を出して、そ
れを振りまし
た——チ、
リ、リン、
リンと、鈴
が、清い清い
音を立て、鳴
りました。
と、そこへ、ま
るで、河童の化物の
やうな、ちんちくりの
小僧が、飛出して來まし
た。頭と眼玉とが馬鹿に大



きい、そして、蛙のやうに、腹が膨れて、足の細い奴が……

「これ〜、河公、お前、これから、王様の御殿へお使に行くのだぞ。大急で」

と、阿公は、孫にでも、物を云ひつけるやうに、やさしく云ひました。

「王様の御殿か。そいつア、大へんだナ。おいらに行かれるかしら」

「行かれるよ。ナニ、わけはないぢやないか。あの龍潭のお池を、もぐって渡つてさ、崖を這上がって飛込むで行けば、何んでもないぢやないか」

「ム。そりや、わけはない。そいで、たゞ、飛込むで來れア、可いのかえ」

と、河公は、どこまでも、のんきに、ぞんざいな口をさしました。

「いや〜、そして、中婦君に目にかゝるのだ」
「うん、あの、美しい、お后様か」

と、阿公は、眼を少し、三角にしました。

「ア、子とろ〜の鬼になるのか」

「なにッ、わしが鬼になる……こいつめ、よけいなことを云ふと、承知しないぞ」

阿公の眼は、ギロリと光つて、その大きな口が、耳のところまでも裂けてゐるやうでした。

でも、河公は、相變らず、ひょうきんでした。

「可いよ〜、大丈夫だよ。お后様には、よけいなことを云ふもんか。デワ、行つて來るよ」

と、云つて、氣輕に出かけようとした。

「まだある、まだある」

と、阿公は、河公を呼止めました。そして、

「わたしは、どこまでも、お后様に、忠義を盡して居ますけれども、あの、嘘雲は、恐ろしい悪人ですッて。可いかな、忘れるンぢやないぞ。いづれ、お目にかゝつて、よく話し致しますが、王女がお失しになつた珠も、その實、あいつが盗むで持つてゐ

「さうだ〜、美しいお后様だ。そこで、お目にかつたら、かう申上げるのだ」

「ア、お后様と、おいらとが、お話をするのかへ」
「さうだ〜。わしの代りにナ」

「婆様の代りか」

と、河公は、がっかりしたやうに云ひました。

「行つて見ろ〜。わしの使だと云へば、中婦君はきつと大切にして下さるワ。デ、な。かう云ふのだ……今日から七日のうちに、わしが、きつと〜、お世嗣の御子を、お后様へ、お授け致しますとな。

もつとも、それが、王子だか、王女だか解りませんけれども、とにかく、御子は、お授け致しますとな。可いかな〜、間違へるンぢやないぞ」

「大丈夫。間違へはしないけれども、お前、その赤ん坊は、どこにゐるんだ」

「どこにゐたつて、お前が、そんな心配をしなくつても可い」

るンですつて。さうしてナ、行々は、この國を奪つて、國王にならうと企むでゐるンですつて。だからラツかり、あいつを御信用なさると、大へんなことになりすす……と、かう、わしが云つてゐたと、よくお話し申上げるのだ。可いか、間違へるンぢやないぞ。」

「うん、うん」と、河公は、やはり、氣輕にうなづいて、「何んでも、かまはない。嘘雲のことを悪く云ひさへすれば可いんだらう。あいつは、魔法使の大盗だと……いや〜、嘘雲と嘘嘩か」

「嘘嘩よ。わしは、どうしても、あの、高まんちきな鼻柱を挫いてやる」

「デモ、あいつは、おッ怖ないぞ」

「何アに、幻術では負けても、こつちは命がけだ」
阿公は、何か「自信」があるやうに、キツパリと云ひました。河公は首里の方に向つて、ちよこ〜、駆出しました。其足の疾さがまたすてきでした。(續く)



髻の長さ

三千尺

廣瀬龍太郎

ハリイ・テアカー畫

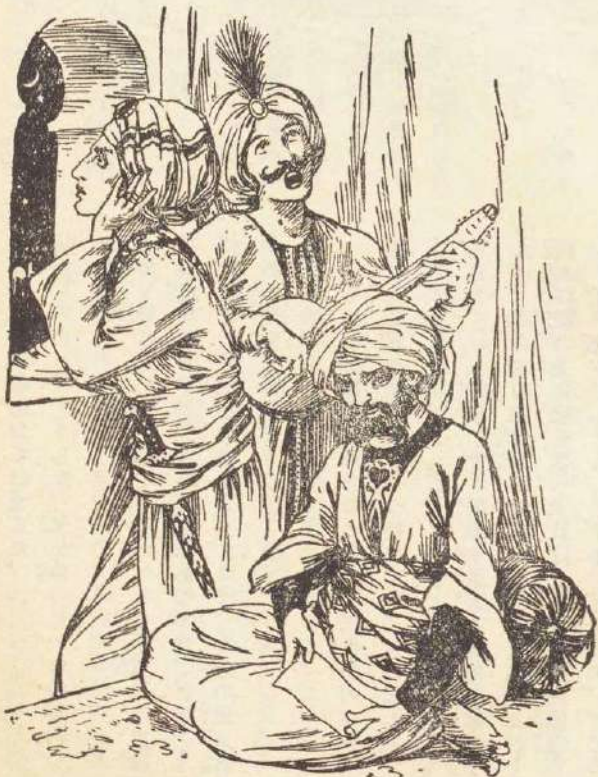
「ひかし印度に、一人の王様がありました。王様は三人の息子を持つていらつしやいました。一番上をホーセンと云ひ、二番目はアリ、三番目はエイムと云つて、どれもこれも、みんな懶巧な王子達でした。王様の所には又、ヌロニハルと云ふ王女がゐまし

た。この王女は、遠い親類にあたる者の娘でしたが小さい時からこの城で育てられたのでした。三人の王子達は、大きくなると、みんなこのヌロニハル王女が好きになりました。なぜと云つて、王女は、世界に比べるものがないほど、美しかったからです。「王女を私のお嫁さんにして下さい。」「いや、王女を是非とも私に……」

三人ともこんな事を云ひますので、お父さんも困つてしまひました。で、ある日の事、三人の王子達を膝許に呼んで云ひました。

「お前達に旅費をあげるから、これから世界の方々を見物してあいで。そして、この世界の中で一番不思議な物をお土産として持つてくるのだ。私はそれを比べて、中でも一番不思議な物を持つてきた者に、王女をやる」としよう。」

そこで三人の王子達は、自分こそ一番不思議な物を探しあててやらうと、めい／＼馬に乗つて出發しました。暫くゆくと、道が三岐に分れた所に出ました。そこで、一番



上の王子が云ひました。「おい、みんな揃つて行つたつてつまらないから、

此處で別れようぢやないか。そして、今から一年後

に、又此處で會ふ事にしようよ。」

あとの二人もそれに賛成して、めい／＼自分の好きな方へ馬を進ませて行きました。

一番上の王子のホーセンは、暫く行く内に、ピンヤンガルと云ふ大きな町へ着きました。王子はその町で或る商人から、一枚の不思議な風呂敷を買入れました。それは實に不思議な風呂敷で、だれでもその上へ坐つて、『どこ／＼へゆきたい!』と、たつた一こと云ひさへすれば、風呂敷は忽ち空中へ舞ひ上つて、自分の注文通りの所へ連れて行つてくれると云ふのでした。

「これこそ世界一の不思議な物に違ひない。」

王子はかう思つて、ホク／＼喜んで、歸つて参りました。

三岐の所まで来て見ると、そこには丁度二番目の王子のアリが、手になんだか象牙の筒を持つて、ニ

ヨ／＼しながら立つてゐました。

「お、アリか。どうした、何か珍らしいものがあつたか?」

「え、見さん、まア見て下さい。こりや實に不思議な眼鏡なんです。これを眼にあてゝね、どこ／＼が見たいつて一こと云ひさへすれば、自分の思ふ通りの所が見えるんですよ。」

「ほ、う、それは面白いものだね。」

二人がこんな話をしてゐる所へ、三番目のエイムは、手に眞赤な林檎を一つ持つてやつてゐました。

「やア見さん達、もう来ていらつしやつたんですか。ちようどいゝ所だ、まア僕の不思議な寶物を見て下さい。これはね「春風の林檎」と云つてね、これを病人の額の上に乗せさへすれば、どんな重い病氣だつて直ぐ癒つてしまふんですよ、どうです、すてさぢやありませんか。」

「なるほどな、面白いものを手に入れたね。」



二人の兄さんは、かう云つて感心しました。

その時、エイムがふと氣がついたやうに、アリの方へ向いて、

「時に見さん、貴方は何を持つてゐらしたのです」と、訊ねました。

「僕はこの眼鏡さ、まア、覗いてみるよ。お前の好きな所が見えるよ。」

「へえ、僕の好きな所が……」

エイムは眼鏡を受けとつて、

「さア何處にしようかしら?……あつさうだ。エロニハル王女を覗いてやらう。王女が今何をしてゐるか、ちよつと見てやらう。」

と、云つて、眼鏡をお父さんのお城の方へ向けました。

と、突然エイムは、驚いたやうな叫び聲をあげました。

「や、こいつはいけないぞ! うーむ、うーむ……!」

エイムが呻りだしたので、兄さん達も驚いて訊ねました。

「どっした、く。」

「どうしたつて、大變だよ、王女が病氣なんだよ、あゝもう息を引取りかけてゐる！」

「えッ、ほんたうか、それは！」

二人の兄さんは、奪ひあひで眼鏡をのぞいて見ました。なるほどヌロニハル王女は、よほどの大病と見えて、骨と皮ばかりに瘠おとろへて、苦しうに息づいてゐます。廻りにはお父様やお附きの者達が青い顔をして集まつてゐます。もう五分もたてば、王女は、最期の息を引きとつてしまふでせう。

「あゝ、かういふ時こそ僕の林檎だ！だが、こんな遠い所にゐては、とても間にあはない！」

エイムは地團駄をふんで口惜しがりました。その時、一番兄さんのホーセンが云ひました。

「その事なら心配いらぬよ。さア、僕と一緒にこ

の風呂敷に乗りたまへ。王女の所まで、目ばたき一つの間に行つてしまふよ。」

三人は風呂敷に乗りました。

「ヌロニハル王女の枕許へ！」

ホーセンの言葉が終るか終らぬかに、魔法の風呂敷はさつと空に舞ひあがつて、ほんとに目瞬き一つする間に、ヌロニハル王女の所まで飛んで来てしまひました。

三人の王子がいきなり窓から飛びこんで来たので王女の枕許にゐた人達はみんなびつくりしました。エイム王子は、人々には挨拶もせず、つか／＼と王女の所へ進んで行つて、額の上に「春風の林檎」を載せました。

たちまち王女の蒼ざめた頬に、ばつと血の氣が差しました。色のあせた唇は、ふたゝび生々と輝やいて來ました。王女はやがてパツチリと眼をあけてふしぎさうに四邊を見廻しました。

言ひました。

「ちよつと待つて下さい。僕の風呂敷だつて大へん役に立つたのですよ。これが無かつたら、とても間

にあはなかつたんですからね。」すると、二番目のアリも口を出して、

「兄さんや弟たち、まア考へてから言をいふがいい、僕の眼鏡がなかつたら、そも／＼王女が病氣だといふ事が分らなかつたぢやないか。」それを聞いてゐた王様は、なにがなんだか、分らなくなつてしまひました。

三人の王子達は、めい／＼口を尖らして自分の寶物こそ世界一の不思議な物だと云ひ張りました。つまり世界一が、三ッ出來たわけでした。

人々はどんなに驚いたことせう。

王様は、しつかりとエイムを抱いて、

「おゝエイム。お前は世界で一番不思議なものを持



つて來た。王女はお前のものだ！」

と、叫びました。

すると其處へ、一番兄さんのホーセンが進み出て

「まあいい、いい。お前達の話で、お前達の持つて来た物は、どれもこれも甲乙が無いといふ事が分つた。そこで、これは勝負なしぢや。俺はもう一つ、別な問題を出すことにしよう……」

王様はかう云つて、暫く考へてゐましたが、やがて、

「さうだ、弓くらべをしよう。お前達はめい／＼野原へ出て、ありつたけの力で弓を射るのだ。さうして一番遠くまで矢を飛ばせたものに、王女をやる事にしよう。」

三人の王子達は喜んで、めい／＼弓を持つて野原に出ました。王様をはじめ、おつきの者達はづらりと並んで、結果を見とどける事になりました。

まづ最初に、一番兄さんのホーセンが弓を射ました。矢は羽音高く空を掠めて、はるか彼方の地平線のあたりへ落ちました。次に、二番目のアリが射ました。アリの矢は、兄さんの矢よりも、三尺向ふへ

は出来ませんでした。

アリの嬉しさうな顔にくらべて、今にも泣きだしさうな顔をしたのは、ホーセンとエイムでした。

ホーセンはその日から、一言も口をきかなくなつてしまひました。そして、王子の位を棄て、山へ這入つて坊さんになつてしまひました。

エイムも、兄さんに劣らないほどがっかりしました。併しエイムは、坊さんにはなりませんでした。中々負けざらひな性でしたから、一つ、矢を探してやらうと決心したのです。

二

エイムはたゞ一人馬に乗つて旅に出ました。野を越え山を越え、幾日かの旅を續けた後に、ある峻しい山の麓に出ました。道もなんにもない所を、荆をかきわけながら登つてゆきますと、やがて行方に大きな岩が現はれて、それ以上進めなくなりました。

落ちました。次はエイムの番です。エイムは、きりきりと引きしぼつて兵と放ちました。矢は、ゆるやかな弧をえがいて空を飛びました。が、忽ちその姿が見えなくなつてしまひました。

そこにゐた人達は、みんな矢の落ちた所を見るために駆け出しました。しかし、矢の姿は何處にも見當りませんでした。草の根を分け、森の茂みをかきわけても、遂にエイムの矢をみつける事は出来ませんでした。

その翌る日一日、二萬人の兵隊が矢の行衛を探しました。が、やはり矢の行衛は分りませんでした。

王様は、三人の王子を呼んで云ひました。

「もうこれは何時まで探したところが、分る筈がない。こゝらで勝負をきめよう。二番目の王子アリ、お前にヌロニハル王女を與へる。明日、この城で結婚式をあげるのだ。」

王様のお言葉は法律でした。誰れもこれを拒む事

エイムは、その岩の下に立つて見上げてゐましたが、突然喜びの聲をあげました。永い間探し求めてゐた自分の矢が、岩の真中あたりに深く突きささつてゐたのです。

「ずのぶん遠くまで飛んで来たものだな。」

エイムは獨り言を云ひながら、どうして岩を昇らうかと思廻してゐますと、丁度岩の根元あたりに、鐵の扉があるのを見つけ出しました。

「はてな、誰れかの住居かしら？」

かう思つて押して見ると、ギーと左右に開きます。その中は暗いトンネルになつて、ずつと向ふまで續いてゐる様子でした。

エイムの心は、矢よりもその不思議な洞穴のことで一杯になりました。エイムは手さぐりで、ぐんぐん中へ這入つてゆきました。一丁ほど来たかと思はれる頃、突然あたりがぱつと明るくなつて、ひろい／＼廣場に出ました。廣場の真中には、大理石と

黒耀石で作つた、すばらしく立派な御殿が建つてゐます。エイムは暫くの間ぼんやりして、この有様に見とれてゐました。

その時、御殿の正面の扉がさつと開かれて、中からそれは／＼美しい王女が、多勢の侍女達をつれて現はれました。それこそこの世の人とは思はれないほどの美しさで、桃色と白の着物をまとい、頭の先から鞆の先まで寶石でかざりつけて、まつたく眼のさめるほどのあでやかさでした。

エイムはあつけにとられて見てゐますと、王女はしづ／＼とエイムの傍に歩みよつて、

『よくいらつしやいました。先程からお待ちしてゐたのです。さあどうぞ此方へ……』

と云つて、エイムの手を取つて、御殿の中へ案内しました。

王女の居間の立派さは、筆にも口にも盡しやうがありませんでした。

は御存知ないでせうか、私はその頃から貴方の事をよく存じてをりました。私は何時も貴方の傍にゐて貴方が物を云つたり、したりする事にちいつと氣をつけてをりました。そして貴方こそ私の夫として、最もふさはしい方だと思ひましたので、今日かうしてお呼びしたのでございます。あの弓比べの時、私も直ぐ傍で拜見してをりまして、貴方がお放しになつた矢をつかんで、この國まで持つて來たのでございます。』

エイムはそれを聞いて、驚いて眼を丸くしてゐました。

『それで、貴方は私をどうしようとなさるのです。』
『私の夫になつて、この地の底の國を治めて戴きたるのです。』

王女はかう云つて、エイムの手を取りました。エイムの心は喜びに躍りました。エイムは王女の足許に跪づいて叫びました。

王女は、エイムを自分の傍に坐らせて、あらためて挨拶をしました。

『貴方は、私がどんな者か、不思議に思ひになつていらつしやるやうに御見受けします。お疑になつるのもごもつともです。これからその譚をお話しいたしませう。』

王女はかう云つて、エイムの杯に匂ひの高い酒をつぎながら、

『貴方はお經の中に、「この世にはあたりまへの人間の他に、多くの妖精たちがゐる」と云ふ文句を御覽になりましたでせう。實際、この地の下には、多くの魔者や妖女たちが棲んでをります。私は、地の下の王の一人娘で、名をバヌーと申す者です。この妖精の國の掟では、女が年頃になると、地の上の世界から一人の男を選んで來て、自分の夫と定めるのです。私は二年ほど前から、自分の夫にふさはしいやうな方を、あれやこれやと考へて參りました。貴方

『お、王女よ、私はなんとかして、貴方の望み通りの人間になりたいと思ひます！』

三

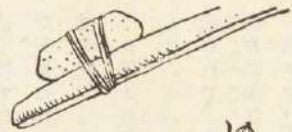
かうして、この結婚はめでたく成り立ちました。地の底の國では、結婚の儀式などといふ面倒なことはありませんでした。又、妖女にとつては、人間の心の奥の奥まで分つてゐました。ですから、別にエイムの口から、「私は貴方を愛する」なんていふ言葉を聞く必要がなかつたのです。

直ぐに賑やかな宴會が始まりました。美しい侍女達は、胡蝶のやうに羅を纏がへして舞ひました。エイムは、たゞもう夢を見る心地でした。「夢ならば何時までも醒めぬやうに……」エイムは心の中で祈りました。

(つづく)

ほくの生れた家

三木露風



ほくの生れた家の裏
白い杏の花が咲く
塀には柳が垂れてゐる
けふはのどかな春の日よ
そよ／＼吹いた春風に
白い杏の花が散る



垂れた柳をくゞり飛ぶ
かるい燕の早い羽根

竹のかこゝろの中にある

鶏十羽餌をひろふ

ことし二つの妹は

乳母に負はれてとりを見る

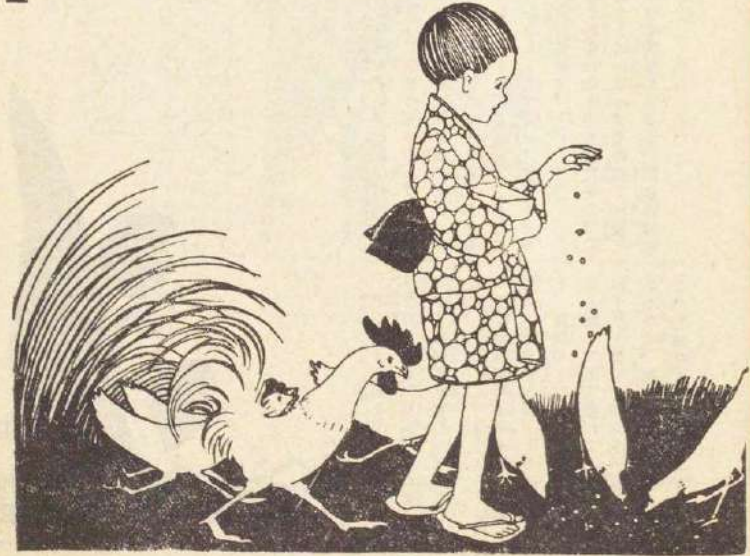
かあい、うちの鶏よ

山の狐が晩に来て

おまへをとらうとするときに

ほくは木を持ち追ふてやる

岩岡とも枝畫



世界童話欄



赤いお符 (支那)

むかし、支那の杭州といふところに王といふ人がおりました。ある日、朝早く起きて近所の河端へ、お魚を買に行きました。丁度魚釣りの男がゐるので、

「この魚ですか。これは折角私がお買つて来たのだから上げられませんか。第一あなたは道士だといふのに、何故なまぐさい魚なんか食べるのですか。」と問返しました。「ふん……」道士は嘲けるやうに鼻で笑つて、「くれないのか。くれないならば、はうとはいはぬ。その代りに後になつて後悔したつて、間に合はぬぞ。」

王は別段氣にもめないで家へ歸つて來ましたが、その晩になると、屋根の瓦がひとりでにばんばん落ちて來て壞れてしまひました。そうして、それが一晩ちう續いたので、朝になつて見たときには、屋根の瓦は一枚もなくなくなつてしまひました。

「そんな事は何でもなし。私のところのお符を持つて行つて、壁にはお符を貼つておけば大丈夫だ。しかし、お符にも高いのと安いのとあつて高い方を持つてゆけばその場へ神様が現はれて魔物を取押へてくれるが、安い方のだと、たい魔物が出てゆくだけだ。」と、仙術師がいひました。

しかし、王は魔物が出て行つてくれさへすればいい、なまじ取押へてもらつたりすると却つて厄介だと思ひましたから、二十圓だして安い方の黄色いお符を買ひました。そしてそれを、自分の家の壁のよく目につくところへ貼つて置きました。

さて、その後二晩の間は、お符のきよめがあつて何事もなく済みました。が、三日目の朝になると、どうした譯か、黄色いお符がバサリと割れて落ちて來ました。そして、それなり何處へか見えなくなつてしまひました。

「おや、何處へ行つたのだらう。」と、つぶやきながら、王は一生懸命になつて探しましたが、到々見當りませんでした。

それから一月ほどたつてのことでしたが、王の長男がどうしたわけか、急に親のいふ事を少しもきかなくなりました。王はある日大變に怒つて、太い杖で息子を打たうとし、した。

息子はあはて、家を斷出して、外へ行きましたが、それつきり家へは戻つてきません。

三日たつても戻つてこないのに、母親は心配して、「きつと、短氣を起して身でも投げて死んでしまつたのだらう。」と言つて、おいしく泣いてゐました。王も大變心配して息子を探しに出かけました。山の方へ行つてみたり、町の方へ行つたりして



「王さん、昨夜お前さんの家の屋根に小ぢやな鬼が五匹ゐて、瓦をはがしてゐたよ。」と、隣の人が教へてくれました。

王は驚いて、それはつぎり、あの人の悪い道士のいたづらに違ひないと考へました。そこで、近くに住んでゐる仙術師(魔法使のやうな人)のところへ相談に行きました。



すると、その晩からまた小さな鬼が五匹出て來て、王の家の門を壊したり、樹を倒したり、納屋をつぶしたりしました。王は困り切つて、今度は仕方なく五十圓出して、高い方の赤いお符を買つて來て、それをまた壁のところへ貼りました。

終日、探して歩きましたが、どうして見当たらないので、がっかりして土手傳ひにとぼけと歸つて来ました。すると、河のふちに一人の少年があるではありませんか。その姿が息子にそっくりなので、王はあわてゝ飛んで行きました。それは矢張り息子でした。王は夢中で後から抱きかゝりました。息子はしくしく泣いてゐて動かない。まるで、大人二人分の重さだ。と、叫びました。奥昇はうん／＼いつて嬉しかったです。息子は不思議にも、大人の二倍もの重さになつてゐるのでした。やうやくのことに、王は息子を家へつれて来たので、そうツと寝



たからです。ところが、息子は家へ入つた時から、急に舌がづれて喉のやうに物をいふことが出来なくなつてしまひました。そして、兩眼は赤いお符の方をちつと見つめたまゝになつておます。『あゝ、あゝ、誰か僕を裁判しに来るのですよ。あゝ、怖い怖い。僕はもう、出て行かなければならぬ。』

臺に寝せました。三日三晩の間、何にも食べずに歩き廻つてゐたので、さぞ衰弱してゐるだらうと思つ

息子は急にこんな事をいつて、ぶる／＼顔へだしました。『おれ、何をしてゐるのだよ。何處へ出て行くといふのだ。お前は自分の家へ歸つて来たのぢやないか。氣をしつかりなさい。』王はかういつて、息子の背中をポン／＼たゞきました。すると、その時、息子がむく／＼と寢臺から起上りました。そして、夢でも見てゐる様子で、ふら／＼と赤いお符の貼つてある壁のところまで歩いて行きましたが、そこにベタリと坐つて、お辭儀をしてゐます。息子の後を追つて行つた王は、その時何を見たのでせうか。壁の前にぼろ／＼と白い煙が立つたと思つた。そこへ一人の神様が現はれました。金色の袂をした神様で、二つの目をガラス玉のやうに光らせて、赤い裾を垂らしてゐました。神様の前には五匹の小鬼

が同じやうに頭を床にすりつけてお辭儀をしてゐます。赤髯の神様は五匹の小鬼に向つて、『これ、お前等はどうか考へ違ひして王の息子にとりついたので。息子の命はまだつきる時ではないではないか。お前等は私の命令に従ふべきだ。不届な奴等だ。見せしめの爲めにかうしてやる。』赤髯の神様は、殿かな聲でかう嗚りました。それから手に握つてゐた太い桶の棒をふりあげてビシ／＼と五匹の小鬼を順々に三十づつ打ちました。小鬼どもはひい／＼いつて喚びました。それが終ると、赤髯の神様はこんどは穿いてゐた鐵の靴で、うんと力一ぱい小鬼どものお尻を蹴りました。五匹の鬼は氣を失つて、ばた／＼其處へ倒れました。



と思ふと、また漆々と白い煙が立ちましたが、それが消えた時には赤髯の神様も、五匹の鬼もかき消すやうになつて、息子がたつた一人そこへ倒れて氣絶してゐました。王はあわてゝ息子を介抱しました。息子は初めて夢から覺めたやうに立上りましたが、その時は元のやうな正氣になつてゐました。『あゝ、有難い／＼。』王は妙しくて堪らないで叫びました。と、その時はさりと音がし

牛 千 疋 (セルビヤ)

たので見ると、壁にはつてあつた赤いお符が、割れて落ちたのでした。お符の效目もそれで終つたと見えます。ある町に大金持ちの商人がゐました。お天氣のいい夏のはじめの頃でした。商人は町を出て、街道をのこ／＼と隣町の方まで行きました。すると途中で、同じ途を行く一人の見なれないお百姓にあひま



ふまでは、この道が遠くて、實にくさ／＼してゐたんだよ。だが途づれが出来てよかつた。急に途が近くなつたやうな氣がする。』

に元氣になつて、『一つ、あいつを掴んで、金もろけをしてやらう。』と思ひながら商人は足早にお百姓の傍まで行きました。商人とお百姓は、お互ひに挨拶をしました。そして、すぐ道づれになりました。『お百姓さん、私はお前さんにあ

と、商人がいひました。『それはどうも恐れ入ります。』とお百姓もいひました。『しかし、かうして道づれにはなりません。あんなやうな町の方は、百姓の話すことはどうせ嘘でもない事だから面白くありません。』『そういへば、まあそうだが、しかし、私にいふ考へがあるんだ。』商人は急に元氣になりました。『お互ひにありふれた話をしたところ、面白くないから、どうだね、二人の頭で考へられるだけの大法螺を吹き合つて歩かうぢやないか。そして、相手の話を嘘だと疑つたものが、千兩拂ふことにきめようぢやないか。』お百姓は暫く考へこんでゐましたが、やがて承知しました。そして、商人に、『どうぞ、是非あなたから始めて下さい。』と頼みました。お百姓はその時

「かう思ひました。」
 「商人がどんな大法師を吹いても決して、それが嘘だといふやうな様子をしまし。」と、そう決心しました。
 「そこで、商人が先づはじめました。」



「ある日の事、私はこの道をとんと行つたのだ。すると、途中に牛を澤山々々ひいて来る牛間に遇つた。」
 「成程——私もいつかそんなのを

見ましたよ。」
 「と、お百姓も、ひきました。」
 「それがね、お前さん、五疋十疋ぢやないんだよ、みんなで、千疋もたんだ。しかも、一疋一疋と、鼻づらへ通した手綱を前の牛の後ろへつないであるんだ。だから、三里の間といふもの、ずらりと帯のやうに牛の行列——」
 「成程ッ。」と、お百姓がまたひきました。

「するとだ。一羽の鷲が、ナイツと空から飛び降りて来て、眞先きの牛をひつさらふが早いか、逃げて行つてしまつたのだ。ところが牛はどれもこれも一つ一つないであるので、千疋の牛が残りず皆な持つて行かれてしまつたのだ。」
 「すばらしいもんでした。素敵な力ですなア。……しかし、成程、成程……いやその通りでせうとも、牛は千疋でしたな、……フン成程、それから牛はどうなりまし



「へ、どういたしまして、——」
 「お百姓は落附いていひました。」
 「よるし。それぢや、その先きを話すとしよう。これからは大變なのだ。——丁度そのとき、隣國のお姫様がお庭へ出て、侍女に愛をとかさして、おゐりになつたのだ。その時お姫様は何氣なく、空

を見上げたさつた。と、丁度そこを、鷲が獲物をひつ掴んで行くぢやないか。お姫様は、あつげにとられて、眺めてゐたよ。……その時だ。今までは、ちつとしてゐた牛が、俄かに暴れだしたのだ。洗石の鷲も、千疋の牛に暴れられち干敵はないや。ひつ掴んでゐた牛を離してしまつたから、さア大事だ。千疋の牛が、ど、ど、どつと、一度に舞ひ落ちて来て、まつしぐらにお姫様の左の眼の中に入つてしまつたのだ。」

「お氣の毒ですなア。さぞ痛かつたらうな。眼の中へ何が入つても堪りませぬからなア。」
 「お百姓が同情するやうに言ひました。」
 「さうだともね。商人はこゝどとばかり、夢中になつて話して」
 「お姫様はツイと立上つたよ。手で眼を押へながらね。まア、何か

眼に入つたやうだ。なんて痛いでせう」つて、お姫様がおつしやつた。」
 「おりやア、さうですとも、それに違ひないで、それから先きはどうかりましたね。」
 「お姫様の聲を聞きつけて、侍女が傍へとんで来たよ。私にお見せ遊せ、といつて、侍女が袖がつてゐるお姫様の眼蓋を一寸開かせたよ。するとね、どうだい。牛が一疋飛び出して来たぢやないか。侍女は直ぐ様、ひつかんで、袂の中へ入れてしまつた——」
 「この時、お百姓が遠慮そうに「ア、ア、」といひました。しかし、商人はやつきになつて話してやめます。」
 「それから侍女は、一疋々々と千疋の牛をのこす掴みだして、袂の中へ入れてしまつたよ。」
 「こゝまで話して来た時、商人は息切れがしたといふやうに、ハアハアいひだしました。しかし、お

百姓の方は平氣で、商人の方を見ながら、また、
 「成程なア。」と、いひました。
 「あ、もう、これ以上は私の頭から出ない。もうこれで、話はお仕舞ひだ。お前さん、この話をどう思ふね。」
 「不思議な話ですな。が、全く本當らしい話ですな。が、全く本當らしい話ですな。」
 「フン、それぢや仕方がない。今度はお前さんの番だ。」
 「商人はがっかりしてしまひました。お前さんの話を早く聴きたいな。さぞ、面白いに違ひないだらう。」
 「へ、私も面白いだらうと思ふんです。」
 「かう云つて、お百姓が次のやうな話をしました。」



「私の祖父といふのは素敵もね大金持でしたよ。何しろ馬を五十疋、牛を三十疋、羊を百疋も持

つてゐたんですからな。だが、親父はその中で、一疋の牝馬を一番可愛がつてゐましたよ。何しろ、その馬は實に温順で、——おまけに、えらく綺麗なやつでしたからな。」
 「フン、それから。」
 「と、商人が催促しました。
 「今、話しますよ。そうぢやいけませんよ……さて、祖父はその

出来しました。家へ歸つてきた頃には、もうその傷があんたの掌程にも大きくなつてゐたんです。」
 「フン、そして、それからどうしたね。」
 「商人は、待ち切れないやうに、また言ひました。
 「丁度、その時は六月でしたよ。ご存知でせうが、六月といふ月は濕氣を含んだ塵埃が、旋風のやうに吹いて来るんです。だから堪つたものぢやありませんや。可哀さうに、牝馬の香中の傷は塵埃で一ぱいになつてしまひましたよ。おまけに、塵埃の中には、麥の粒が混つてゐたのです。濕氣は充分だし、それ——お日様がかん／＼照りつたので、忽ち麥が芽をふいて了つたんです。」
 「面白い事になつたなア。」
 「と、商人もいひました。
 「いや、全く面白い事になつたんです。それからといふもの、牝馬

来た時、かみさんは「どうしたのか犬が見えなくなりましたよ。」と言っておきました。
「さうか、その方が仕合だ。」と百姓が言ひました。
かみさんは猫や犬を可愛がつてゐただけ大層悲しく思ひました。百姓の家を出た猫と犬は、森の中でひよつくり出合ひました。家



にゐた時は、あまり仲のいい友達ではなかつたのですが、寂しい森の中で出合つたので、急に何となく仲よくなりました。そして、木の下に休

んで、不幸な身の上をしみじまにげき合ひました。
そこへ狐が通りかゝりました。狐はしよんぼり坐つてゐる猫や犬を見ると、
「どうしてお前さんがたは、そんな所で座つてゐるのですか、一體何をブツブツ言つてこぼしてゐるのですか。」
と言つて尋ねました。
「私は若い時には、随分鼠を捕つたのです。しかし、もう老ぼれて働けなくなつたので、主人は私を川へ捨てようとしたのです。でも、私はこの森へ逃げて來ました。」
と狐が答へました。
「私も若い時には、毎晩々々、主人の家を見はりしてゐたのです。それが、こんな年をとつて耳が遠くなつたのですから、主人は私の首を絞めて殺してしまはうとしたのです。」と犬が答へました。
「世の中は、そういふものです。」

「私たちが、お前さんがたは、そんな所で座つてゐるのですか、一體何をブツブツ言つてこぼしてゐるのですか。」
と言つて尋ねました。
「私は若い時には、随分鼠を捕つたのです。しかし、もう老ぼれて働けなくなつたので、主人は私を川へ捨てようとしたのです。でも、私はこの森へ逃げて來ました。」
と狐が答へました。
「私も若い時には、毎晩々々、主人の家を見はりしてゐたのです。それが、こんな年をとつて耳が遠くなつたのですから、主人は私の首を絞めて殺してしまはうとしたのです。」と犬が答へました。
「世の中は、そういふものです。」

しかし、私が主人の家へ歸れるやうにしてあげませう。そのかはりまづ私の難儀を助けてくれませんか。」と、狐が言ひました。
「どんなことかは知りませんが、



私たちが力のおよぶかぎりお助けしませう。」と、猫と犬とは口をそろへて言ひました。狐は言葉をつづけて、
「私の難儀といふのはかうです。今日森を歩いてゐたら、狐にあつたのです。すると、狐は急に私に鞭をしようと云ひ出しました。

そして早速猫や猪をつれて、今私の方へやつて來るので。」と言ひました。
「承知しました。わたしはあなたの方になつて、職ひませう。たとへんだつて、家の中で殺されるよりよつぽどいゝから。」と、猫と犬が口をそろへて言ひました。

狐は猫や猪をつれて、約束の場所へ着きました。そして、狐どもの來るのを待つてゐました。その間に、狐は狐どもの來るのを見ようと言つて、傍の木に昇りました。一度、あたりを見廻しましたが、なにも見えませんでした。二度、あたりを見廻しましたが、またなにも見えませんでした。三度、あたりを見廻しました。時には「見える、見える、澤山な兵隊が見える。一人は長い、槍をもつてゐるぞ。」と言つて叫びました。しかし、それは猫だつたのです。

猫が尾をピンと立ててやつて來たのでした。で、猫や猪はどつどつと笑ひました。熊はまた、



「敵がこゝへ來るまでには、よつぽど時間がかかるから、この木の又にしやがんで、しばらく眠らう。」と言つて眠りました。熊はその木の下で横になつて休んでゐました。また、熊は葉の中へすつぽり身を隠してゐました。しかし、耳だけ葉の間から出てゐたのでした。

そのうちに、猫は猪や犬をつれてやつて來ました。猫は葉の間から耳が出てゐるので、きつと鼠がゐるのだらうと思つて、いきなり跳びかゝりました。猪はびつくりして起き上つて、ウーとうなりながら、森の方へ逃げて行きました。猫は猪がとび出たので、ぼさぼさびつくりして、急いで木の又へ登りました。こんどは木の又で眠つてゐた熊がびつくりしました。熊はあはて、木から跳び降りた。熊はそのまゝ石のやうになつて死んでしまひました。かうして、熊は狐たちの勝利になりました。
狐は歸る途で、澤山な鼠を捕りました。そして、百姓の家の前まで來ると、猫に向つて、
「これを一つ、主人の室へもつて行つて、積みあげなさい。」と言

ひました。
「猫は、狐に教へられた通りに、鼠を一つ一つ主人の室へもつていつて積みあげました。
かみさんは、それを見ると、早速百姓を呼んで、
「ごらんさい、猫が歸つて來ました。澤山な鼠を捕つて。」と言ひました。
「これは不思議だ。俺はあの猫が鼠を捕らうとは思はなかつた。」と、百姓は熊を見おろしながら言ひました。
「ですから私がいつともさう言つたのですよ。うちの猫は一番いい猫もお聞きにならなかつたのですも。」とかみさんが言ひました。
かうして猫はまた、百姓の家で大切に飼はれる事になりました。
「狐は、こんどは犬に向つて、
「あなたは、日が暮れたら、裏の

狐へ行つて出來るだけ大きい聲を出して吠えなさい。」と言ひました。
犬は教へられた通りに、日が暮れると、裏の狐へ行つて、出來るだけ大きい聲を出して、吠えました。
百姓のかみさんは、それを聞いて、
「きつとうちの犬が歸つて來たのでせう。あなた行つてごらんになりませんか。何か起つたのでせう、泥棒でも來てお手を盗るのかも知れませんよ。」と言ひました。
「あの耳の遠い犬がどうしてそんなことが分るもんか。あの犬はいつとも、でたらめに吠えてゐるのさ。」と言つて、百姓はなかに行かうとはしませんでした。
あくる朝、かみさんはお茶をしようと思つて、早く起きました。そして、序に伯母さんの家へお手をもつて行つてあげようと思つて

小屋へ行きました。ところが、小屋には昨日深山様でおいたお手が一つもありませんでした。かみさんは大層で主人を呼んで「やつぱり私の言ったことはあつて、お手を一つ残らずもつて行きました。私の呼んだ時、あなたが行つてごらんになれば、こんな



ことにならなかつたのに。」と言つて、くやしがりました。「あの犬はもう役にたかないと思つてゐたのだ。」

謎を解く王子 (長篇)

王子アルマスは、六ヶ所の謎を解くために、ココカサスの王様のとこへやつてきました。その謎といふのは、
「薔薇は赤杉をどんな目にはしたか？」といふのでした。
王子は、王様に向つて謎の意味をたづねました。すると王様はひ



「ばかな事をいつてはいけない。その謎の意味を訊く者があつたらどく怒つて、
俺は直ぐ其奴の首を斬つてしまふのだ。」
と云つて叱りつけました。
併しアルマスは、なんとかしてその謎の意味が知りたいと思つてゐました。
ある夜のこと、宮殿ではお祝ひの酒もりがひらかれました。お前人は金や銀の盃にキラキラと泡の立つ酒をつきまわり、唄ひ子は

「美しい聲をはりあげて歌を唱ひました。アルマスは王の盃で酒を飲んでゐましたが、少し酔がまわつて来ると、薔薇の端に立つて弾きはじめました。琴の糸から美しい音がわき出ると共に、アルマスの口からも別なかな唄がわき出ました。アルマスは一生懸命で、みんなが夢心地になつてしまふまで歌ひつづけました。拍手はいたるところから起りました。」

歌がすんでアルマスが王の傍に歸ると、王は自分の杯に酒をついでアルマスにすゝめながら、
「お前の歌には、まつたく感心した。なんでもお前の家み次第の褒美をやらう。」と上機嫌で言ひました。
「王様、私が一生のお願ひといふのは「薔薇は赤杉をどんな目にはしたか。」それを教へて頂きた

5. のです。」

「そりやいけない。そんなことをきくものは、生かしておけないのだ。しかし君の願ひがそれ丈だといふのなら、それはそれでいゝ。話してもあげよう。が、さうするには一つ約束がある。その話をしたらすぐに君の首をはねるが、それでもいゝかね。」
「結構です。さういふ約束で教へて頂きたい。」アルマスはきつぱりと答へました。
王はお側のものに何か言ひつけました。間もなく王の傍には、目もさめるばかりの立派な毛氈が敷かれました。やがて、掛りの者につれられて一匹の犬がやつて来ました。つないだ鎖は金づくりで、眩い寶石がちりばめてありました。掛りのものは、犬を、今敷いたばかりの毛氈の真中に坐せました。犬について来た深山の女官達は、ぐるりと犬をとりま

てひかへました。
次に一人の女が口口に罵られながら、十二人の黒ん坊にひき立てられて出て来ました。手と足にはは枷をはめられ、きたない着物をきせられてゐました。しかし、その顔は、たゞの女でないと思はせるほど、美しく輝やいてゐました。黒ん坊たちは、何も敷いてない床の上にその女をひきすへました。
犬と女とが出揃ふと、王は黒ん坊に合圖をしました。一人の黒ん坊は立ち上つて、その女の體を管でピシッ、ピシッと打ちつけました。女は打たれる度に「ヒーヒー」と悲鳴をあげて苦しみました。黒ん坊はかまはず、數へ切れない程はげしく打ちつけました。
次に王は女官達に合圖をしました。女官はかねて用意してあつた料理の覆をとつて、美味しさうな料理を次から次へと犬の前に出

してやりました。
犬がお腹一杯料理を食べてしまふと、その食べ残しを女の前に投げてやつて食べさせました。女は手に枷をはめられてゐるので、口でくわへては食べませんでした。
アルマスは、この不思議な有様を思ふつがずに眺めてゐました。が、不思議と言へば、もつと不思議なことがありました。



謎なことがありました。それは、その女が泣くと、目から眞珠の涙が出、ほろほろと唇から薔薇の花がこぼれ落ちる事でした。

二三人の黒ん坊は、それを拾つては、寶物入れの箱の中にちやんとしまつてゐました。
「さあ、見たかね。これだけのことなんだ。」
夢中になつてみてゐたアルマスは、王にかう言はれてやうやく我にかへりました。しかしこれだけでは何のことやらさつぱり解りませんので、
「又、確かに拜見はいたしました。王はうなづいて口を開きました。「實はあその物にかけた女は私の妻なんです。あれはガル、即ち薔薇といふ名前です。私はシノーバ、即ち赤杉といふ名前なのです。」

先づ、私とあの女が一しよになつたことから話すと、かう言ふ物語があるのです。」

王はかう前向きをして、さて静かに語り出しました。

「ある日のことだ。私は供もつれず一人で道に行つてみたが、喉が乾いて仕様がなくなつて来たのである。古井戸に水をのみに行つたのだ。併し汲むものがなかつたので頭の巻布をといて桶子にくみりつけ、それをつるべの代りにして井戸へ投げこんだのだ。ところが上げようとする時、いくら引つづつても動かないんだ。私は腹が立つたので、いきなり井戸の中に向つて、



「さうして、お願ひです。私達を上げて下さい。私達は長い間、この井戸に落ちてゐるので、さういふお願ひを願ひます。」

「どうぞあなたさま。この上のお事、言つて私に頼むんだ。」

願ひには、私共の目を治して下さいませ。別に六ヶしいことではないのでございます。この近くの海べに、一匹の牝牛が草をたべに海上から上つて来ますが、その葉が少しあればいゝのでございます。ですがその時、牛に見つかると大変なのでございます。牛は見つけるとすぐ、あなたを殺してしまふのでせう。どうぞこのことに氣をおつけになつて、私共の願ひを叶へて下さいませ。」

さう云つて二人とも無心に願ひものだから、私も元氣を出して言はれた海べに行つてみることにした。行つてしばらく岩壁にかくれて様子をつかひつてみると、魔女の言つた通り、大きな牝牛が海から上つて来て草を食べた。私は牛が歸つて行くのを待つて、岩かげから走り出て、落ちてゐた葉を少し取つて歸つて来たんだ。魔女はそれをつけたが、効目は立ち所に

「どうぞ私のからだに油を塗つて下さい。さうすれば焚けるのが早くして、長く苦しまないで済みます。是非さうして下さい。」といつてお頼みなさいませ。魔王様が許して下さいれば、その時私共が油を塗る役を言ひつかつて、たとへ千



たうとその氣になつて魔王の御殿に行つて、姫の部屋に忍びこん

だのだ。きれいに飾り立てた室の前中には、金でつくつた産台があつて、その上に美しい姫は雪のやうな絹ぶとんをかかけて寝てゐた。私はその産台に上つて白玉のやうな美しい産顔を見ると、思はずみとれてしまつて、しばらくの間は夢の國をさまようやうな氣持ちでうつりとたゞムズんでゐた。

すると姫は目をさまして、私が側立つてゐるのを見ると、

それからのち二三ヶ月といふものは、姫と私は、魔王連に氣づかれはしないかと心配ばかりしながら、静しいやうな恐いやうな思ひをつまけてゐたもんだ。



そのうち、さすがに魔王は、姫の様子を變なな氣がついたんだね。ある日のこと、

「ねえ姫や、この間から言はうと思つてゐるのだが、お前この頃ど

と云ひ出したんだ。そしてそれからそれへといろいろ調べ立てたものだから、今までの苦心も水の泡となつて、二人のことはすつかり知れてしまつたんだ。私は姫から引き離されて牢屋へぶちこまれたわだ。そして、

童心句

野口雨情選

秋田 岩谷みよの
○まゝごとのお客に来てよ雀さん

千葉 大谷 堅治

○見さんがしのきりに出てく冬の朝

山形 花野 白蝶

○雪とけた軒邊にみかんの皮と草

岐阜 古田 重男

富上 うちの庭でも鳴いてくれ

評、鶯「あたしいそがしくて、いそがしくて」

京都 若山 泰

人が通る、通る通るお祭り

秋田 岩谷ミヨノ

○冬木立 炭焼く煙がからんでる

秋田 岩谷 貞三

○街燈の所のみ見ゆる夜の雪 (賞)

評、言葉の使ひ方にも少し注意してほしかった。

横須賀 茶木 七郎

街角に子供あそんでからつ風

秋田 平川 忠治郎

鶏の中かすかに見える馬の顔

評、少しく大人びてゐるが面白い。

秋田 武田 喜一郎

大根の一番花が咲きました

山口 杉山 一男

糞蟲の糞からほとと響かな

長野 鷲山 夕花

ほゝづきをほしそにひよこ首かしげ

東京 小林 一路

○どの家も堤の下だ梅の里 (賞)

バカーンと本の音する圖書館だ

梅咲いた床屋の帽子曇つてた



東京 小川 遼三

猫の子に足をなめられなきました

東京 小林 一路

赤い草履が日向ぼつこをしてゐたよ

兵庫 大島 知恵子

人聲がどこかで消えた宵の町

○馬の背の粗糸にのびる眞赤い賞 (賞)

評、なか／＼面白い。

東京 菅家 梅子

泥々の路で轉んだオカッパさん

熊本 永島 慶子

搖かごの赤ちやんお空を窺いてる

東京 河津 すみ子

お日さんにないしよでて出でゐるひるの月

東京 松谷 令子

すべつてはあぶないといつてる雪だるま

評、大丈夫！ ころぶもんか

評、大丈夫！ ころぶもんか

秋田 大塚 義久

白兎鮭の卵を目にしている

朝鮮 河野 砥吉

おちさうだピカリピカリと冬の星

群馬 ケノツキサト

逃げたきり来ぬか雀の影法師

雪の日や、雀が風呂場のぞいてた

雪兎溶けこましたる湯槽かな

東京 菅家 省三

竹馬に乗つて轉んで泣き出すな

東京 醍醐 正明

節分や障子にあたる豆の音

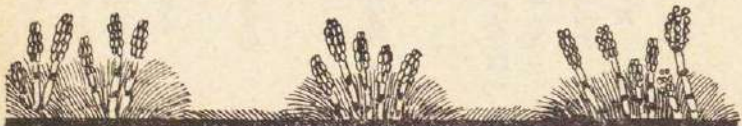
愛知 伊藤 きよ詩

たんぼうさん母なし草にすゝやいな

東京 篠崎 雀彦

春の日やころころ仔犬のお角力哉

東京 篠崎 雀彦





童謡

野口雨情選

(大人篇)

寒かろと
そつとのぞけば
船の灯が

なぜか小さい
晩だつた

お乳が
ほしいとないてゐる
生れたばかりで
ぶつばん ぶつばん
なくのは
佛法僧鳥よ

菅笠が
三つ四つ五つ
ちらちらと
見えてひるまの
呼子鳥

海ひよどり

林 宵雨 (東京)

佛法僧鳥

村木 良三 (東京)

ひる

宏 文 (大阪)

海ひよどりの
啼いてきた
ゆんべは寒い
晩だつた
海ひよどりも

高野の山奥で
ぶつばん ぶつばん
なくのは
佛法僧鳥よ
生れたばかりの
佛法僧鳥よ

赤いはお山の
べにつゝじ
ひはら松原
たびの人
横尾参りの

病氣がなほつた
相馬 孝三 (福島)
梧の葉かぶつた
鈴かけもいだ
手押車に
妹をのせた

僕の病氣は
なほつたよ

つけましよか

お目々ばつち
京人形

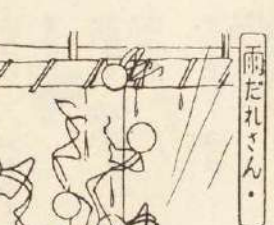
お月さんの路は
銀の銀の路よ

篠 藪

鷺山 夕花 (長野)

甘露は堀られた
のじこは啼いた
馬の来る路
野菊が咲いた
僕の病氣は
なほつたよ

雪のお窓を
あけてみりや
紅賣り小さく
橋の上



しのさゝ藪の
さらさら時雨
さらりと降つて
あとすぐはれた
しのさゝ藪の
ぬれ葉の奥で
簾鷺が啼いて
さみしい薄日

寒 紅

竹内 武雄 (東京)

お月さんの路は

湖 なぎさ (東京)

寒紅 くち紅
買ひましよか
粉雪ははらはら
窓の外
人形のお口に

お月さんの路は
波の波の路よ
キラリキラリ光る
一本路よ

馳け馳け行けば
行けそな路よ

どこかで誰か
呼んでるやうな
しの笛吹いて
とぼとぼかへる

稻荷祭り

富岡 師行 (東京)

お稻荷さんは正一位
とつびさび
びいしやらあ
軒並み行燈
火がついた
小供鉢巻すそからげ
擔いだ太鼓が
ドーン ドン
打つ度び小供は
肩すぼめ
お稻荷様は細小路
お宮の格子戸覗いたら
御幣くわへた
お稻荷さん

大明神の顔してた

雨だれさん

河邊すみ子 (東京)

雨だれさん雨だれさん
雨だれさんは
いつでもおんなじ
おかほだね
雨だれさん雨だれさん
雨だれさんは
どこもおんなじ
おかほだね
雨だれさん雨だれさん
雨だれさんは
ぼつとりひとりごと
云つてゐるね

ふきのとう

山田貞四郎 (千葉)

ぼつとり あどい芽
ふきのとう
笹がれ 小やぶの
かげに出た
ふきのと ふきのと
まだ早い
霜降り 雪降り
寒い風
まだまだ 春は
遠いのに
春 雨
小堀 義夫 (静岡)

一四二

けむり雨だよ
ほそぼそと

ぬれてほんのり紅さして
花もほぐれる
ぬくい雨

おぼろにけむる葉屋から
静かにもれる
糸ぐるま

時雨

新倉しげる (神奈川)

坊やおぶつて
空みれば
母さん今日も
時雨だよ
坊やおべいも

かはかずに
母さん冷たい
風が吹く

坊やおぶつて
空みれば
母さん今日も
時雨だよ

蝸牛

一の瀬ゆきみつ (東京)

お背戸の鴉に
つゝかれた
ましまし
つぶろの蝸牛
月のよい夜に
こつそりと

海邊の方へ
にげました

やど蟹つぶろに
なつたかと

朝の濱邊に
出て見たりや
すてたお家の
貝殻は貸家の
札がありました

見つかつたまり

椎名 正雄 (東京)

鬼さんいゝよ
もうあいで
ひとりかくれた

やぶのかけ

そつとかさんだ
足もとに

目につかつたまり。



いつかのまりが
おちてゐた

三ヶ月

小山 富之 (愛知)

旅をしながら
頬白は
緑の森を
とぼくくと
母さま逢ひに
行きまする

旅をしながら
三ヶ月は
青い空を
とぼくくと
夢の残りも
取りに行く

一四三



童謡

野口雨情選

(子供篇)

かへる (賞)

東京 篠崎竹之助 (零四)

かへるの子供が

ないてゐる

グツコ〜と

ないてゐる

お父さんにしかられて
ないてゐる

冬の日 (賞)

神奈川 金子 (零五)

たのしい楽しい

山の中

らんの花がにっこりと

ちいちく鳴くのは

何の鳥

ぼか〜日がさす

たのしいね

兵たいさん (賞)

福岡 坂下 (零二)

兵たいさん

きつかる

はいのうかついで

きつかる

ゆきがふつても

テッポウかついで

きつかる

大しやうは

おうまにのつて

きつかる

う ま (賞)

福岡 野田 (零二)

うまが

つめたいのだらう

それで

あばれるのだらう

はしやひさのちぢさんも

さぶい

こすもす

朝鮮 河野 (零五)

お庭のこすもす

ゆうらゆうら

とんぼがとまつて

ゆうらゆうら

とんぼといつしよに

ゆうらゆうら

あられ

福岡 森 (零二)

あられが

ふつた

さむい道が

こぼつて

カラシ カラン

みこし

京都 北野 (零九)

わつしよい〜

みこしだみこしだ

そらかけみこしだ

大人も子供も

男であれば

そらかけみこしだ

わつしよい〜

雪

大連 佐藤 (零五)

ちらりちらり

降る雪は

白いふへへを着てゐたよ

どこに行くのか

知らぬけど

淋しそうに降つてたよ

あかちやん

埼玉 黒川 (零三)

あかちやん

はあはが

生えたのね

おかしをうまそに

たべてゐる

あかちやん

はあはを

見せてくれ

あれ〜三本

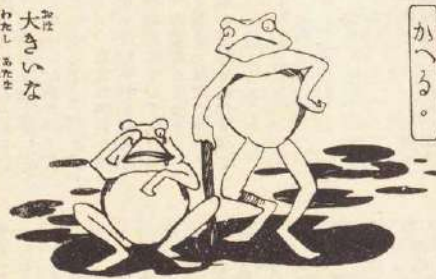
生えたのね

私 (わたし) のてまり

大分 三浦キヨコ (零五)

私 (わたし) のてまりは

か〜る。



大きいな

私の頭より

大きいな

ほんとに大きい

てまりだな

お正月

熊本 山村カエ子 (零五)

追羽根したい

まりもつきたい

お手玉もしたい

お正月

スゴロクしたい

トランプしたい

加留多もしたい

お正月

雨あがり

朝鮮 山本 (零一)

早い〜雲がかける

もう早せみが

なき出した



通信

新おとぎ唄について

野口雨情

今月から暫くの間、これまでの童話の代りに『新おとぎ唄』を掲げることになりました。この『新おとぎ唄』は、形の上では、童話と同じやうに、同じやうなことを調子のある言葉で云ひあらはした唄ですが、ちよつと口づさんだだけでは、気がつきませんが、童話と名づけることは、厳格な意味で——童話を邪路に引き入れる心配がありますので——いけないと考へましたために『新おとぎ唄』と名づけたのであります。

そのわけは、童話は兒童の世界の自然詩でありますから、必ずしも歡びとか明るさとかを基とせねばならぬといふ偏した約束

はありませんが、この『おとぎ唄』になりますと、どこまでも歡び、明るさ、微笑と云ふやうな事柄に材料をとらねばなりませんから、勢ひ意識的になるので、その點が童話と違ふのであります。しかし、さうした唄も一面に於ては、やはり兒童教育上必要なことは申すまでもないことですが、ここに注意せねばなりませんのは、いくら『おとぎ唄』だからと云つて、兒童の純真な趣味を醸成させるやうな事柄を緊張味のたない言葉で、平面描寫的に言ひあらはすことだけは斷じて避けねばなりません。

これから毎號、引き續き『新おとぎ唄』について各方面から私の感想を述べてゆくつもりであります。

編輯室より

▽やうやく春が近づいて來ました。編輯所の連中、みんな大喜びです。

▽『金の星』も百號を一期として、四月號からは御覽の通り、編輯の方針を大分に改めました。大人びた文藝趣味をさけて、あくまでも、少年少女の皆さんの本當の親しいお友達となつて行かうとつとめてあります。

▽お仲間間の『金の星』が二月號限り休刊となつたのはまことにさびしい事ですが、『金の星』の使命のいよゝ大いことを感じます。

▽私どもは全力をつくして『金の星』をますます皆さんに親しみの深い雑誌にして行くやうにいたします。

▽五月號はすばらしい立派な雑誌を作らうとして、一同努力いたしますから、どうぞ次號をお待ち下さい。(記者)

募集童話に就いて

編輯部

今月は應募作が非常に多いので、運者の立石先生もさぞお骨が折れたことと思ひます。で推薦作を發表する豫定でしたが、紙面の都合で次號へ廻りました。次號に選評とともに發表いたします。

日本童畫協會

第一回童畫展覽會

日本童畫協會の童畫展覽會は三月十六日より、同二十二日に至る七日間、銀座松屋呉服店にて開催され、同會員の初山滋、岡本歸一、川上四郎、武井武雄、村山知義、深澤省三、清水義雄、(いろは順)諸畫伯の作品が陳列されます。又四月初旬、大阪の三越呉服店にて、五日間展覽會を開くとのことです。

二月號考へ物當選發表

答、木の上にあるのはエスビ

これは問題がやさしかったせいか、正解者が非常に数に上り、その整理のために編輯部は大混雑をしました。嚴密な抽籤の結果左の方々が入賞されました。

一等二名(參照圖書切符)
 東京市牛込區薬王子町七一 岸 典二
 台湾高雄州旗山

二等三名(二四圖書切符)
 東京市京橋區明石町卅一 安保桂子
 奈良市西包永町四 佐藤 捷
 朝鮮平壤府外勝湖里 三浦壽美
 山根貞子

三等十名(五十錢圖書切符)
 ○札幌 川上哲太郎 ○長野 渡邊正純
 ○松山 佐藤愛子 ○大連 宮島貞利
 ○東京 奥山益朗 ○京都 横井永吉
 ○東京 川斐 春 ○朝鮮 河野 浩
 ○福島 新國 勝 ○福島 宮下時子

四等一千名(金の星特選エハガキ)
 紙面の都合上、氏名の發表を見合せ、賞品の發送を以つてこれに代へます。

童心句掲載外佳作

- 梅田雄太郎(京) 菅家 梅子(京)
- 西澤 孝一(京) 川島 勝(愛知)
- 出澤 良男(富山) 松本 秀穂(東京)
- 内田みわ路(茨城) 村木 良三(東京)
- 川島 省三(東京) 前田 修(兵庫)
- 吉岡 峰次(京) 小林 安子(青森)
- 後藤 英二(岐阜) 後藤 賢二(東京)
- 醍醐 正明(東京) 柴野 利男(東京)
- 中戸 司郎(群馬) 中里 素行(神奈川)
- 持田ミサオ(崎玉) 佐々木竹松(富山)
- 三島 雪男(廣島) 大塚賢之助(秋田)
- 保坂 卓朗(秋田) 平川忠次郎(秋田)
- 兒玉 新一(秋田) 近藤恭太郎(秋田)
- 小林 直次(愛知) 幹 葉津子(神奈川)
- 藤沼勝太郎(栃木) 新倉しげる(神奈川)
- 須賀 たき(福島) 和氣伊勢雄(東京)
- 今井小太郎(山梨) 板谷 邦直(東京)

童話掲載外佳作

- 後藤 英二(岐阜) 柴野 利男(東京)
- 上田 弘一(東京) 東山 辰夫(大阪)
- 出澤 良男(富山) 長谷川孝郷(茨城)
- 狩野 忠信(東京) 菊松 竹夫(大阪)
- 新國 章子(神奈川) 兼松 道子(大阪)
- 鈴木 白峰(福島) 谷 秋雨(大阪)
- 鈴木 白峰(福島) 谷 秋雨(大阪)
- 林 潮花(山形) 西浦 孝一(京都)

新誌友名簿

- 磯本 壽村(群馬) 黄 華 沫(台湾)
- 東洋 輪(京) 玉井哲太郎(大阪)
- 小口すま子(長野) 綿貫 博(神奈川)
- 中城 勇子(廣島) 山口 浪子(茨城)
- 吉川 泰美(長野) (以下次號)

金の星 四月號

出版だより

出版部より

○三井信衛先生の「少年大飛行家物語」は出版前から非常な評判で、日本にはじめてですし、殊に一命を賭して大冒険を行った大西洋横断のリンドバーグ大佐の話や、歴史はじめてはじめて北極を横断したアムゼンの話など、誰だつて知りたいと思ふでせう。

○からいふ決死の大飛行家の話がたやすく面白く読めるのですから此の本が大評判となつたのはもちろんです。お待ち兼ねの此の本もいよいよ發行になりました。どしどし御注文下さい。

○此の外二月中には、豫定の通り「親孝行な少年少女の話」や大冊の「アラビヤナイト」などが發行になりましたが、いづれも「金の星社」でなければ出来ない本として大評判でした。

○「親孝行な少年少女の話」は、大戸喜一郎先生が苦心の名著です。感心な十九人の少年と少女の話を集めたもので、この本こそ、どの家庭でも、どの學校でも、一冊は持つてゐて、愛する少年少女の教育の爲めにも讀ませなければならぬものと思ひます。

○また、今度出版の「アラビヤナイト」は世界に有名なアラビヤナイトの中で、最も面白いお話を運び、それに外國の有名な挿話をそのまゝ深山に入れてあります。ですから、こんな立派ない「アラビヤナイト」はないといはれてゐます。書店で一度御覽になつたら、成る程と思ひになるでせう。

○さて、三月は二月に引ついて一大計畫を實行してをります。三

鳥羽川先生の「八幡太郎義家」は、皆さんから出版を待ち兼ねられてゐる本です。七日頃までにはいよいよ發行になります。この外に「金の星児童文庫」が遂に發行になります。定價は九十銭といふ安いもので、本の装幀と厚さは普通二冊位の立派なものですから、これこそ發行になつたら「アツ！」といはれるものです。装幀など、これまで日本のどの書店でもやつた事のない、美しい立派なものです。

新しく出た本

○スペイン童話集 (豊島次郎編)

美しい、なつかしい童話集です。一番始めの「悪魔のびんづめ」から始まつて、最後の海の怪物に至るまで、どれもこれも皆すぐれた童話ばかり、皆さんをして知らず知らずの内にお伽の國へつれて行つてしまふ不思議な力を持つてゐます。(四六判箱入挿畫多數入、定價零圓五十錢送料十二錢、東京市外巢鴨上駒込廿八 金蘭社發行)

○御手々つないて

(上澤謙二物語集)

在來の童話にあきたらなく思つてゐる著者が、材料を「事實」の上にとり、高雅なる詩調と、たくまざる教訓と興味とを織りまぜて著はされた、實に立派な著書である。廣く世の少年少女に推奨したい。(四六判箱入挿畫本、挿畫數葉、定價九十錢、東京市神田區北神保町二 新生堂發行)

四月號懸賞考へ物



この男は、なにを拾つてゐるのでせう？
四月號の「金の星」をお讀みになつた方にはお分りになります。下の紙に書いてお送り下さい。

四月號考へ物おこたへ用紙

おこたへ	
ところ	なまへ

○必ず右の答案用紙をつかつて下さい。ハガキに書いてはけません。

○書いたら封筒に入れ、開封にしてたせば二錢で戻します。

○宛名は 東京市外田編三五二番地「金の星社」ゆき

○しめきり 四月一日

- ご 一等 (二名)……………金參圓(圖書切符)
- ほ 二等 (三名)……………金貳圓(圖書切符)
- う 三等 (十名)……………金五十錢(圖書切符)
- び 四等 (二千名)……………金の星特選エハガキ

少年文學名著選集

◇四六判入類美本◇定價壹圓廿錢◇送料二十錢◇

<p>(1) 十五少年漂流記</p>	<p>(2) 家なき子</p>	<p>(3) 黒馬物語</p>	<p>(4) 父戀し</p>	<p>(5) アーサー王騎士物語</p>	<p>(6) 家なき娘</p>	<p>(7) 漂流二百三十日</p>
<p>佛國ジュール・ベルヌ原作、船田史光譯(挿畫數十葉入)十五人の少年が絶海の孤島に漂流し、そこであらゆる冒険を行ひ、漸く我が國へ歸るまでの勇壯なる物語です。</p>	<p>佛國マローロ原作、三宅房子譯(挿畫三色版多敷入)不思議な運命にもあそばされた孤兒が、旅藝人となつて村から村へとさすらひ歩く涙と教訓に満ちた一大雄篇です。</p>	<p>英國アンナ・シーウェル原作、永橋卓介譯(挿畫多敷入)一匹の黒馬が、自分の一生に出遇つた嬉しい物語や悲しいお話を皆さんにお聞かせしようといふのです。</p>	<p>神野岩三郎著、行方不明になつた父を尋ねて母と二人の子供がはる／＼と滿州まで渡つてゆくといふ哀切極まりなきお話です。この本を讀んで泣かないものはありません。</p>	<p>イギリスに昔から傳はる名高い傳説で、アーサー王をめぐる百五十人の圓卓騎士の血あり涙ある一大武勇傳です。不朽の名作として誰知らぬ者もありません。(挿畫多敷入)</p>	<p>佛國マローロ原作、三井信衛譯(挿畫色刷多敷入)廣い世界に只一人投げ出された少女パリンタは如何にして自分の運命を切開いて行つたでせうか。家なき娘の姉妹篇。</p>	<p>佛國ジュール・ベルヌ原作、久米秋一譯(挿畫五十枚入)木の葉のやうな筏に乗つて大西洋の真中を二百三十日の間漂流一大漂流奇譚です。好奇心に富む少年の絶好の讀物。</p>

懸賞創作募集

【意注】童童童 【意注】童童童

懸賞は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことも諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに句なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)ともにおとさないやうにして下さい。用紙は童心句はハガキ、童話や童話はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は三月廿九日(その以後は次號へ廻る)發表は六月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

(一) 一般讀者の創作

童話は十五行以内、童話は二十字詰三百行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には一圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入賞」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所氏名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

童話 野口雨情先生選
童話 立石美和先生選
童話 野口雨情先生選

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢
一年分十二冊(送料共)四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ずつから、御注文の節はこの分だけ加へずにお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【送金】
御注文は必ず前金で御拂込み下さい
送金は振替が一番便利で御座います
切手代用は(送金切手)一割増しです
何れも送金何れよりと書いてください
住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和三年三月七日印刷納本(毎月一回)
昭和三年四月一日發行(日發行)

編輯兼發行人 齋藤 保
印刷所 三賞印刷合資會社
東京市外田端三百五十一番地
電話小石川五三三八七番

K2A 38

磨齒ニハイラ

朝がきました。
軒の雀がチンチンいふよ。
二人仲好く齒をみがきませう。
あまい涼しいライオンねりはみがきで。

